2010 5



Architecture and Society
建築と社会

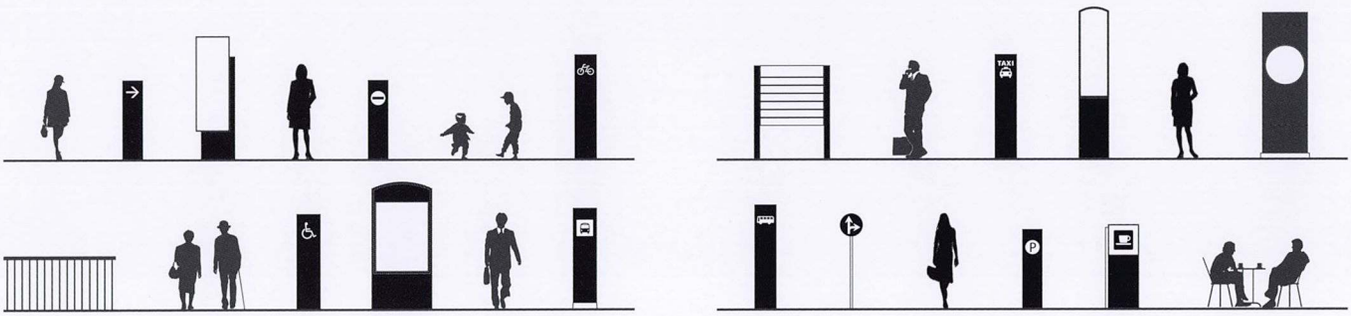
特集/ホスピタリティのあるケア空間

日本建築協会

SIGN / DESIGN , PLANNING , ENGINEERING

SUNWAY

sunway-sign.com



株式会社 サン.ウェイ　一級建築士事務所

本社 〒530-0044 大阪市北区東天満１丁目11番２号 TEL 06-6353-4732 FAX 06-6353-4820　東京営業所 TEL 03-6229-5967　九州営業所 TEL 092-874-2277

写真マンガでわかる

建築現場管理100ポイント



玉水新吾 著
阪野真樹子　マンガ



四六判・224頁
定価1995円（本体1900円）

整理整頓の励行、手抜きのできない現場の実現によって、職人のマナー向上やコストダウン、クォリティの高い仕事をめざそう。本書は、実際の建築現場に見られる管理の悪い例を写真マンガで指摘。その現場の問題点と改善のポイントを解説し、管理のゆき届いた良い例もビジュアルで明示した。現場管理者必携のチェックブック。



もくじ

第1章　品質管理
第2章　コスト・工程管理
第3章　安全管理
第4章　人間関係管理
第5章　環境管理



管理の良い現場、
悪い現場が一目瞭然！

著者略歴

玉水新吾（たまみず　しんご）
1953年京都市生まれ、名古屋工業大学建築学科卒業後、1976年から大手住宅メーカーにて、住宅現場の施工管理・品質・保証・工程・安全衛生・環境・技術研修・知的財産・教育など、住宅技術一筋。
著書：『現場で学ぶ住まいの雨仕舞い』『建築主が納得する住まいづくり』（学芸出版社）、『低層住宅施工現場のCIS』『かんたんCISマナー』（ともに共著、PHP研究所）

学芸出版社

〒600-8216 京都市下京区木津屋橋通西洞院東入
tel 075-343-0811　fax 075-343-0810
http://www.gakugei-pub.jp/ E-mail info@gakugei-pub.jp

平成22年度 通常総会開催

来る６月18日（金）に日本建築協会通常総会を開催いたします。
通常総会終了後には、総会出席者及び会員を対象に、下記のとおり講演会並びに会員交流懇親会を開催いたしますので、多数のご参加をお願いします。

と　き　2010年 6 月18日（金）
16：00から
ところ　大阪マーチャンダイズ・マートビル20階
東天紅

議　題　①平成21年度事業報告
②平成21年度収支決算報告
③役員改選の件

総会の正式開催通知は、５月下旬頃に各会員あて、別途送付します。
・当日は軽装でご出席下さい。

赤尾建蔵氏講演会「建築に携わる者によるNGO活動 - ネパールの学校建設-」と会員交流懇親会の開催

■赤尾建蔵氏講演会「建築に携わる者によるNGO活動―ネパールの学校建設―」

貧困、衛生問題、自然破壊などは多くの開発途上国が抱える問題である。これらの真っ先に犠牲になるのは、いつも子供たちです。私たちはアジアの開発途上国を訪問する過程で、子供たちの学ぶ場や機会が少ないことを知りました。貧困の解消はまず教育からと考えたのです。私たちは会社に勤めながら、仕事に支障をきたすことなく、自分の技術を生かしたボランティア活動を進めていくことを、なんとか実践したいと考えました。
工事を通して、現地の村人や日本の多くの支援者と交流し、日常業務では味わえない「ものづくりの原点」を体験し、感動を覚えたことを映像で紹介します。
（赤尾建蔵）



と　き　2010年 6 月18日（金）
17：00～18：00
ところ　大阪マーチャンダイズ・マートビル20階「東天紅」
大阪市中央区大手前1-7-31
定　員　100人（参加費無料）

■赤尾建蔵（あかお　けんぞう）氏プロフィール
1967年　株式会社　竹中工務店入社　大阪本店設計部配属
2002年　財団法人　竹中大工道具館出向
現在に至る

■会員交流懇親会

会員相互の情報交換、交流、親交を深めるため会員交流懇親会を開催。
と　き　2010年 6 月18日（金）
18：10～19：30
（講演会に引き続き開催）
ところ　東天紅（大阪マーチャンダイズ・マートビル　20階）
会　費　5000円（当日徴収）
事前にお支払いいただく場合は下記口座へ。
郵便振替口座 00910-9-39975
口座名義 社団法人日本建築協会
申込先　㈳日本建築協会総務課
下記のいずれかでお申し込み下さい。
TEL　06-6946-6981
FAX　06-6946-6984
Email　soumu@aaj.or.jp
申込締切　６月11日（金）
・当日は軽装でご出席下さい。

講演会・懇親会FAX申込書（きりとり）

1．申込区分（○印をお願いします）
①講演会のみ参加　②懇親会のみ参加　③講演会・懇親会の両方参加

2．６月18日の通常総会出席予定（○印をお願いします）
①出席予定　②欠席予定　③未定
（総会開催通知は５月下旬頃に各会員あて別途送付いたします）

3．懇親会会費の事前振込（○印をお願いします）
①あり　②なし

申込者氏名	
ご連絡先	（職場・自宅）
ご連絡先TEL	

総会議決お知らせ

平成22年3月24日開催の平成21年度第2回通常総会において、下記議案が原案どおり承認されました。

1.平成22年度事業計画
2.平成22年度収支予算
3.名誉正会員推薦の件

1. 平成22年度事業計画

1. 平成21年度の事業概況

平成21年度の建設業界を取り巻く環境は、景気停滞に伴う工事着工件数の減少が続くとともに、大幅な公共工事の削減等により、低迷状況から脱しきれず厳しい状況が続いた。

また、改定建築士法、改定建設業法の施行等に基づく建築物に対する信頼確保のための法整備の成果が現れつつある。

国土交通省において設計・工事監理等の業務報酬基準が改定されたが、その浸透が期待されるところである。

当協会の各事業においては、それぞれの事業における肌理細かなコスト削減を行なうなど、各事業の状況に応じた改善等を行った。個別の事業については、「建築と社会」の発行をはじめ、概ね前年度と同様の事業を実施した。

このようにして17年度以降財政の縮小均衡を図り、支出抑制に努めた結果、事業収支は18年度、19年度、20年度決算においても順調に推移してきた。21年度決算においては景気停滞の影響等で、会員口数、会員数の減少が引き続くこともあり、決算数値が前年度より低下する見込みである。

今後とも会員確保の努力を継続していく必要がある。

2. 平成22年度の活動方針

各常設委員会の基幹事業は、40年、50年の実施年数を数え、会員の枠を超えて、それぞれの関係者間に定着しており、その社会的役割も大きい。近時の建築基準法・建築士法改正等を踏まえ、建築に従事する者の資質の向上が求められる。

また、協会の将来のために若い技術者のニーズに即した新しい事業の掘り起こしが求められる。

そのためには協会の枠（会員）のみにとどまらず、有為な人材の育成に努めることを活動の柱として、

- 会員外の一般参加者が参加できる事業
- 他団体との交流・連携事業
- 若手・中堅技術者の参加を促す事業（例　コンペ・講習・書籍発行）

等の具体化を図る。

協会設立100周年を見据えて、10年間にわたり展開する事業を行うために平成19年度に編集委員会のサブ委員会として10年委員会を設置した。

- 協会設立100周年の2017年まで今後約７年間にわたり、次のとおり100周年記念事業を展開する。

①10年委員会において、20年度から「学生向け建築現場見学会」及び、「大阪かくれたええとこ再発見コンクール」を実施した。22年度も継続するが、コンクールについては次の段階に移行する。

②21年度から実施している関西の建築家を紹介するページを会誌に設け、取材には若手会員の参画を得て100周年時に単行本「関西の建築界／群像」として発行する事業を継続する。

③同様にして実施している「再読　関西の近代建築」の発行事業を継続する。

3. 平成22年度活動計画

（1）出版委員会

「建築技術選書」と「プロのノウハウ」の企画・編集

当委員会は、建築技術の単行本発行を企画し出版することを目的として、時代のニーズに即した新しい著者の発掘を第一義的に行い、21年度で累計105冊の発行に達した。また、新たな出版に合わせて、この出版書をテキストとする著者の講習会を実施した。

平成22年度においては、企画執筆中の図書を積極的に発行する。

（2）教育委員会

①建築工事実務講習会の実施

昭和32年以降、毎年主として中堅クラスの建築技術者を対象に標記講習会を実施。平成21年度で延べ85回を数えている。

平成21年度は、本部・東海支部ともに１日コースで各１回実施をしたが、本部の参加者数は昨年より増加し、収益性は大幅に向上した。平成22年度は、平成21年度と同様に、本部、東海支部ともに年１回実施する。

②工高生デザインコンクールの実施

工高生の設計技能向上のため、昭和30年に創設。平成21年度で第55回を数えた。平成21年度は参加校数28校、応募作品数105点と若干増加した。経費の節減を図りつつ、22年度も21年度同様に実施する。

③工高建築科優秀卒業生の表彰

高等学校、専門学校の優秀な建築科卒業生を表彰することにより、本人の研鑽意欲の向上を促し、また激励することを目的とし、昭和27年より実施してきた。毎年約180校の申請があり、毎年申請する学校も多く重要度が高いので、平成22年度もこれまで同様実施する。

④大阪府住まい・まちづくり教育普及協議会への参画

大阪府、(社)大阪府建築士事務所協会、(社)大阪府建築士会、(社)日本建築家協会近畿支部等で構成する協議会に加入したので、諸行事の実施に協力する。

（3）事業委員会

情報見学小委員会

時代に応じたテーマによる催しを、年４回程度実施し、著名建築物や、茶室、近代建築等の見学会、並びに話題建築について、設計者・施工者等より話を聞く場を設ける。

平成21年度は、見学会は４回（うち１回は茶室見学会）開催。平成22年度は、21年度同様４回程度開催する。

（4）編集委員会

①会誌「建築と社会」の発行

会誌「建築と社会」は、大正６年の創立以来、当協会活動の中心にあり続け、会員相互あるいは会員と社会を結ぶ役割を果たしてきた。

記事内容のより一層の充実につとめる。

②青年技術者の顕彰

満35歳以下の青年技術者を対象とする青年技術者顕彰制度は21年度で第56回に達し、建築界の優秀な人材を社会に顕彰してきたが、平成17年度からその意義をより一層深めるため、表彰式、及び受賞者も出席しての懇親会を併せて実施している。

平成22年度も顕彰制度を実施するとともに、協会役員等や青年技術者同士の交流の場として、懇親会を実施する。

③「建築と社会」賞の顕彰

会誌に掲載された本誌の趣旨にふさわしい社会性、環境などに配慮した建築作品や建築に関する論文、記事などを顕彰する。平成22年度も継続する。

④「関西の建築界／群像」の発行

関西の建築家を紹介する頁を会誌に設け、取材には若手会員の参画を得て、100周年時に単行本「関西の建築界／群像」として発行する事業を継続する。

⑤「再読　関西の近代建築」の発行

関西における歴史的名建築について個々に取り上げ解説し、会誌に連載する。創立100周年の記念事業として、連載記事をまとめて書籍と

して発行する事業を継続する。

【10年委員会事業】

①建築現場見学会

次世代の建築界を担う人材の育成に繋がることを目的として、設計の意図を生かした建築現場やそれを支える施工者の工夫、また現代技術を駆使した工場での製作過程など、さまざまな“ものづくり”の実際を総合的に体感できる場を、主として学生に提供する。

②大阪ええとこそうせい（創生）プロジェクトの実施

大阪「かくれたええとこ」再発見コンクールの開催

このプロジェクトは、普段見過ごされそうなまちの資源を発掘し、“こうしたらもっとよくなる”“もっといきいきする”等のアイデアを創立100周年の2017年まで様々なテーマで募集することにより、まちづくりや町おこし賑わいづくりに役立てていくことを目的としている。21年度はその２回目として「続大阪かくれたええとこ再発見コンクール」を実施した。22年度は「ええとこ」が持つ潜在的な魅力を生かすアイデア募集コンペ等に移行する。

（5）建材委員会

新建築材料の調査・検討・紹介

新しい建築材料の品質・性能の検討、設計・施工上の留意点等の調査を行い、会誌上で紹介する。

平成22年度は多角的な方法での建材を検討・調査し、会誌上で紹介を行う。（社）日本建築材料協会との連携にも留意する。

3. 名誉正会員推薦の件

名誉正会員推薦の件

内規第１条該当者　　５名

▶森口雅文氏　73歳

S.32.11.1入会

H.1.4～H.5.3評議員／H５年度～H９年度東海支部長／H6.4～H.9.3理事

▶片倉健雄氏　80歳

S.34.2.1入会

S.60.4～H.21.6理事／元企画委員長

▶溝神宏至朗氏　75歳

S.39.11.1入会

H.2.9～H.9.4理事／元編集委員長

▶岡田聿之氏　72歳

S.41.6.1入会

H.13.6～H.20.6理事

▶白石靜二氏　87歳

S.52.2.1入会

S.55.4～H.10.3評議員

＊名誉正会員推挙に関する内規

第１条　定款第７条第２号による名誉正会員の推挙の基準は、会員歴35年以上、年齢満75歳以上の者で理事、監事、支部長及び評議員歴が推挙日の前20年以内に３期６年以上あり理事会で推挙した者。ただし、現にこの職に在任中の者は除く。

会員歴と年齢については経過措置あり。

2. 平成22年度収支予算書　—平成22年４月１日から平成23年３月31日まで—

単位：千円

科目	予算額	前年度予算額	増減	備考
Ⅰ. 事業活動収支の部				
1. 事業活動収入				
①会費収入				
個人正会費	11,559	12,102	-543	４％減を想定
個人正会費(地方)	853	945	-91	10％減を想定
団体正会費	27,332	28,768	-1,436	５％減を想定
準会費	8	19	-11	準会員：１名
会費収入計	39,752	41,834	-2,081	
②事業収入				
編集委員会収入	15,025	17,025	-2,000	会誌収入、10年委員会事業収入
契約約款収入	4,231	4,072	159	契約約款販売収入
出版委員会収入	500	500	0	出版企画料、講座参加料
事業委員会収入	290	250	40	見学会、講演会参加料
教育委員会収入	1,000	1,000	0	実務講習会参加料
建材委員会収入	0	0	0	会誌収入に含む（新建材広告料）
雑収入	172	182	-11	80年史売上、事業協力金
事業収入計	21,218	23,029	-1,811	
③雑収入	231	170	61	預金利息他
事業活動収入計	61,201	65,032	-3,832	
2. 事業活動支出				
①事業費支出				
事業関係人件費支出	15,523	15,221	302	事業関係分が3.5名
編集委員会事業費支出	14,023	17,525	-3,502	会誌発行費、10年委員会事業費
契約約款費支出	2,670	2,718	-48	販売用約款購入費、送料
出版委員会事業費支出	130	130	0	講座経費、印税支払経費、委員会事業費
事業委員会事業費支出	230	220	10	見学会、講演会経費、委員会事業費
教育委員会事業費支出	1,380	1,200	180	工高生コンペ、講習会経費、委員会事業費
建材委員会事業費支出	0	0	0	会誌発行費に含む
雑支出	30	130	-100	80年史等発送代、切手代
事業費支出計	33,986	37,144	-3,158	
②管理費支出				
管理関係人件費支出	13,284	13,246	38	管理関係分が2.5名
退職給付支出	0	0	0	現状予定なし
福利厚生費支出	20	40	-20	職員福利厚生費
助成費支出	1,672	1,859	-187	３支部への助成金、交付金
会議費支出	970	1,026	-56	総会、評議員会、理事会、常設・特別委員会
旅費交通費支出	35	50	-15	アルバイト交通費含む
通信運搬費支出	430	440	-10	電話、ＦＡＸ、メール、郵送等通信費
集金費支出	700	800	-100	会費、グループ会費、広告料集金手数料等
消耗品費支出	1,850	1,980	-130	HP維持費，PCソフト、トナー、文房具外
備品購入費支出	150	300	-150	事務所内備品
修繕費支出	40	50	-10	事務所内修繕費
印刷製本費支出	50	100	-50	印刷製本費
光熱水料費支出	240	250	-10	電気代
保険料支出	20	20	0	火災保険料
租税公課支出	669	670	-1	消費税、法人府市民税
清掃費支出	30	40	-10	１回／年・事務所床清掃
建物管理費支出	4,560	4,580	-20	事務所賃借料等
雑支出	1,730	1,790	-60	監査、保守、協賛、購読、未収金償却外
管理費支出計	26,450	27,242	-793	
事業活動支出計	60,436	64,387	-3,951	
事業活動収支差額	765	646	119	
Ⅱ. 投資活動収支の部				
1. 投資活動収入				
投資活動収入計	0	0	0	
2. 投資活動支出				
①特定資産取得支出				
退職給付引当資産取得支出	714	595	119	事業所都合要支給額積立
記念事業積立預金支出	0	0	0	現状予定なし
特定資産取得支出計	714	595	119	
投資活動支出計	714	595	119	
投資活動収支差額	-714	-595	-119	
Ⅲ. 財務活動収支の部				
1. 財務活動収入				
財務活動収入計	0	0	0	
2. 財務活動支出				
財務活動支出計	0	0	0	
財務活動収支差額	0	0	0	
Ⅳ. 予備費支出	50	50	0	
当期収支差額	1	1	0	
前期繰越収支差額	47,827	47,826	1	
次期繰越収支差額	47,828	47,827	1	

(注) 平成22年度については、借入限度額を30,000,000円とする。

2010年は9月号掲載で、応募締め切りが6月30日となります！

若き創造者たちへ

「建築と社会」平成22年9月号
「第57回青年技術者特集号」へのおさそい

日本建築協会誌「建築と社会」は毎年「青年技術者特集号」を企画し、すでに56回にわたって若き優秀なプランナー、アーキテクト、エンジニアをめざす人たちを紹介してきました。

今回も、青年技術者選考委員会を設けて、青年技術者を選考いたしますが、昨今の建築に携わる技術者の多様化を考慮し、設計だけに限らず、計画、構造、設備、施工およびその他広く、建築に関連する分野から、優秀な青年技術者を募って、その不断の研究努力とすぐれた実績への情熱などを、「建築と社会」に掲載し、顕彰することにしております。

57回の企画にあたり、日常目立たない対象の実績も含めて、優秀な実績を積まれている青年技術者のみなさまのご応募をお待ちしております。

応募提出規定

1．応募される人は満35歳（平成22年７月31日現在）以下の青年技術者であって、本会個人会員に限る。
（選考合格後の入会も可）

2．原則として、本会会員であるすいせん者を通じて応募する。
すいせん者は被すいせん者（青年技術者）の勤務する組織の上司か上長とする。すいせん者が学校教官である場合はこの限りでない。また本人が組織の代表者である場合は自せんとする。

3．応募分野は特定しない。応募者は、たとえば計画、一般設計、住宅・インテリア設計、構造、設備、施工、技術開発、行政、情報、コーディネート等々その他の分野にあって、なしとげたすぐれた実績について、すいせんをうけ、下記の所要資料を1部、本会に期日までに提出する。

4．提出された資料は「青年技術者選考委員会」にかけて選考する。（なお、提出資料は特に指示のない限り返却はいたしません）

5．「青年技術者選考委員会」において選考された青年技術者は「第57回青年技術者特集号」（平成22年９月号）に掲載するとともに、表彰式を行い、記念品を贈呈する。

6．**提出資料**

■すいせん用紙

請求は、すいせん依頼先担当部署、または本会事務局へ。

■略歴

本人の氏名、生年月日、最終学歴、業歴、作品経歴など

■選考資料

資料は、④を含めて**A3判用紙5枚以内にまとめる。**

① 設計の場合――鮮明な写真、配置図および主要平面図、概要、設計要旨、その他設計内容を説明するに十分な資料

② 計画、構造、設備、施工の場合（それぞれの設計計画なども含む）――上に準じた資料

③ 上記以外の分野の場合――それぞれの分野にふさわしい資料

④ 上記①～③のいずれかの資料の実績において、応募者本人が関与した程度、役割、立場等を明らかにし、資料中、**本人が特に貢献した部分、または力量が活かされたと思われる部分の詳細な説明、考え方および将来的展望などについて、2000字以内に平易簡明にまとめたもの**（必要に応じ、図・表を用いて差し支えない）。ただし応募者本人の執筆に限る。**このコンセプトは、応募者の考え方を知る上で大変重要と考えているので、十分配慮されたい。**

7．**提出期限**　平成22年6月30日（水）

8．**提出先**　日本建築協会「青年技術者選考委員会」
〒540-6591　大阪市中央区大手前1-7-31
大阪マーチャンダイズ・マートビル7階
電話 06-6946-6981　FAX. 06-6946-6984
Email：ken-sha@aaj.or.jp

9．**青年技術者選考委員会**（平成22年度）

委員長　設楽　貞樹／安井建築設計事務所常務取締役
委　員　木多　道宏／大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻准教授
北村　潤／東畑建築事務所理事設計部長
吉田　文男／一級建築士事務所アトリエフォルム代表取締役
髙梨雄二郎／竹中工務店プロジェクト開発推進本部副本部長(西日本担当)
太田　寛／鴻池組大阪本店建築設計部長
桑原　進／大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻准教授
伊藤　昌明／日建設計設備設計部門設計長
古久保　真／清水建設関西事業本部設備設計部設計長
宇城　英彦／大成建設関西支店建築部品質管理室長
阪井　聡／大林組大阪本店建築事業部生産技術部部長

第57回青年技術者は、本年6月30日(水)までに応募できるよう準備をお願いします。

上本町YUFURA（上本町新歌舞伎座ビル）見学会

この見学会は、建築CPD情報提供制度認定プログラムです。
㈳大阪府建築士会（３単位）
㈳日本建築家協会（2.5単位）

上本町YUFURAは、2010年９月に創業百周年を迎える近鉄グループの発祥の地における記念事業として計画された。都心の住宅地として新たな脚光を浴びつつある上本町の新しい商業施設と、近鉄グループの新たな拠点となるオフィス、そして大阪ミナミの顔であった「新歌舞伎座」の移転による新しい劇場で構成された、ターミナル複合ビルである。

現在の上本町は、村野藤吾氏の手による上本町ターミナルビル、シェラトン都ホテル大阪が近代建築（モダニズム）の白亜のファサードの景観を形成しており、新しい建物も、この一連のいわば「上本町モダニズム」の景観を連続的に継承し、白亜の衣装を身に纏った現代的なファサードを目指した。

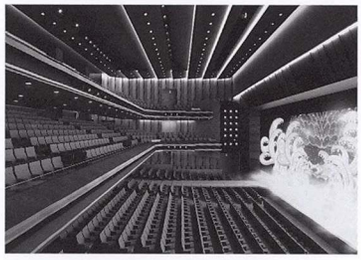
さらに新しく加わる「新歌舞伎座」では、その存在感を、同じく村野氏の手によるなんばの「旧・新歌舞伎座」の外観イメージの継承を狙って連続唐破風ルーバーとガラスの櫓により、対比的に表現している。

劇場内のデザインは、古式劇場の伝統的スタイルと新歌舞伎座の独特な趣を継承しながらも、スタイリッシュで現代的な和を感じさせる空間とした。客席は、新歌舞伎座の特徴であった、演者と観客の距離が近く、臨場感溢れる一体的な空間を継承し、間口28.1m、奥行き22.4mの横長で、奥行きの浅い３層構成の客席としている。客席数は花道設置時で、1,461席（車いす席を含む）を確保している。

舞台機構は、廻り舞台と花道にすっぽん迫りを備えた伝統的スタイルのプロセニアム形式で、間口の広い（幅20.0m、高さ8.2m）舞台が特徴である。吊物設備、音響、照明についても最新の設備を採用し、歌舞伎などの古典芸能から現代演劇、歌謡ショー、ミュージカルなど多様な演目に対応可能としている。

●建築概要
所在地　大阪市天王寺区上本町６丁目
建築主　近畿日本鉄道㈱
設計　意匠・設備／㈱日本設計
構造／㈱大林組本店一級建築士事務所
施工　大林組・錢高組・淺沼組・森本組共同企業体
敷地面積　5,536㎡
延床面積　38,104㎡
構造規模　S造（コンクリート充填鋼管柱）
地下１階、地上13階
竣工　20010年７月
建物用途　商業施設、事務所、劇場

日　時　2010年 5 月26日（水）
13：30～16：00
講　師　辰巳清一氏
（㈱日本設計建築設計部主管）
吉田博次氏
（大林組・錢高組・淺沼組・森本組共同企業体工事事務所所長）





集　合　現地／工事事務所２階
定　員　30名（申込先着順）
参加費　会員1,500円、一般2,500円
学生1,000円
申込方法　FAXまたはEメールで、
①催し名「上本町YUFURA」
②氏名
③会員・一般の種別
④職場名または学校名
⑤参加証送付先
⑥連絡先電話番号
⑦CPDを申請される方は、申請先の団体名を明記
申込先　㈳日本建築協会編集事業課
TEL.06-6946-6981
FAX.06-6946-6984
E-mail：jigyoka@aaj.or.jp

第27回茶室見学会 対龍山荘（たいりゅうさんそう）

（通常非公開 国指定名勝（庭園））

見学会後、日本建築について中村先生と懇談会を予定しておりますので、ご自由にご参加下さい（時間：30分程度）

日　時　2010年 6 月19日（土）
13：30～16：00
講　師　中村昌生氏
京都工芸繊維大学名誉教授
見学先　対龍山荘
集　合　現地／玄関前
京都市左京区南禅寺福地町22／京都市営地下鉄東西線「蹴上駅」下車１番出口より徒歩約５分、市バス「南禅寺永観堂道」下車徒歩約10分
定　員　30名（先着順）
参加費　会員4,000円、一般5,000円
学生は各半額
申　込　FAXまたはE-mailで、
①催し名「茶室見学会」
②氏名
③会員・一般の別
④職場名または学校名
⑤参加証送付先（郵便番号）
⑥連絡先電話番号
をお知らせ願います。
申込先　㈳日本建築協会編集事業課
TEL：06-6946-6981
FAX：06-6946-6984
E-mail：jigyoka@aaj.or.jp

今回も中村先生のご紹介により、「対龍山荘」を見学させていただきます。

対龍山荘は、明治期に南禅寺界隈に造られた多くの別荘庭園のひとつです。薩摩出身の実業家・伊集院兼常の別荘として建てられ、明治34年に彦根出身の京呉服商、市田弥一郎が所有してから、建築、庭園ともに改造されました。庭園は小川治兵衛（植治）の作と言われ、池泉回遊式の贅沢な造りとなっています。

全体の構成は、敷地西側に建物を配し、東に庭園を設けており、南北に細長い敷地の北側から書院（對龍台）、茶室群（聚遠亭）、居間群と続いています。書院である對龍台は、前面に展開する池にせり出して建てられ、深い軒を支える構造には、軽快に見せる数寄屋造りの妙技が発揮されています。対岸には豪快な大滝とのどかに回転する水車を望み、背後には東山連峰のひとつ瑞龍山（南禅寺山）が悠然とその姿を見せています。この瑞龍山に対する別荘であることから、対龍山荘の名がつけられました。

作庭技法上、特に優れたものとして貴重であるこの対龍山荘を、この機会にぜひご覧いただきたいと思います。

大阪歴史博物館「日本建築協会と関西の建築界」を開催

―㈳日本建築協会後援―

㈳日本建築協会は2004年６月に、大阪駅前第３ビルから現在のOMMビルに引っ越しました。その折、主に『建築と社会』誌の編集のために撮影した写真や集めた資料の一部を大阪歴史博物館に寄贈しています。
大阪歴史博物館は６月～７月にかけて、これらの資料のお披露目をかね、大阪を中心とした関西の建築界の歴史を写真や図面、建築部材などを通して振り返る展示を開催します。
また関連行事として、関西に軸足を置いて建築とかかわってきた人々によるシンポジウムも予定されています。

会　期　2010年６月２日(水)
～７月26日(月)
９：30～17：00
(金曜日は20：00まで)
毎週火曜日休館

会　場　大阪歴史博物館８階特集展示室
大阪市中央区大手前4-1-32
地下鉄谷町線・中央線「谷町四丁目」駅下車⑨号出口前

観覧料　常設展観覧料金の
大人600円、高大生400円
中学生以下、大阪市内在住の65歳以上は無料

出　品　約60点

■学芸員による展示解説
６月19日、６月26日、７月17日、７月24日。いずれも土曜日の14時から30分程度。
担当：酒井一光（学芸員）
会場：大阪歴史博物館８階特集展示室
参加：無料（ただし、入場には常設展示観覧料要）

■シンポジウム
「関西建築界のあゆみを語る」

パネリスト：
井須圭太郎(芦屋市立美術博物館学芸員)
設楽　貞樹(安井建築設計事務所常務取締役)
平田　雅利(平田タイル会長)
山形　政昭(大阪芸術大学教授)
司会：酒井一光（学芸員）
日時：７月３日(土) 13：00～16：30
会場：大阪歴史博物館４階・講堂
参加：500円
定員：250名（当日先着順）



新大阪ホテル
外観写真
(大阪歴史博物館蔵・
日本建築協会寄贈)

大都市にふさわしいホテルをつくることは、大阪の長年の悲願であった。新大阪ホテルは政財界の要望をもとに、最新の設備・意匠を誇るホテルとして昭和10年、中之島に完成した。設計には武田五一ら第一線で活躍する多くの建築家がかかわった。

第4回学生のための「建築現場見学会」参加者募集

■見学場所
「阿倍野A１地区第2種市街地再開発事業A2棟建設工事」(商業施設)
大阪市阿倍野区阿倍野筋1-2丁目ほか

※申し込みはFAXかメールで



完成パース

この見学会は竣工直前の現場見学会ではなかなか体験できない施工中の現場ならではの、生き生きとした躍動感や、多人数で現場を作り上げていく達成感などを肌で感じていただく機会を提供するものです。図面やCADでは実感できない、図面から構造物を実際に築き上げていくリアリティや、そこで従事する人たちの緊張感と誇りを若い感性で感じ取っていただければ幸いです。

みどころ　今回の見学対象は、大阪市阿倍野区の中心部に立地し、ターミナル駅に隣接する地下２階、地上６階、延べ床面積約18万m^2に及ぶ大型商業施設です。
見学会では、地上躯体工事と内外装工事の最盛期で、波型鋼板耐震壁や外壁ALC工事、天井内の設備配管工事、シャッター・建具等の内装工事の施工中の状況を間近で見ることが出来ます。

施工状況　地上躯体工事
外部仕上工事
一部内部仕上工事

設　計　安井建築設計事務所・東急設計コンサルタント共同企業体

施　工　竹中工務店・東急建設共同企業体

日　時　2010年７月９日（金）
14：00～16：30

定　員　40名

締切日　６月11日（金）

参加費　500円（資料+保険代）

〔申込書〕

名称	阿倍野Ａ１地区第２種市街地再開発事業Ａ２棟建設工事
学校名・学部・学科	
引率者職名・氏名	（おられない場合は記入不要）
学生氏名・学年	
学生氏名・学年	
学生氏名・学年	
参加通知書送付先住所 TEL・FAX	

問合せ：社団法人日本建築協会（片山）　TEL.06-6946-6981　FAX.06-6946-6984　e-mail：h-katayama@aaj.or.jp

建築と社会

Architecture and Society

2010
No.1058
日本建築協会

5

■特集予告
6月号／太陽光発電
7月号／建築と石

編集委員会(理事：平成21年度、
編集委員会：平成22年度)

■副会長
井上　豊
松村　孝治
■編集担当理事
上原　正行
木戸　徹
佐藤　栄一
佐藤友美子
◎設楽　貞樹
竹中　統一
立成　良三
松村　孝夫
吉村　英祐
■副委員長
勝山　太郎
米井　寛
■特集小委員会
■計画分科会
★計画系
△飯田　匡
飯沼　清明
鈴木　克彦
田中　慎治
田中　直人
紅谷　昇平
松田奈緒子
三宅　次郎
守井　辰
吉村　英祐
★建築計画系
荒木　宏之
奥村　明孝
菅野　忠司
神戸　嘉也
木多　彩子
楠　敦士
静　茂夫
△下坂　浩和
所　千夏
野田　隆史
桃杷　健一
松森　織江
米山　剛史
★インテリア・住宅系
小倉　一平
加藤　力
△神谷　浩司
黒柳　亮
田中　浩介
戸井賢一郎
ペリー史子
間渕　一博
■構造分科会
秋田　智
△石田　大三
岸本　光平
小芝　淳一
志摩　好宣
瀧野　敦夫
角田　耕一
難波　尚
橋本　宗明
松村　健
向井　洋一

■設備分科会
△赤澤　正治
梶井　宏修
北野　勝也
谷野　太志
夏井　重行
難波　利幸
橋本　直樹
福谷　周
桝井　貴廣
宮崎ひろ志
村上幸三郎
渡邊　裕之
■施工材料分科会
桜井　和男
中川　恒
平田　茂良
藤丸　啓一
山岡　篤人
△吉田　正友
■法令分科会
近都　学
河野　学
田上　幸二
西林　浩一
濱崎　秀和
山上　佳之
△吉田　純
鷲尾　真弓
■作品作風小委員会
居内　章夫
○池上　明
稲垣　和江
井上　雅祐
加嶋　章博
倉橋　尉仁
倉渕奈千子
澤田　純一
戸川　勝之
鞆野　淳司
豊田　充広
鳥居　久人
西田　佳代
芳谷　晴彦
増田　敬彦
山田　俊紀
■広告企画小委員会
上田　訓将
宇城　英彦
江本　孝弘
永平　達也
○前田　衛
南澤　浩司
森川　幸信
■10年委員会
赤木　隆
川上比奈子
熊田　将男
河野　浩司
齋藤　幸代
△菅原　幸也
△中村　文紀
○前川　治彦

◎委員長　○副委員長　△幹事

印　刷　2010年4月25日
発　行　2010年5月1日
発行人　社団法人日本建築協会
発行所　社団法人日本建築協会
　　大阪市中央区大手前1-7-31
　　電　話　06-6946-6981
印刷所　㈱NPCコーポレーション
定　価　1200円〔税込〕

Journal of the Architectural Association of Japan

特集●ホスピタリティのあるケア空間

■総論

医療福祉施設は、今●久保田秀男 —— 14

■各論

癒しの環境の計画史●上野　淳 —— 18
北欧における福祉施設のインテリア●二井るり子 —— 20
病院緑化におけるホスピタリティ●岩崎　寛 —— 22
医療施設のサイン計画●黒田裕子 —— 24
病院建築の評価～医業経営コンサルタントの視点～●槙　孝悦 —— 26
ケア空間のバリアフリー●吉田紗栄子 —— 28

会告　平成22年度通常総会開催．赤尾建蔵氏講演会「建築に携わる者によるNGO活動―ネパールの学校建設―」と会員交流懇親会の開催．総会議決お知らせ―平成22年度事業計画・平成22年度収支予算書・名誉正会員推薦の件―．若き創造者たちへ「第57回青年技術者特集号」へのおさそい．上本町YUFURA（上本町新歌舞伎座ビル）見学会．第27回茶室見学会・対龍山荘．大阪歴史博物館「日本建築協会と関西の建築界」を開催．第4回学生のための見学会．「阿倍野A1地区第2種市街地再開発事業A2棟建設工事」． 1

作品作風　京都銀行奈良支店 8

研究の風景　池田靖史研究室●慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科 10

gallery　まちのプチオフィス計画●東山　明 12

法令コーナー　建築確認手続き等の運用改善●国土交通省住宅局建築指導課 33

構造の頁　竹中工務店技術研究所「新耐火実験棟」●西村俊彦 34

再読 関西近代建築　旧橿原神宮駅（橿原神宮前駅）●桐浴邦夫 35

このまちが好き　わがまち自慢―空堀―●NPO高齢者外出介助の会 39

結果発表　続大阪「かくれたええとこ」再発見コンクール 40

関西の建築界群像　吉野弘恵●影林督諭 42

REPORT　環境保全部会公開研究会7・電線類地中化　できる理由 できない理由―電柱大国からの脱皮●高田　昇 44

information　平成22年度「建築設備診断技術者」資格取得講習案内．平城遷都1300年記念、大遣唐使展．「レゾナンス　共鳴」―人と響き合うアート．大阪歴史博物館特別展「昭和のおもちゃとマンガの世界―北原照久 大コレクション展―」．館蔵品展―様々な版画―．松井紫朗展 Hundreds of Gardens．正木美術館2010年春季展 天遊．マリオ曼荼羅展．エネ蔵2010～エネルギーソリューション&蓄熱フェアー～ 46

月間の動き　平成22年3月分 48

本文　デザイン　高橋善丸

今月の表紙
企画　間渕一博　企画・写真・デザイン　花城辰男

～酒蔵通り～
酒蔵通りは、かつてより店舗・釜屋・酒蔵を有する長屋風の建物が連なるまちなみです。石畳の上をぶらぶらと散歩するには適度な道幅であり、東西の商業軸と並行に配置されているため、商業地域との共存という点で様々なイベントを通じて歴史と関わり合うことができます。（間渕一博）

兵庫県伊丹市　伊丹酒蔵通り地区


京都銀行

作品
作風

設計・監理■
竹中工務店

施工■
竹中工務店

京都銀行奈良支店

平城遷都1300年で賑わうJR奈良駅近くに建つ銀行の支店である。
景観形成重点地区として整備が進む周辺街区の都市景観に配慮し、歴史的街並みの形成に貢献すると共に、地域に親しまれる建築を目指した。
敷地形状から導き出された建物ボリュームは、交差点に面するコーナー部を曲面とし、2.1m間隔で積層される庇スラブによって分節される。この庇スラブ間にアルミルーバーを配することで、建物を衣で覆うかのような優しい表情と、時の移ろいを感じさせる繊細な表情をあわせ持つファサードを実現した。
アルミルーバーは古都の伝統的なモチーフである格子を連想させ、庇スラブと合わせて建物の熱負荷低減に寄与する。このアルミルーバーには回転機構を設け、内部の人が任意に開閉することでファサードに変化をもたらす。
建物内各所に設けられたテラスは風を感じる憩いの場となり、足元のアプローチでは一年を通して花が咲き、四季折々の季節の移ろいが街行く人々の目を楽しませる。

(長谷川淳・木村直記／竹中工務店)

所 在 地――奈良市三条本町3-13
敷地面積――997.85㎡
建築面積――667.27㎡
延床面積――1,909.03㎡
構造規模――RC造　F4
工　　期――2009年４月～2009年12月
最 寄 駅――JR奈良駅
撮　　影――古川泰造







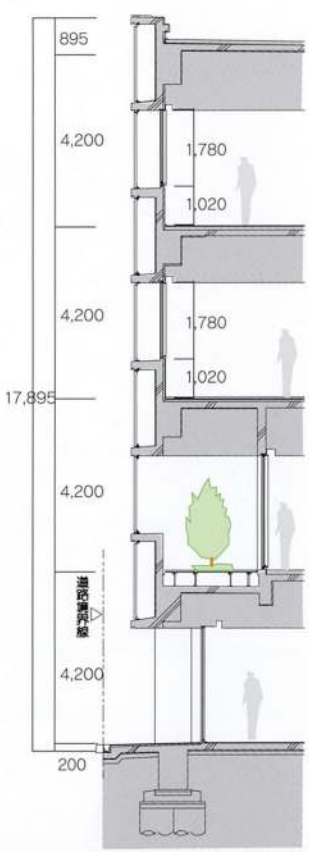












研究の風景

慶應義塾大学大学院
政策・メディア研究科

池田靖史研究室



■

慶応大学SFCの環境デザイン教育

慶應義塾は長いこと建築学科を持たない大学だった。正確に言うと今もそうした名称の学科は存在しない。しかし現在は理工学部のシステムデザイン工学科とともに、私のいる湘南藤沢キャンパス（SFC）にある大学院政策メディア研究科と環境情報学部、総合政策学部のプログラムの中から、一級建築士の受験資格要件を満たす科目群が選択履修可能なように整備された「環境デザイン」プログラムが用意されている。SFCでは環境情報学部だけでもバイオ関連から電気自動車、インターネット技術まで様々な分野を扱ううちのひとつに過ぎず、さらに私の所属する大学院の政策・メディア研究科という名称からは環境デザインという連想は起きにくいこともあって、どこで名刺を出しても説明に苦労するが、一方で様々な先端的分野がひしめき合う中で環境デザインを教えるメリットも常日頃から感じている。SFCの環境デザインを特色づけているのもその幅広さである。建築学のフレームにこだわらず、都市デザインやランドスケープデザインはそれと一体不可分なものとして扱われている。また情報技術と地球環境という二つの重要な視点はその既存学問の変革の鍵であると言うのが環境デザインだけでなくSFC全体の共有意識でもある。

私自身はと言うと、今でこそ大学人らしく振る舞っているが、大学を出て建築家の槇文彦氏のもとで修行し、その後建築家として活動をはじめるまでは教育や研究には全く無縁の人間だった。そんな私をいきなり准教授に据えたSFCの実社会から人材を求める積極的な姿勢に敬服する。研究・教育とデザインの社会的実践が車の両輪のように私自身の活動を支え、その双方にとってもそれこそが最も意味のある効果をもたらし、私自身の存在価値でもあるように今では思うようになった。そういう訳かどうか、我が研究室の扱う分野も幅広いものの、そこに共通で存在するのは、環境のデザインにおいて、アカデミズムでないとできないあたらしい可能性への挑戦と現実社会での実践を橋渡しすることだと思っている。

■

都市を活性化する仮設建築

建築設計の仕事をしていてよく感じるのは、実際の環境のうち建築デザインそのものが受け持っているのは比較的長期的な利用を前提とした部分が中心であるということである。住宅が住まい手の使い方ひとつで全く変わってしまうのは当たり前かもしれないが、都市的な公共空間の設計の時にこそ、建築と家具との間をつなぐような仮設的で短期的な要素のデザインが必要なのではないだろうかと思うようになった。市場の屋台のような存在は以前からあったし、建築と都市デザインの狭間で見逃されていた要素かもしれない。人間の活動に素早くインタラクティブに関係する情報技術のモデルでもあるし、これなら学生が積極的に現実社会に直接的に関われる実験が可能だというところもいいと思った。いくつかのプロトタイプを実験的に製作したが、中でもInstant Street Architecture Kit (ISAK)というエアチューブを使ったアイデアは実際に何ヵ所にも移動されて組み立てられた。超軽量で、短時間に組み立てが可能な建築の「部品」を考えようと言うテーマのもとに様々なアイデアから学生の一人が見つけてきた梱包用のエアバックメーカーでは熱圧着を使って少数でも生産可能なことから、我々の試みに協力してくれることになり実現にこぎ着けたものである。

■

木質建材利用とまちづくり

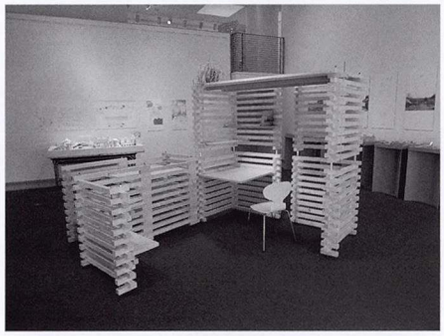
我々の研究室のある２階建て木造建物も環境共生建築の実験プロジェクトの一環として当時の学生も協力した研究の成果でもある。10年あまり使ってみて、泊まり込んで活動している学生たちが、木質建築の居心地の良さを一番よく知っている。大規模な都市の成長にだって、その原動力になるような人間の活動と精神がある。これは、ここ数年関わり続けてきた新木場地区のまちづくりで我々自身が学んできた事でもある。東京湾の埋め立て地である新木場は深川から集団移転してきた木材加工流通業の街として出発したが、原木丸太による南洋材輸入が途絶えた結果、使われない貯木場の水面を残したまま、様々な物流産業のバックヤードとなってきていた。大都市の水辺が工業生産地から環境共生のための重要な資源へと役割を転換するなか、木材と暮しの関係を見つめてきた人々が自ら提案する将来へのまちづくりに協力する活動を続けている。そこでは数十年後の大胆な将来像とともに、我々日本人が培ってきた木の環境と文化を再生する事をテーマに掲げている。不燃化を理由に都市環境から閉め出されてきた木質建材の環境性能をみなおし、あらたなスタイルの可能性を提示することがまちづくりでもある。木材は加工性がよくユーザーが環境づくりに参加できることもその特徴のひとつであり、これもパーテションユニットであるAZEKURAを始めとする木質建材による構造物の実験的試作によって、学生が直接参加して示すことのできるプロジェクトである。



Instant Street Architecture（ISAK）



新木場ウォーターサイドモデル

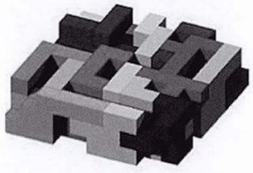


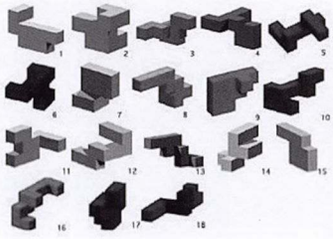
AZEKURA

■

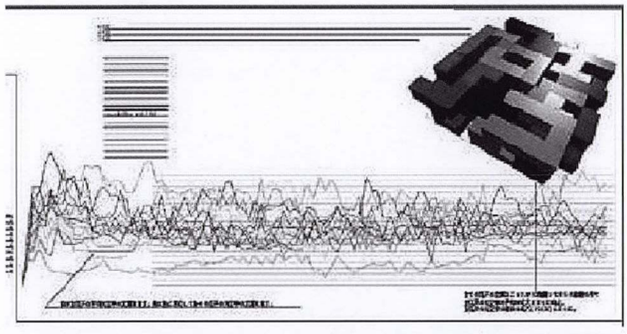
アルゴリズムとものづくり

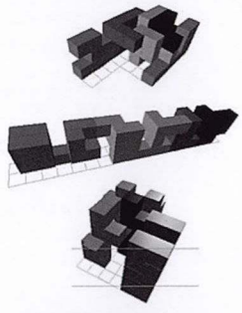
さて、こうした具体的な実践に切り込むためにも、新しいデザインの可能性を切り開く武器が必要であり、それはコンピューテーションをものづくりに結びつける技術に存在する事を確信している。デザインにコンピューターが使われている事そのものは、他の分野と同様に既に当然であるが、人間の思考を支援する未知の能力を引き出すためには、プログラミングの領域にまで踏み込んで、「コンピューターに考えさせるべき事」をデザインする手法を開拓しなければならない。研究室ではコンピューターで実現不可能な複雑性と組織性をもった手法をアルゴリズミック・デザインと呼んで取り組んできた。そして、ここでもこれを単なる計画段階の思考方法ではなく、物質的な技術の問題にまで結びつけてこそ、その真価が発揮できると考え、コンピューターで採光や通風を最適化する住戸配列を実現する低層集合住宅のPCブロックや、スチールプレートの非周期的な配列による構造体（ペンローズパターンのガラスパビリオン）のようなものを構想してきた。その後、ここ最近になって生産技術制御の情報化、いわいるデジタル・ファブリケーション技術とアルゴリズミック・デザインの組み合わせに、未開拓の大きな可能性を感じ始めて新たな地平が開けた。海外ではいまや家一軒くらいの大きさの３次元オブジェクトを、石の粉に固着材をインクジェットして積層する事で「プリントアウト」する技術すら登場しているが、それほどなくても「建築の生産技術と建築形態の合理性」というコンセプトに革新が起きる日は近い。なにしろ木材なら20年前に登場したCNCカッターですら自由な形のバリエーションを無限に作れるその能力を引き出しているとは言えないのである。それに、研究室としてもこれほど、これまで模索してきた実践的ものづくり教育と先端的研究の融合できる分野もないからだ。



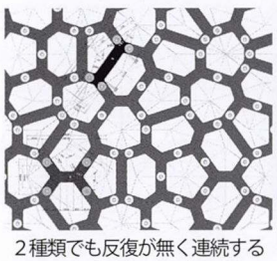




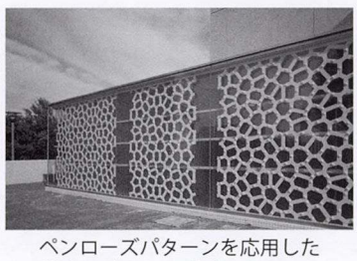




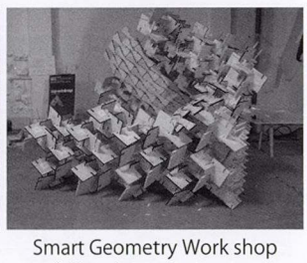
立体的配置計画にマルチエージェントシミュレーションを使用した低層集合住宅



2種類でも反復が無く連続する
ペンローズパターンブロック



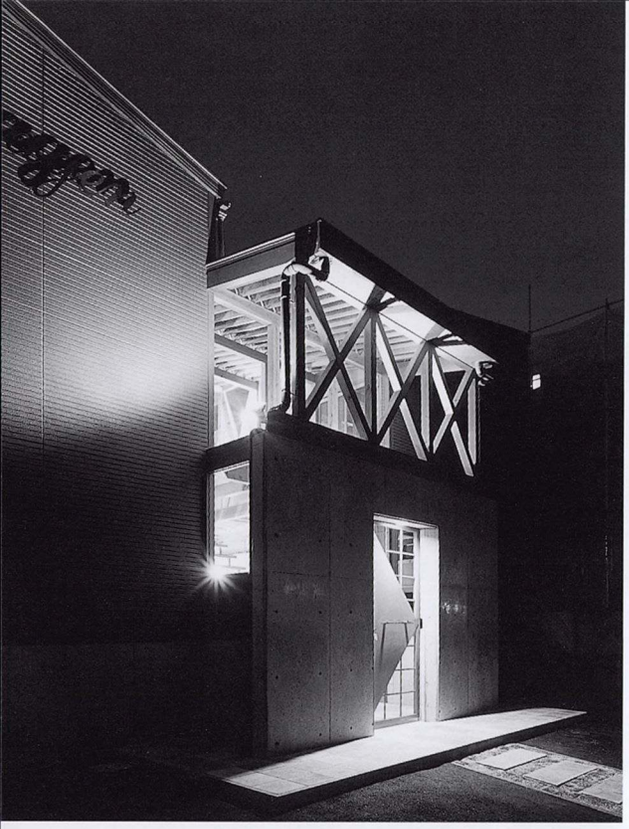
ペンローズパターンを応用した
構造のガラスのパビリオン



Smart Geometry Work shop
で製作したPanel cloud

幸いと言うか、やっぱりと言うかこうした可能性は私だけが感じるものではないので、世界的な動向はすごいらしい、ということを聞いて、どうしても自分自身が体験してみたくなって2010年３月にバルセロナで行われたSmart Geometry Work shopに参加した。そこでは世界中からの150人ほどの参加者が10クラスターに別れてコンピューテーションの可能性を実体化するWorking Prototypeをたった４日間でつくろうという試みだった。会場にはCNCレーザーカッターや３次元プリンター等が準備され、各自が持ち込んだノートパソコン上のデザインと試作を繰り返しながらすすめられる。参加者は学生より、若手建築家や大手事務所の働き盛りなどが中心でレベルが高く異様な熱気。議論の結果、「パネル・クラウド」と名付けた私の提案をチーム全体の製作に採用してくれたおかげもあって本当に良い体験ができた。ここで木パネルの組み合わせによるシステムで使われているデジタル・ファブリケーション技術の鍵は、なんと単純明快に部品番号自動印刷技術なのである。全ての部品に自分の番号と接続すべき部品番号が印刷されていて、組み立てる際には何の図面も見ずに番号に従うだけで形が「成長」してしまう。こうした部品管理システムの革新を前提にすれば、困難に思える雲のようなパネルの集合体も組み立て可能となり、そしてこうした無数の部品の集合体のようなものを数理的に処理して形態を決めるのには本来アルゴリズミック・デザインの真骨頂である。これらをトータルに考える事で新たな建築技術革新へのプロトタイプが見えて来る。

この体験を通じて、都市から建築の部品に到るまで、共通の興味であるところのコンピューターによる自己組織的な適応能力のデザインへの応用と、その実践のための模索が、これまで研究室と実作活動の両方で取り組んできたテーマを再結合して前進させられる事にとても勇気づけられた。国内の建設需要を背景に成長してきた日本の建築社会は少々行き詰まっているように見える。しかしそれはこれまでの枠組みだ。これからの国際社会と技術革新を見据えるSFC環境デザインには未開拓で楽しそうな可能性がたくさんある。（文責：池田靖史）

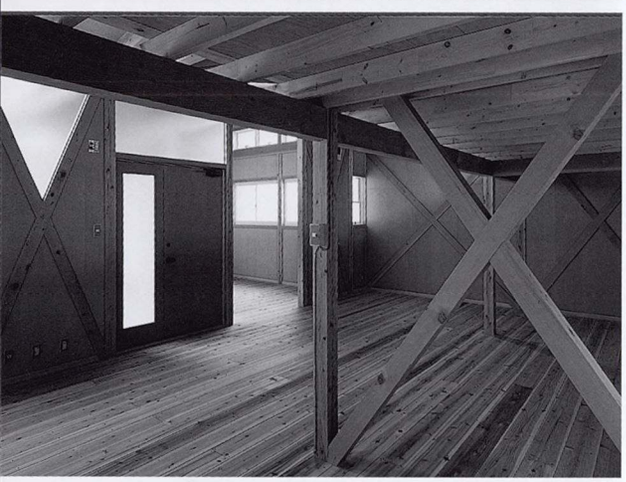




まち　建築　ひと

gallery

まちのプチオフィス計画







設計

東山 明

当時、独立間もない私に、構造設計の先生から「事務所つくって一緒に入らないか」との思い掛けない話を頂き、地元工務店の自社ビル兼賃貸オフィス計画が始まった。

オーナーから「お金が無いからといって、片廊下の現場小屋のようなものにはしたくない。なにかいいアイデアがほしい」との要望を受け、現地を何度も見に行った。

打合せが進み、賃貸オフィスとの併用という側面がデザインのポイントになると考え、オーナーも含め、入居者各自がこの建物をｍｙオフィスとして共有していけるような形態（プチオフィスビル）を目指すこととなる。

レイアウトは、共用部を中央に集約したコの字型とし、レンタブル比を考慮。

その共用部の屋根は奥行きの深い透明庇のような考え方で外気に開放し、自然を感じる中間的な領域として提案。

外観は、町で少し目を引く建物になるように、派手ではないが印象に残るような形をシンメトリーで表現、シンプルなファサードとした。

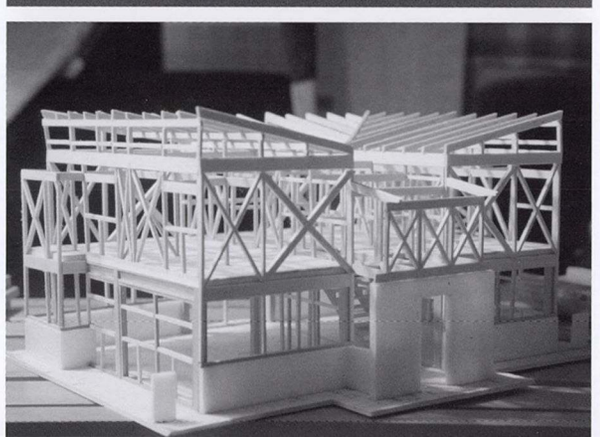
現在このプチオフィスビルも、気づけば13年目を向かえていた。
ここ数年、人から「この建物、実は通りすがりに見つけて気になっていたんです」と言われる事が多くなり、少し町に根付いてきたのかなと感じる。

東山　明（ひがしやま あきら）

1967年　大阪府生まれ
1990年　近畿大学理工学部建築学科卒業
1992年　出江寛建築事務所勤務
1992年　いるか設計集団で自力建設
1996年　東山明建築設計事務所開設

ｐｈｏｔｏ　福澤　昭嘉

企画編集　井上雅祐(作品作風小委員会)



特集

ホスピタリティのある ケア空間

お客を親切にもてなすこと。または親切にもてなそうとする気持ちをホスピタリティと言う。“サービス”の語源に「相手に隷属する者」という意味があるのに対し、ホスピタリティは「客人の保護者」の意を持つ。もてなす側の主体性を強調する言葉として使われ、ホストとゲストの相互理解が根底にあると言える。
語源を同じくするから当然でもあるが、病院はホスピタリティ産業の代表の一つとされる。決して明るいとは言えない世相の中、心身の健康への関心は以前に増して高まっており、病院に限らない医療福祉施設について、改めて考えるきっかけになればと特集を企画した。
本特集では、ホスピタリティの捉え方や有り様の思想、または種々の領域での動向や見識を交えながら、ケア空間について専門の方々に論じていただくこととする。

インテリア・住宅系分科会幹事●神谷浩司

総論

医療福祉施設は、今●久保田秀男

各論

癒しの環境の計画史●上野 淳

北欧における福祉施設のインテリア●二井るり子

病院緑化におけるホスピタリティ●岩崎 寛

医療施設のサイン計画●黒田裕子

病院建築の評価～医業経営コンサルタントの視点～●槙 孝悦

ケア空間のバリアフリー●吉田紗栄子

本号特集企画担当：インテリア・住宅系分科会
小倉一平／神谷浩司／黒柳亮／田中浩介／戸井賢一郎／ペリー史子／間渕一博



写真1　絵のある外来待合（＊2）

総論1

医療福祉施設は、今

広島国際大学工学部
教授

久保田秀男

1945年生まれ。京都大学大学院修士課程、UCLA（米国）修士Ⅱ修了。日建設計理事（医療福祉業務統括担当）を経て現職。
設計：松下記念病院、大阪市大病院、島根県立中央病院、老健あこう、愛光園等の医療福祉施設のほか、広島県立美術館、韓国総合貿易センター、三洋電機筑波研究所、豊中アクアホールほか。
三田市民病院、町立奥出雲病院（旧仁多町立仁多病院）、幡多けんみん病院、木城クリニック、長谷川病院で日本医療福祉建築賞受賞。
著書：「患者に選ばれる病院づくり」「病院の改築と運営改善のヒント」（じほう）ほか。

■今、医療福祉施設の設計が面白い

医療福祉施設の設計は特殊なものとして、特に医療施設の場合は、吹き抜けは要らないと拒否されながら医師やスタッフの言いなりに、機能的な要求をクリアーする作業に忙殺されるばかりで、設計者としてはやりたくない仕事の一つであったに違いない。そして今、療養環境を重視する考えが浸透し、吹き抜けやオープンカウンターなどの要望が病院側から出るなど、自分の気持ちで設計できる部分が増え、また社会的に意義のある仕事として、医療福祉施設の設計が面白い。

医療施設には診療所から大学病院まで、医療レベルや病院の役割と規模がいろいろあり、患者の心身状況も様々である。また、福祉施設も、入居者の心身状態の違いや、規模も大きなものから住宅のような小さいものまでいろいろある。前者は病気を治し社会復帰を目指す、どんどん健康になって早く出たいところであり、後者は、加齢とともにどんどん不自由になって、できるだけ長くいたいところであるところに大きな違いがある。しかし、いずれも弱者を対象としていることと、施設内だけで生活が完結せざるを得ない人が多いところに共通点がある。

そして今、患者や居住者の療養環境の改善が注目され、それには大きな手ごたえがあるものの、様々な施設に対して画一的に語られがちで、それらの違いや本来のありたい姿がなかなか見えてこないところに疑義がある。

なお、ここでは、医療施設については病院を、福祉施設については高齢者福祉施設を中心に議論を進めるが、それ以外の施設にも共通なところが多い。

■美しくなった医療福祉施設

「病院らしくない病院」として、「ホテルのような病院」が良い病院の証しであるかのように、今、福祉施設を含めて、建築とインテリアデザインが美しくなっており、弱者への配慮もうかがえる。そして、病院や施設側からも、患者や入居者への療養環境の向上が設計条件として示されるようになった。

倉敷中央病院*1の後に続くものとして、手前味噌になるが、前職の事務所が設計しほぼ同時期に完成した、松下記念病院（1985年）、トヨタ記念病院（1987年）、聖路加国際病院（1992年）に全面的にインテリアデザイナーを投入したのが、病院インテリア時代の本格的な始まりであったように思う。「アメニティ」という言葉が、建築分野で日常的に使われるようになる前のことである。病院のロビーに「根付く」と嫌われた植栽が植えられるようになったのもこの頃からであり、また、青色は顔が青く見える、黄色は気が狂う、赤は血の色と言われて病院でタブーとされていた色使いもからも解放された。時は、公共建築にアート予算が用意されるなどの経済的に恵まれた時代である。その後、病院設計や福祉施設でインテリアデザイナーやアーティストを投入する場面が増え、ホスピタルアート、ヒーリングアート（**写真1**＊2）として、「癒しの環境」がキーワードとなり、リゾートホテルと見間違えるようなものまで登場している。

1973年の老人医療費の無料化などにより、多くの患者が病院を訪れ、病院が高齢者の井戸端として落語にも登場するような「ベッドを増やせば儲かる」時代には、患者の環境のことを省みる余裕はなく、病室に多くの患者が詰め込まれ、むやみな増築を重ねた劣悪な環境が病院の代名詞のようであった。病室面積の基準も、戦後間もない1946年の医療法制定から2000年の第4次改正までの54年もの間そのままであったことからも、その間の事情がうかがえる。そして医療環境が冬の時代にある今、「やさしさ」を志向するトレンドの中、患者サービスが注目されている。

福祉施設でも、福祉政策の貧しい時代では、少ないスタッフで多くの居住者のお世話をしなければならないことから、居住者のプライバシーや環境よりも、スタッフの使いやすさや居住者の管理のしやすさが優先されてきた。そして今、増え続ける高齢者のためのQOL（生き方の質）やノーマライゼーション（普通の社会生活）を目指した療養環境の改善が見られる。

しかしこれらは、これまでのあまりにも患者や入居者の環境に対して無頓着であったことに対する反省と反動とも言え、病院の場合は、病棟や外来ロビーまわりなどの目に見え

るところでの改善であり、運営を含めた医療サービスそのものの目に見えないところについては、いまだに設計者が踏み込むことができない聖域であるかのように、旧態然としていて、残されている課題が多い。「患者様」で代表される表面的な変わりようには驚くばかりであるが、福祉施設も同様に、スタッフ側に「看てあげている、お世話をしてあげている」という上からの目線がある限り、基本的には何も変わらない。言いたくても何も言えない患者や入居者が期待することは「患者様」と呼ばれることでも、立派な大理石のカウンターでもなく、迅速で適切な医療や、それを支えるスタッフによる心のこもったサービスである。また、福祉施設についても、いろいろな居場所のメニューが増えただけで、「終の棲家」として誰もが認めることができるものはいまだ不透明であり、量的にも不十分で、環境の改善だけでサービスが向上したと考えるのは性急すぎる。

問題は、表面的な美しさを要求しているクライアント側の意識に、そして設計者がそれに便乗し、この時とばかりそれに注力していることにある。厳しい医療環境の中、病院は病院の将来の姿を模索しており、経験豊かな設計者に意見を求め期待する場面が多くなっているが、設計者はそれに十分応えられていないのではなかろうか。病院の設計は患者・スタッフやステークホルダー（あらゆる関係者）の立場に立った今と将来の医療サービスのあり方を提案し、それをハードに具現化することであり、そこに美しい建築とインテリアデザインが生まれる。

■「違い」を設計するところに「らしさ」を

昨今の、「病院よおまえもか」と思うほどの、商業建築やホテルと見間違えるような、そして、家具一つ自由に置けないような1枚の写真のためのインテリアデザインが病院に画一的に採用されているところに、患者不在の新たな「病院くささ」を感じる。

ホテルが晴れがましい非日常的な場であり健常者のため、そして客室が一時的な宿泊のためであるのに対して、医療福祉施設が、弱者である患者や居住者の日常的な居場所として毎日24時間を過ごす場であり、特に病室は、居間と食堂と寝室を兼ね備えた場であるところに大きな違いがある。ホテルとの違い（**表1**）に注目するところに、真に「病院らしい病院」や「施設らしい施設」がある。

表1　ホテルと病院の違い

病　院	ホテル
長期	短期
昼と夜の24時間（病室）	夜(客室)
日常性の延長	晴れの場／非日常性
安全重視／清潔感／明るさ	イメージ重視
清潔管理が重要	病院ほど問わない
病人・弱者・高齢者が対象	概して健常者
福祉サービス	利益が最終目的
緊急性のある医療機能	緊急性はない
見守られている安心感	プライバシー重視

奈良県立医大に吉田修先生がつくられた大和ハウスの寄付講座「居住医学」がある。これは、治癒環境への自然の役割や、光、空気、空間などのナイチンゲールの「病院覚え書き」にある療養環境の条件を、「医学」をもって科学的に検証しようとするものである。後述するEBD（根拠に基づく設計）のために、そして「らしさ」の拠り所として、今後ともの成果を期待するところであるが、詳細は別の機会に譲るとして、とりあえずそれを「臨床建築」と呼んでおく。

また慢性期、急性期、リハビリ、緩和、精神など、病院の機能分化が推進される今、これまでのように病院を画一的には語れなくなっている。例えば、設計の拠り所となっていた面積配分の統計データや部門別ゾーニングの考え方も、病院それぞれの役割に応じたそれぞれの「らしさ」があり、そのままでは使えない場合が増えている。福祉施設でも、介護度の高い寝たきりの方もおられる特別養護老人ホームからグループホームまで様々であり、入居者の心身状況や個人的・社会的環境、ライフスタイルが違うことからも、それらの違いに注目して、それぞれの「らしさ」を設計しておきたい。

例えば、4床室の各ベッドまわりをそれぞれ窓のあるプライベート空間とした「個室的多床室」[*3]が、医療施設にも福祉施設にも同じように採用されている。4人部屋の環境改善の工夫として最初に考えられた設計者には敬意を表するとして、それが将来的な平面の自由度を低化させ、少なからずスタッフ動線を長くしていることからは、実際の採否については、異なる施設それぞれの違いに対して、多床室と個室のあり方など、将来にありたい姿が考えられた結果なのかどうかが問われる。4床室が必要な場合の理由を合わせて考えると、逆の発想で「多床室的個室」[*4]も一案であろう。

また、（故）外山義先生のご努力により実現した「小規模生活単位型特別養護老人ホーム」に登場した「ユニットケア」[*5]の平面型は、それまでのベッドサイドだけの個人領域から、いきなり50人とか100人の集団生活になるのではなく、個人から家族、そして向こう三軒両隣、町内会へと段階的に広がる日常生活のコミュニティのように、プライベート、セミプライベート、セミパブリック、パブリックと、ヒエラルキーのある生活空間の連続性を目指したものであるが、グループホームや小規模多機能施設などの福祉施設や老人保健施設で採用され、最近では病院でも見られるようになった。病院では、病院の大きな病棟管理単位（ACC）に対する、ベッドサイド看護のための小さな単位（TCC）の考え方[*6]にも通ずるところがあるが、目指すところは同じでも、それぞれの施設の役割、機能と患者や居住者の違いによって、おのずとその平面型は変わってくる。

■変わる医療施設―「近代的病院」は、今

「中央化」「動線短縮」「動線分離」「部門」「機械化」などのキーワードによるこれまでの、そして昨今の新しい病院を「近代的病院」と呼んでおく。その設計手法は、病院を機能的にとらまえ、「ゾーンと動線計画」、そして「成長と変化」という概念で確立されたもので、今なお、病院設計の基本である。

しかし、カルテ、検査、画像診断、処置、給食などのスタッフと医療資源を集約させる「中央化」は、患者に何度も服を脱いだり着たりしながらの院内ツアーを強いており、機械搬送を伴う給食やカルテの集約が高価な医療施設をつくった。また「動線分離」は、患者にスタッフの顔が見えない、あるいはスタッフに患者の顔が見えない双方の不安を生み、特に高齢者の多い今、さらなる人的資源の投入が必要となっている。そして、それら

の機能的平面の追求は、建築基準法の採光規準緩和も相まって、窓のない「ディーププラン」[*7]を生み、「病院くささ」の一つでもある暗くてわかりにくい廊下と人工環境に頼る維持費の高い病院をつくってきた。「部門とゾーニング」の考え方も、今や病院それぞれの役割が異なり、センター化や専門化が進む中では統一解はなく、「部門の解体と再構築」による病院それぞれに対応する設計が必要となっている。

■「脱近代的病院」に向けて

少子高齢社会と低経済社会にある今、高齢者への配慮や経済性が求められている。そして、個人意識の高まりや遺伝子治療などにより、「マスの医療」から「個の医療」に向かう中での、「スタッフ中心の病院」から「患者中心の病院」へのシフトと、医療費抑制のために急速に進む医療環境の変化に対して、変化しながら健全な経営に支えられ、その役割を全うすることができる病院として、「患者のための病院」「経済的な病院」「変化する病院」をキーワードとする「脱近代的病院」[*10]を提案する。そして、スタッフ側の業務環境改善も患者サービスに通じることから、「患者によし、スタッフによし、コストよし」の三位一体を設計の目標とする。それらのどれ一つ欠けることなく満足する答えを見つけるところに病院の設計がある。

■患者のための病院

まず、できるだけ弱者である「患者を移動させない」ことで患者の負担を減らすこと、そして患者の「スタッフに見られている安心感」が病院特有のこととして、それらをハードに具現化することである。例えば前者については、心電図も点滴も採血も同じベッドでできることから、機器やスタッフが移動すれば患者の移動を少なくすることができる。また後者については、適度な「動線混合」を併用することで実現できる。

家族への配慮も患者サービスの一つであり、2006年の米国への医療施設の視察では、視察先のスタッフから「患者サービスは行き着くところまで行った。今は家族のために何ができるかを考えている」と聞いた。その病院では、個室病室を患者のベッドまわりとスタッフのためのユーティリティゾーン、そして家族のためのソファーベッドのある窓側の、3つのゾーンに分けていた。既存病室が米国でよく見られた窓側トイレ型平面であったのに対し、新しく増築した病棟では、窓面を大きくするために、水まわりが廊下側にある旧来の平面に戻っていた。また、2009年の視察では、最終的に患者と家族が病院に期待するものは優秀なスタッフなので、優秀な人材獲得のために「スタッフの業務環境に力をいれている」との話を聞いた。建物が古くても多くの患者が押し寄せている病院があることからもうなずけることである。

病院側から「玄関ホールで長い時間患者を待たせているので、吹き抜けが欲しい」という要望が出ることがあるが、患者の視点からは、長く待たせない運用の改善の方が先決の課題である。吹き抜けにはオリエンテーションスペースとしての役割があるものの、患者や家族が最も長い時間居る場所に設けるなど、あくまでも患者と家族の目線で考えておきたい。(**写真2**[*8])。



写真2　吹き抜けのある病棟ラウンジ(*8)

■経済的な病院

ライフサイクルコストなどの検討は当然のこととして、病院建築が「ないよりはあった方がよい」という考えでつくられがちであったところに、高コストの原因があったと言える。医療の世界の「EBM（根拠に基づく医療）」をもじった「EBD（根拠に基づく設計）」により、不要なものを排除し、必要なものに投資することが肝要である。例えば、病院ほど間仕切りと扉の多い建物はないが、そのほとんどがスタッフのためであり、患者にはカーテンという現実はさておいても、それらがなぜ必要かを検証すれば、かなりの間仕切りや扉をやめることができる。

間仕切りを少なくすることは、コストの削減にとどまらず、間仕切りがあるから改修が必要となることからは、少なければ改修も少なくなり、さらにはフレキシビリティとコミュニケーションが高まるという万能薬である。また、セキュリティの確保や視覚的な遮断にはほかにいろいろな方法があるとして、間仕切りの目的が音や空気の遮断であれば、それをガラスの間仕切り（**写真3**[*8]）にすることができる。コミュニケーションの向上と、病院の特徴である患者にとっての「見られている安心」とスタッフにとっての「見えている安心」、そしてブラインドなどにより「選択できるプライバシー」が実現でき、さらには、病院全体の課題であるいろいろな安全性やセキュリティを高めることができる。



写真3　ガラス張りの会議室(*8)

■変化する病院

政策的な床数削減により「病院は大きくならない」という現代神話が設計の世界にあるのではなかろうか。「近代的病院」の「成長と変化」の視点が軽視され、建築とインテリアデザインのこってり建築が増え、改修や各部門の拡張がしにくいなどの固定的な設計を見受けることがある。しかし大きくなる病院もあり、関連施設が増えることもあるので、「病院はすべてが変わる」という認識のもとで、増築や改修、さらにはコンバージョン（用途変更）までを視野に入れておきたい。今設計中の460床の病院では、フレキシビリティの高い貸しビルの考え方を各所に取り入れ、光庭のあるセンターコア型の平面を採用している。コアのまわりはすべて連続した空間で、部門間の境界も自由に設定でき、コアまわりの回遊動線からどの部門へも直接アクセスできる。

■病院を変える情報化―今がチャンス！

急速な情報化により、病院では医事システムやオーダリングに始まり、今では「医療総合情報」として、電子カルテを中心に画像診断情報を含めて、院内のどこでも、そして院外とのネットワークにより、医療の高度化や病々連携、病診連携、病福連携、遠隔医療など、その可能性は無限に広がる。

一方で、「電子カルテで病院建築がどう変わるか」とか「患者サービスにいかに貢献できるか」の問いかけに対しては、その答えに戸惑う設計者が多い。このことは、情報化の効果を十分生かし切れずに旧態然とした設計にとどまっているからであろう。情報化により可能となる「場所を問わない医療」が、平面を従来の機能的動線の制約から解放する今、新たな医療サービスのあり方と患者中心のプランニングを考えるチャンスである。

福井県済生会病院の外来部門の改修*9では、医事事務の役割分担を変え、計算までを外来ブロック内の医事スタッフが担当することにより、同じスタッフが同じ患者を最後までお世話することを実現した。また、今でもほとんどの場合で外来診察室後方のスタッフ廊下の要望が出るが、電子カルテによりカルテ搬送がなくなり、後方廊下の意味合いが薄れる中では、スタッフが診察室の後ろと待ち合い側の両方を行き来する姿が不合理に見える。スタッフは患者が待っている側を移動することとし、診察室の前に患者から見えるスタッフカウンターを設けた（**写真4**＊9）。この考え方は、従来の中待ち部分をスタッフ通路にすることで、既存施設でもすぐに実現できることであり、その事例も増えている。

広島国際大学丸山雄太の修士論文では、動線分離の典型例であった画像診断部門の「操作ホール型平面」が、高齢患者が多い今、技師が操作ホールから2枚の重い鉛扉を開けて待ち合いまで患者を呼びに出ていることで、逆にスタッフの動線を長くしていることを指摘し、画像のデジタル化によりその役割は既に終えたものとして、「新動線混合型平面」を提案した。そして、お互いに顔が見えないことによる、患者・スタッフ双方の不安を解消するとともに、患者とスタッフの動線を約半分に短縮、さらには鉛の扉の数や面積が減ることによるコストダウンを検証している。



写真4　診察室の前にあるスタッフカウンター（＊9）

これが、「患者によし、スタッフによし、コストよし」を同時に解決する「脱近代的病院」の一例であり、現状に対して「本当にそうなのか」という「気付き」を検証することにより「近代的病院」の「既成概念」を打破し、さらには「温故知新」として、近代的病院の以前の平面型にヒントを得たものである。三位一体の工夫は、「個の病院」への取り組みと「情報化」を最大限利用することにより実現できる。その他の考え方や工夫の例は、拙著*10をご参考頂きたい。

■「終の棲家」を目指して

「施設の住居化」と「住居の施設化」は、前者については、前述のユニットケアに代表される生活感のあるコミュニティ形成と「施設くささ」を排除した「自分の家」のような佇まいに、そして後者については、家族介護が破たんする中でも「自分の家」で社会的介護を受けながら「終の棲家」になるようにという目論みであり、大いに期待するところである。

また、世間体や親を施設に預けることの後ろめたさからか、豪華さだけを狙ったリゾート施設のような高齢者施設も登場していることに対しては、その前に、居住者の日常性の中の目線でいかにして「住まい」に脱皮できるかが課題である。どこまでも平らな床と手すりだらけでは淋しい限りである。

例えば、弱者への配慮という医療施設との共通点から、病院の引き戸や手すりなどがそのまま福祉施設にも採用され、それが「施設くさく」しているものがある。日本の住宅には襖や障子の素晴らしい引き戸の伝統があり、プッシュアップができる高齢者には、手すりよりも便利な台などの工夫がある。また、幅の広い真っ直ぐな廊下も「施設くささ」の一つであり、「住まい」のスケールの路地や街角の井戸端も欲しい。また、個人おのおのの「らしさ」を表現することも必要で、そのためには、設計としてあまり造り込まない方が良い部分もある。

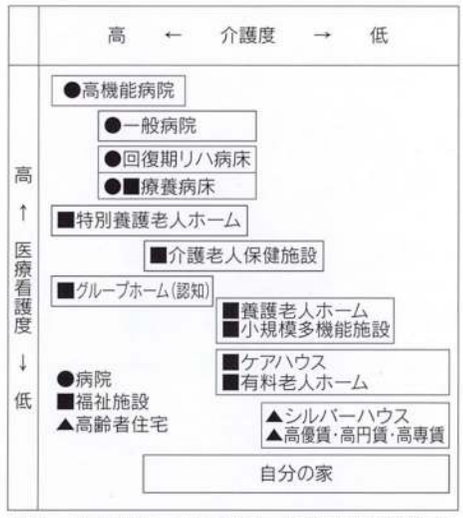


図1　医療施設、福祉施設、居住施設の連続性

行き場所がないままに病院を3か月で追い出されることが社会問題になっているように、医療施設、福祉施設、居住施設の量的なバランスと質的な連続性（**図1**）が求められる。しかしその一方で、施設を転々と移り変わるのではなく、家族や友人などの人的環境や社会的環境をそのままにしておき、そのまわりで支える者と物が、すなわち医師やヘルパー、心電計・ポータブルトイレなどが変わることで、自分で選んだもっとも心地よい居場所を「終の棲家」とすることはできないものであろうか。

注記

＊1：設計／辻野純徳、1981年以降の改築
＊2：「宏仁会高坂医院」：埼玉県、2007年
＊3：西神戸医療センター（1994年、設計／共同建築設計事務所）で初めて採用された。
＊4：間仕切りを開放すると4床室になる個室。＊10
＊5：原則個室による10人程度のケア単位による介護。
＊6：米国の病棟管理システム／「ACC」：Administrative Control Center、病棟に1箇所の病棟管理ステーション。「TCC」：Team Care Center、分散された複数の看護拠点。
＊7：窓のない奥行きの大きな平面
＊8：「医療社団法人長谷川病院」：富山県、2006年
＊9：「福井県済生会病院」改修：福井市、2005年
＊10：「患者に選ばれる病院づくり」2001年、「病院の改築と運用改善のヒント」2003年、久保田秀男・出版／じほう

（くぼた　ひでお）



写真1
Royal Infirmary of Edinburgh 1874：古色蒼然。中世のお城のような病院建築

各論1

癒しの環境の計画史

首都大学東京 大学院建築学専攻
教授

上野　淳

工学博士。1977年東京都立大学大学院博士課程修了。建築計画学、環境行動研究、学校、病院、高齢者施設などの地域公共施設計画研究を幅広く手がけ、計画指導・コンサルタントとしても活躍。
1995年「生活者に立脚した地域公共施設の建築計画に関する一連の研究」で日本建築学会賞（論文）を受賞。
著書に、「未来の学校建築」(単著、岩波書店)、「高齢社会に生きる」(単著：鹿島出版会)、「学校建築ルネサンス」(単著：鹿島出版会)、「阪神・淡路大震災における避難所の研究」（共著、大阪大学出版会）など多数。



写真2　ナイチンゲール病棟(Royal Infirmary of Edinburgh 1874)：おおらかで豊かな病棟環境



図2　神戸市立中央市民病院　1980：ガラス張りの4床室による50床の正方形病棟

■病院の究極の癒しの空間は病棟・病室

病院建築の究極の癒しの空間とは、病棟・病室である。病院というと、大規模な外来待合い、高度診療機器が並んだ中央診療をイメージされる方も多いと思うが、外来は入院加療が必要かどうかをスクリーニングするのが本来の機能であり、中央診療はそのための診断もしくは入院患者への加療のためにあるものである。この病棟・病室の計画デザインでは特に戦後、いくつかの試行錯誤が繰り返され、現在の姿に至っている。とはいえ、「こう在るべき」という定型が定まったという訳でなく、いくつかの有効な選択肢が示されるに至ったと理解しておくべきであろうか。

■自然光が注ぐ癒しのナイチンゲール病棟

写真1、2は18世紀からイギリスを中心に建設された‘ナイチンゲール病棟’の一事例である（Royal Infirmary of Edingburgh: 1874）。高い天井高、広いベッド間隔、各ベッドにそれぞれの大きな窓、10数床～20数床の大部屋という環境である。たっぷりの新鮮空気と燦々と降り注ぐ日光、空気感染を防ぐに十分なベッド間隔、という思想である。ある意味で病棟環境の在るべき姿、原型といえようか。入院患者には、まず持って健康的な自然環境こそが大切という思想である。

筆者はこの事例に限らずいくつかのナイチンゲール病棟を見て回った経験を持つが、そのおおらかな環境の在り方にすっかり魅せられてしまった時期がある。

大部屋という環境に抵抗があるかといえば、現場の患者やナースには、いたく好評である。後に改めて述べるが、病棟・病室の環境を考えるにあたっての相反する視点として、[患者のプライバシー] [看護者からの見守りやすい環境] の2つの側面がある。これらは矛盾する概念であり、しばしば両立しない。しかしこのナイチンゲール病棟では、両立しているように見えるのである。大部屋であるから［見守りやすさ］は言うまでもなく抜群である。ナースステーションはオープン病棟の真ん中にある。そして[プライバシー]からみると、4人部屋・6人部屋における人間距離の近さに対して、大部屋・広いベッド間隔の環境の下では、かえって個人に対する意識が集中せず、大人数の中でマスキングされてしまうという特質があることに気づく。そして、キュービクルカーテンを引いてしまえば、大勢の中の孤独を愉しむことのできる環境といえようか。

ナイチンゲールという人は大した見識を持った人であると、調べて見るほど想う次第で

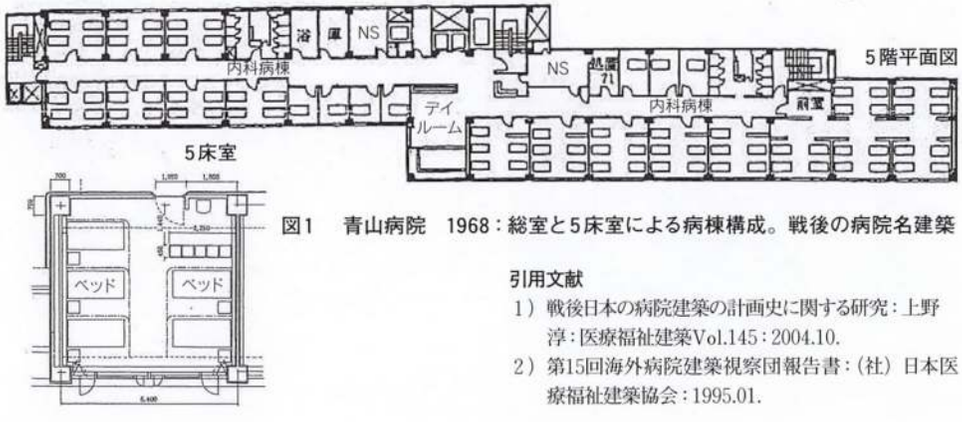
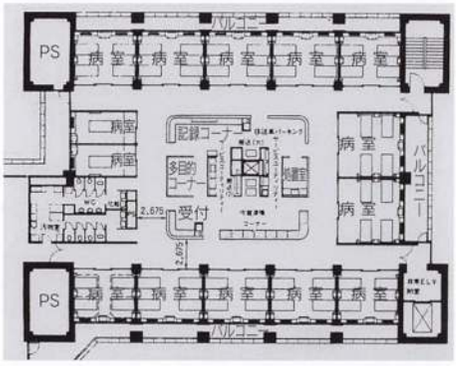


図1　青山病院　1968：総室と5床室による病棟構成。戦後の病院名建築

引用文献
1）戦後日本の病院建築の計画史に関する研究：上野淳：医療福祉建築Vol.145：2004.10.
2）第15回海外病院建築視察団報告書：(社) 日本医療福祉建築協会：1995.01.



◀神戸市立中央市民病院平面図

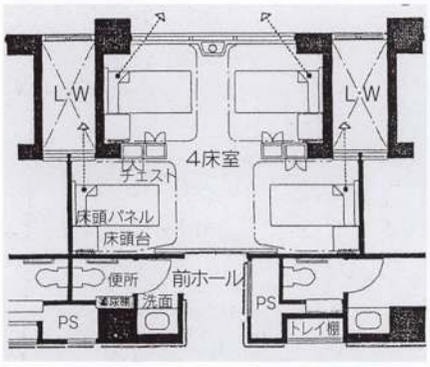




図4　西神戸医療センター　1994：個室的多床室。すべてのベッドが窓を持つ。個室の良さと多床室の良さ

ある。なお、このRoyal Infirmaryは残念ながらその2世紀にわたる歴史をつい先年閉じることになり、近代的な（味気ない）PFI病院に建て替わってしまった（**写真3**）。

■総室による病棟環境

我が国の近代病院の歴史は［病院建築設計要領モデルプラン：吉武泰水ほか：1950］によって幕があいた。ここでは既に‘総室’の考え方が示されているが、青山病院1968（**図1**）でもそのモデルを見ることができる。‘総室’とは、4 Bedsもしくは6 Bedsのまとまりを部屋として閉じないで、オープンに繋ぐ病室構成の考え方であるが、1970年代まで広く用いられてきたのである。イギリスでは‘Bed Bay 方式’とも呼ばれ今でも用いられているが、ナイチンゲール病棟において論じた2つの側面を両立させようとの考え方であろうか。これもなかなかにおおらかな環境ではあるが、残念ながら青山病院も、つい先年耐震性能の確保の難しさから、その40年の歴史を閉じた。

■ガラス張り4床室の病棟

病室に投入できる面積の制限や看護動線の短縮の必要性から、我が国の病室計画は6床室以上が主流であったが、個々の患者が窓か壁側に固有のコーナーが持てる4床室へと転換されたのは1970年代後半のことであった。

さてここでは、［看護者からの見守りやすさ］が大きな課題となる。これに真っ向から挑戦したのは神戸市立中央市民病院1980である（**図2**）。なんと、病棟50床すべてをガラス張り4床室にしてしまったのである。中央のオープンカウンターのナースステーションからの見通しが利くことは、いうまでもない。大胆な挑戦といえる。さて、患者や看護者の評判はどうかというと、当時はすこぶる良かったのである。‘病床から看護婦のきびきびした活動の姿が自然に見えて癒される’、‘ちょっと合図をするとナースが駆けつけてくれる’などである。これも別な意味でのナイチンゲール病棟の良さの体現であろうか。

■完全個室の聖路加国際病院

一方、入院生活における患者のプライバシー保護こそが病棟・病室構成の在るべき姿である、との理念も当然ありうる。これを我が国で初めて実現したのが聖路加国際病院1992である（**図3**）。小児病棟を除いて、すべての病室がSingle Care Unit（個室）である。神戸中央とは対極に立つ思想である。これはこれで逆らいようのない明確な理念であり、この病院の発するメッセージは一時代を画したものといえる。事実、その後、病院における個室率は次第に高まっており、例えば亀田総合病院Kタワー2005は、全個室はもちろん、高級ホテルかと想わせる入院患者主体の病院である。

■個室的多床室

さて、前述の相克への挑戦は今も続いている。簡単にいうと、［個室の良さ］［多床室の良さ］の戦いといえようか。奇妙ともいえるアイデアが登場したのが‘個室的多床室’である。西神戸医療センター1994（**図4**）を嚆矢とするが、この思いつきはあっという間に日本の病院計画に敷衍し、いまだにその新しいプランの創出に血道を上げている状況といえようか。一つひとつのベッドが、それぞれの窓とプライバシーのあるコーナーを持つ平面計画である。こうした空間を小生は寡聞にして海外の病院では見たことがなく、まさしく日本の病院建築家の面目躍如といったところか。

＊

さりながらさりとて…。どれが正しいという訳でもあるまい。徹底したベッドサイド・ナーシングによって、‘早く患者を家に還す’ことこそが‘本当の癒しの環境’ではある。

（うえの　じゅん）

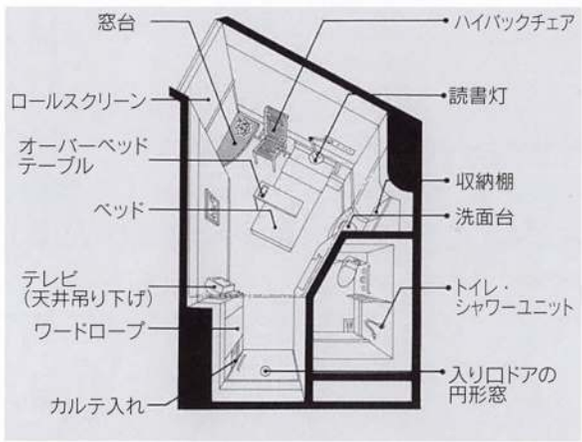




図3　聖路加国際病院　1992：完全個室化。All Single Care Unitの病院



写真3　Royal Infirmary of Edinburgh 2002：近代化されたPFI病院



写真1

各論2

北欧における福祉施設のインテリア

㈲プラネットワーク代表取締役
㈱二井清治建築研究所副所長

二井るり子

1957年生まれ。医療福祉コンサルタント。
奈良女子大学住居学科卒業後、大阪府庁に行政職として勤める。1991年に退職しプラネットワークを設立。医療福祉施設の居住環境の質的向上を目指し、設計、企画、調査を行う。
現在、(有)プラネットワーク代表取締役、(株)二井清治建築研究所副所長、NPO法人福祉の快適環境研究所副理事長、奈良女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程社会生活環境学専攻今井研究室。
著書に「知的障害のある人のためのバリアフリーデザイン」(彰国社、共著)「医療福祉施設のインテリアデザイン」(彰国社、共著)がある。

もてなす側ともてなされる側、そのようなとらえ方は北欧の福祉施設には当てはまらないように思う。そこで働く人も利用する人も同じ人間、立場はいつ変わるかわからない。一人の人間として障害があろうとなかろうと、同じように快適で心地よい生活を送れること、あなたを大切に思っていますよ、という思いを伝えること。それが北欧の医療福祉施設から私の学んだことである。

■サフィーレン（スウェーデン）

サフィーレンは、デイセンターと体験施設の2つの機能をもった障害者の日中活動の場である。目の不自由な人のために設計段階からさまざまなアイデアが盛り込まれた。目が不自由な人は、微妙な反響音や足触りで空間を認知する。玄関を入った吹き抜けを中心に天井高さや大きさの異なる部屋が配置され、床の仕上げも場所によって変化している。

●一人ひとりのクッション　重度の人のデイルームは、日中を楽しく過ごせるようカラフルなインテリアが施されている。ウォーターベッドの天井からはオレンジ色の布が天蓋のように垂れ下がり、ベッド上のカラフルなクッションは居心地のよい空間を創っている(**写真1**)。一人ひとりに専用のクッションが用意され、壁には利用者の名前とクッションの色を表示した紙が貼られている。

●五感を刺激するインテリア　体験施設の入り口には流木や砂、貝殻などが飾られ、さまざまな感触を楽しむことができる。帽子やスカーフなどを身に着けてその姿を鏡に映してみる変身コーナー、カラフルなタペストリーや触るときれいな音を奏でるウィンドウチャイムなどが吊られ、音、感触、色彩、においなど五感を刺激する仕掛けが随所に見られる。

「天国の部屋」と名前のついた部屋は、白で統一され、ウォーターベッドにミラーボール、かもめや天使が空を飛ぶ。バブルチューブはスイッチを入れると下から泡が出て内部に仕掛けられた照明により色が変化する。静かな音楽が流れ、光の色、泡の音、心地よい振動が伝わり、まさに天国に居る心地が味わえるという仕掛けだ。

一転して「太陽の部屋」は、床も壁も天井もオレンジ、赤、青とカラフルな色彩に包まれたアクティブな空間だ。ボールプールとビニールマットなど飛んだりはねたりしたくなる装置が用意され、リズム感のある音楽が流れる。天井には走行リフトが取り付けられ、身体が不自由な人もリフトで部屋の中を自由に移動できる。

ほかにも、真っ暗にした「月の部屋」、動くおもちゃを集めた「仕掛けの部屋」など、空間全体を使って五感に働きかけるさまざまな部屋が用意されている。インテリアとアートが一体となったようなこの空間は、とても刺激的で心地よく、障害のある人もない人も共に楽しめる環境を提示している。

■ステーンキューラスクーラン(スウェーデン)

インテグレーション（統合教育）の一環として、一般の小学校の一角につくられた特別訓練学校は、7歳から11歳までの11人の重度重複障害児が通っている。子どもの症状と年齢によって3つのクラスに分けられ、各クラスには先生が1名とアシスタントが2名いる。

●五感を刺激する仕掛け　朝の教室では、3人の先生と2人の女生徒が丸いテーブルを囲み一緒に歌を歌い始める。歌が終わるとテーブルの真ん中に置かれた小さな箱の中から花火を取り出しマッチで火をつける。パチパチと音を立てて燃えるのを子どもたちはじっと見ている。音と光と火薬のにおいが授業の始まりを告げる。

それぞれの教室には、見て楽しみ、触って感じる仕掛けが天井から吊り下げられ、歩くことのできない子どもも、電動車椅子に乗って顔にぶつかるこれらの感触を体験する。

●地下に設けられたホワイトルーム　特別学校の地下には20帖ほどのホワイトルームがある。ウォーターベッド、光ファイバーの100本を超える光の点滅、バブルチューブ。幻想的な光の模様が部屋全体に映し出される。リラックスするための音楽、アロマキャンドルなど五感を刺激する環境の中で子どもとのコミュニケーションをとり、訓練を行う。ベッドに寝転ぶ子、動き回る子、光を目で追う子。使い方はさまざまだが、基本的に一人ずつが利用し、普通学級の子が休み時間にク


写真2

ラス全員で利用することもある。子どもたちはこの部屋が大好きだそうだ（**写真2**）。

もともと知的障害児の施設で考え出されたスヌーズレンの環境が学校にも取り入れられたものだ。障害施設の専門性を一般の子どもも享受することができるという試みは、学級崩壊などの問題を抱える学校にとっても有意義なことといえる。

■マルベリーブッシュスクール（イギリス）

オックスフォード市の郊外にあるこの施設は、情緒的に深刻なダメージを負った子どもたちを受け入れ、セラピーと教育、そして生活を通じて子どもたちを治療する施設である。5歳から12歳までの36名の男女児童が、総勢90名のスタッフと共に暮らす。施設は学校と隣接する4つのコテージからなる。

●子どもの心を落ち着かせる部屋のある学校　クラスは、年齢に関係なくレベルによって3段階に分かれ、プレイセラピーを中心とした科目から徐々にアカデミックな内容が増え、3年で修了する。

教室は低い家具で分けられた学習のコーナーに交じって、三方を森の絵で囲みクッションを並べたコーナーもあり、教育とセラピーというこの学校の役割が現れている。かんしゃくを起こした子どもを落ち着かせるための小さな部屋も用意されている。壁全体に海の中の絵が描かれ、中にはソファ、ままごとセットなどが置かれている。

●ベッドカバーの柄を選ぶ　生活部門であるコテージは、1棟に9人の子どもが暮らし、基本的に個室を与えられる。この施設に入ることが決まると事前に子どもが下見に訪れ、ベッドカバーと枕カバーの柄を選ぶ。いよいよ入所でやってきたとき、子どもたちは新しい自分の部屋に自分が選んだベッドカバーが用意されているのを見つける。保護されるべき年齢の子どもたちにとって、見知らぬ環境はどれほど不安か。あらかじめベッドカバーを用意するという小さな心配りが、転居に伴うストレスを軽減する。

●心の状態を表す子どもの部屋　この施設で最も興味深いのは、居室のインテリアが子どもの情緒の状態を表すものとしてケアアセスメントの一つに取り入れられていることだ。入所間のない子どもは攻撃することで生き延びている。カーテンは引きちぎられ、ポスターは破り捨てられるため、部屋には何の装飾もない。窓は子どもが飛び出さないように金物で固定されている。1年経過した子どもの部屋には、破壊のあとは見られない。たんすや机が置かれ、壁にはぎこちないながらもポスターが飾られている（**写真3**）。



写真3

そして卒業間近の子どもの部屋は、ベッド、机、たんすがきれいに整えられ、子どもらしいポスターや置物など、年齢にふさわしい心地よく飾られた部屋があった。この取り組みを支援するためには、壊された施設を常に補修する必要がある。専属のハウスキーパーが部屋の中を毎日きれいにし、4人の修理スタッフにより壊れた箇所はすぐに修理されている。

ケアを必要とする子どもたちへのかかわりとして、部屋のインテリアを取り入れることは福祉施設の新しい視点といえる。

■クリースセントレット・ガーバゴードン（デンマーク）

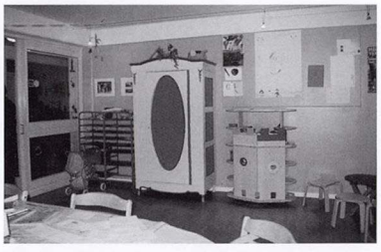
コペンハーゲン市内にあるこの施設は、4階建てのビルの2階以上を利用した緊急保護施設だ。ここに住める期間は約3ヵ月から半年、その間に利用者は定住できる住まいを探す。機能としては、緊急の宿舎を提供しながら、利用者が抱える個人的・社会的な問題解決への支援を行うと共に、問題を抱えた子どもたちへの特別な支援を提供している。

●質素な居住空間と快適な共同室　宿泊の住居にはダイニングテーブル、ソファ、ベッドなど最低限の使い込まれた家具が置かれている。次の生活に踏み出すために、あえて質素な部屋にしていると想像される。一方、4階にある共同室は上質な家具やシステムキッチンの整った明るく広々とした空間で、屋上テラスにつながり、夏にはバーベキューを楽しむことができる。

●最も重視されるスタッフルーム　この団体のオフィスは2人部屋で、一人ひとりに木製の広いデスクがある。スタッフに良い環境を与えるのがここのボスのポリシーだ。部屋の一角には籐のソファに赤いクッション、ペンダント式の照明器具に、観葉植物や絵画が飾られている。このソファに座って利用者の相談に対応するのだろう。落ち込んだ気持ちを癒してくれるにふさわしい設えだ。

●セラピストのいるチルドレンズランド　特筆すべきものは「チルドレンズランド」だ。施設内で生活する18歳までの子どもが利用し、教育心理学を学んだ職員が子どもたちに心理的サポートを提供している。

廊下の突き当たりにあるドアを開けると真っ赤な壁と白い柱のホールに入り、大きなキリンのぬいぐるみが置かれ、まるで別世界のようだ。大小の部屋があり、一番広い部屋には大きなテーブルを中心に、子ども用のキッチンや衣装ダンスがある（**写真4**）。中にはカラフルな衣装が用意され、遊びに来た子どもたちはさまざまな衣装を身に着けてロールプレイを楽しみ、スタッフはその様子を見て、子どもの心理状態を観察する。ほかに遊具の部屋、サンドバックやトランポリンのある運動の部屋もある。


写真4

チルドレンズランドは週に2回開かれ、家族での利用や子どものお誕生会にも利用されている。チルドレンズランドのような、子どもの気持ちに寄り添った環境設定がすべての施設に望まれる。

（にい　るりこ）



ベビーカーを押して病院の庭を散策する近隣の住民―NTT東日本関東病院

各論3

病院緑化におけるホスピタリティ

千葉大学大学院園芸学研究科
准教授

岩崎　寛

京都府出身。岡山大学大学院自然科学研究科修了、博士（農学）。
日本学術振興会特別研究員、兵庫県立大学講師を経て、現職。学生時代は森林生態や樹木生理について学ぶ。博士号取得後、医学的根拠をもとにした植物の療法的効果や医療福祉機関の緑化に関する研究を行う。現在の専門は緑地福祉学、環境健康学。登録園芸療法士、気候療法士（ドイツ）の資格を取得。
著書に「「環境と福祉」の統合」（有斐閣、共著）、「最新環境緑化工学」（朝倉書店、共著）など。
現在は、ガン緩和ケア病棟における園芸療法プログラムや、東京都奥多摩町の森林セラピー事業、東京ミッドタウン等の都市緑地における療法的効果の調査などを進めている。

■緑の療法的効果

これまでの造園や都市緑化等の分野におけるランドスケープは、デザイン的に優れたものや利便性に優れたもの、ユニバーサルデザインを取り入れたものなどが評価されてきた。しかし超高齢化社会の現在、ユニバーサルデザインを取り入れることは特別なものとして評価されるのではなく、取り入れてあることが一般的な基準として考えられなければならない。また、デザイン的な要素は評価する個人によって評価基準や好みが分かれることから、一般的に評価することは困難である。

年代、性別などにかかわらず、一般的に評価される基準を考えたときに、「健康」というキーワードが挙げられる。人の心身の「健康」を確保し、維持することは、人による好みではなく、年齢、性別、職種にかかわらずすべての人にとって必要とされるものである。さらに近年、健康に関しては国策としても大きな転機を迎えており、これまでは難病治療など、病気になってからの対応を重点的に行ってきたが、これからはメタボリック対策に代表される特定検診制度の義務化など予防医学が重要視されている。つまり、病気になる前の段階で食い止めることである。「健康」が要らない人はいないはずである。われわれは「健康」を維持するために、少し値段が高くても特保マークの飲み物を買い、サプリメントを買って飲むのである。

一方、近年、森林療法や園芸療法など緑の療法的効果が注目され、それらを取り入れた緑化に大きな期待が寄せられている[1)]。緑の療法的効果が少しずつ明らかになってきた今日、身近な緑が人の健康に大きく寄与することがわかってきた[1)]。つまり、緑は自然界におけるサプリメントなのである。しかし、これらをうまくわれわれの生活の中に取り入れていくアイデアや工夫がまだ足りないのが現状である。

■病院ならではの緑化とは

病院という空間は、自らが病気で診察に訪れる、入院する、または家族の付き添いや入院の見舞いなど、常に緊張や不安を抱えた特殊な空間である。また患者に限らず、職員や医師、看護師など病院に勤務する人々にとっても、毎日不安や緊張を抱えた人々と接することから、肉体的な疲労だけでなく、精神的な疲労もかなり大きい場所である。

そのような中、厚生労働省が管轄している国立病院機構では病院内に積極的に緑を取り入れる「ガーデンホスピタル構想」を打ち出したことや、植物によるストレス緩和効果などの研究が進み、その効果が明らかになってきたことから、積極的に緑を取り入れようと考える病院も徐々に増えている[2)]。しかし、病院緑化に関するマニュアルのようなものはなく、ストレス緩和を目的とした病院緑化が十分に浸透しているとは言い難い状況である。

筆者らの調査によると、多くの病院において何かしらの植物が植栽されていることがわかっており、病院関係者へのアンケートにおいても病院に緑は必要であるとの回答が多かった[4)]。ただ、多くの病院に緑化の状況を調査したところ、維持管理の楽なツツジ類などがエントランスに植栽されており、公園や学校、オフィスビルの緑化とほとんど変わらない緑化であった[3)]。「病院」という特殊な空間ならではの緑化でなくていいのであろうか。

病院緑化の研究をしていると、「病院緑化に適した緑って何ですか」と質問されることが多い。しかしその質問に一言では答えられない。「病院」とひと口に言っても、様々なタイプがある。複数の診療科から構成される総合病院から、子ども病院などの単科病院、デイケアセンターのような施設まで様々なものがあり、それぞれの病院で緑を取り入れる目的や期待する効果が異なるからである。また、診療科による違いだけでなく、その立地や周辺環境、病院の規模の違いなどによっても求められる緑は異なると考えられる。つまり、それぞれの病院の目的に合った緑を提供する「クライアント別病院緑化」が必要である[3)]。病院はオフィスや学校、都市公園などの緑化とは異なり、利用者の状態や目的などが他の空間とは異なることから、「病院ならではの緑化」を検討する必要がある[3、6)]。

■子ども病院における緑化

ホスピタリティの基本は、その場を利用する人々に対し必要な要素を提供し、満足して

いただくことであるといえる。そのためには、その場を利用する人のニーズを把握し、それをいかにうまく提供するかが重要となる。

子どもを対象とした専門病院におけるホスピタリティとは何であろうか。病院に長期で入院する子どもにとって、病院という場所は治療だけでなく生活そのものの拠点となる。よって、長期滞在型の子ども病院では、治療環境だけでなく、子どもの生活環境にも配慮する必要がある。特に、子どもは成長段階で「遊び」を通して様々な事を学んでいくが、病院という特殊な空間では、それらを容易に行うことは困難である[5]。これまで、子ども病院における遊び環境に関しては、屋内環境に関する研究がほとんどであり[5]、屋外環境とそこでの活動に関する研究はほとんど見られない。しかし、子どもが遊びから学ぶことの中には屋内環境だけでは得られないこともあり、屋外の緑地空間で自然や植物と触れ合うことも必要であると考えられる。

そこで、子ども病院における緑地利用の現状と課題の把握を試みた。子どもたちの病院での活動および緑地利用の実態を把握するために、アンケート調査を実施した。アンケート内容は①病院内での子どもの活動空間と活動内容②屋外空間の利用状況③屋外空間の利用に対する病院関係者の意識④屋外空間の改善点の4点を中心に作成した。「日本小児総合医療施設協議会」会員施設である全国30ヵ所の子ども病院の看護部あてに送付し、「普段から患者（子ども）と接している方」に回答を依頼した。

その結果、子ども病院における子どもたちの活動は、屋内空間での活動が最も多く、遊びだけでなく学習、リハビリなど幅広く利用されていることがわかった。一方、屋外空間に関しては利用実態はあるが、その内容は「遊び」としての利用がほとんどであった。しかしアンケート結果から、病院側が屋外空間に求めているものは多岐に渡っており、「遊び」以外にも、より幅広い利用が期待されていることがわかった。特に「学習空間」として期待されている面は、子ども病院特有の利用方法であり、一般の子どもたちと同様に、屋外空間で学ぶ機会や自然とのかかわりを病院でも提供したいと考えていると推察される。また緑地空間としては、子どもたちだけでなく、世話をする保護者のストレス緩和の場としても期待されていることがわかった。



子供病院における緑化事例
—国立成育医療センター

しかし改善点に関するアンケート結果から、現在の子ども病院においては、これら多様な利用が十分にできる環境ではないことがわかった。よって、今後の子ども病院の屋外空間においては、一般の病院における屋外空間の利用を考えた設計だけではなく、子どもたちが植物と触れ合える空間を取り入れるなど、子ども病院ならではの設計を考慮する必要があると考えられた。

■コミュニケーションの場としての病院 —緑を介して地域に開かれた病院へ

筆者らの調査結果では、「病院の緑は地域の緑化に貢献している」と意識している病院が多いという結果が得られた[2]。実際、緑地の少ない都市域においては、病院内の緑地は地域の貴重な緑資源であると言える。

東京、五反田にあるNTT東日本関東病院は病院の敷地内にある庭園を一般に開放している。通常、病院内の中庭に入るには病院のロビーや受付を通り抜けなければならず、公園のように気軽に散歩をしたり、通勤通学の際に通り道にしたり、買い物帰りに立ち寄ったりという感覚では利用しづらい場合が多い。しかしこの病院は、病院内からでなく、病院外から庭園を利用できる出入り口が設けられており、先のような利用者も多く見られた。当然、管理上の問題など難しい点も多いが、このように地域の人々の利用があり、病院に対する愛着を持ってもらうことが、地域に根ざした病院を展開していくことにもつながると言える。また緑の少ない都市域での限られた緑地の有効利用として、病院の緑は多くの可能性を秘めている。緑を介して地域に開かれた病院と常に密接な関係を持つことで、健康に対する地域住民の意識の向上が期待でき、また病院側にとっては、病院内の緑地が開放されることにより、入院患者の社会との接点としての機能も果たすことになる。

地域の住民が医療福祉施設をもっと身近に感じることで、それら施設への愛着や親しみを持ってもらうことが予防医学時代の新たな病院のあり方であると考える。

病院は英語で「ホスピタル」と言うが、このホスピタルの語源は中世ラテン語の「ホスピターレ」であり、「ホテル」と同一語源である。そして、ラテン語の「ホスピターレ」とは「巡礼、参拝者、旅人をもてなす大きな家」のことであり、古代ローマ人は旅に出ると、ここに宿泊し、旅で受けた傷や病をホスピターレのもてなしで治して、心身共にリフレッシュし、また新しい旅に出たと言う。現在、日本の病院は単に病気を治療する場となっているが、本来の意味での病院の役割は、「心と体の傷を癒す場」であり、「人々をもてなす場」である。

これからの新しい病院は、「心と体の傷を癒す場」「人々をもてなす場」として、病院単体での機能を考えるのではなく、地域の中の病院として、いかに地域と連携してその機能を発揮していくかが重要な課題である。患者や職員だけでなく、地域の人々と共に病院が発展していくためには、人と人、地域と病院を結びつけるコミュニケーションツールが必要不可欠である。病院における「緑」は、それらを結びつける身近で有用なツールなのである。

参考・引用文献

1）岩崎　寛：緑地福祉学の構想と実践. 広井良典(編)「環境と福祉」の統合、有斐閣、pp103-122 (2008)
2）岩崎　寛・山本　聡、他：病院における緑化の現状と問題点—兵庫県における事例—、日本緑化工学会誌、30-1、pp352-355 (2003)
3）岩崎　寛：病院における緑の必要性. 景観園芸入門編集委員会（編）「景観園芸入門」、ピオシティ、pp140-149 (2005)
4）宮下佳廣・岩崎　寛：病院における緑環境の現状に関する研究—病院の特性から見た緑化の考察—、日本緑化工学会誌、35-1、pp87-93 (2009)
5）岩崎　寛：植物の療法的効果を取り入れた病院緑化—予防医学時代における緑の役割、病院、67-11、pp979-983 (2008)
6）岩崎　寛：生理的・心理的効果を取り入れたランドスケープデザイン、医療福祉建築、159、pp 2-3 (2008)

（いわさき　ゆたか）



各論4

医療施設のサイン計画

㈱コトブキ

黒田裕子

1985年武蔵野美術大学工芸工業デザイン学科卒業。同大学研究室勤務を経て、1986年㈱コトブキ入社。
ストリートファニチャー、サインのデザイン・設計・商品開発に携わった後、2002年より医療環境開発室チーフディレクター。
主な担当に、「財団法人竹田綜合病院山鹿クリニック」、「町立田沢湖病院」、「医療法人仁成会高木病院」、「東京女子医科大学八千代医療センター」など。
現在、シーティングカンパニー事業開発部。

この数年、フォントメーカーから次々と「UDフォント」が登場している。これらのフォントは、ユニバーサルデザインの視点に基づき、①ふところ・ギャップ・ホールが大きく②おのおの独立したシルエット（外形）を使い③一部が隠れた場合でも何の文字かを想像しやすいデザイン—等の特徴がある。建築内の案内に都合がよい点は、①従来よりも遠くからでも②素早く（移動しながらでも）③文字とサインを見る人の間に障害物（例えば柱・植物等）があっても、識別しやすくなる可能性が高くなる—ということだ。文字を組む場合にはまた別の留意点があるが、病院のサイン計画では文字を記号（受付番号等）としても使うことが多いため、このような特徴は大変助かる。

サインは、文字による情報提供という点では代替手段のない役割であるだけに、伝わる精度の高さが大切である。

■医療施設とウェイファインディング

施設のサイン計画において、「わかりやすさ」で求められることは、文字情報のそれにとどまらない。特に医療施設では、ウェイファインディング（以下、WF）をトータルな空間デザインとして捉えられ、サイン計画もこの理念のもとで展開している。したがって、サイン計画は空間の中で調和しながらも視認性や誘目性を高めると同時に、案内の計画としては、何度か訪れた人にはある程度経験による記憶を頼りに、一つひとつのサインへの慎重な注意力を要さずとも案内が出来ることを目標としている。空間の違いや変化に気づいたり、方向を察したり予測しやすいようにすることが、わかりやすさへの大きな手がかりとなる。そのために、その時々に応じて、アートワーク・内装・照明・家具計画などと連携している。このようなWFで捉えたサイン計画をいくつかご紹介したいと思う。

2000年竣工の『国立生育医療センター』（東京都世田谷区）では、大胆な空間づくりとカラー計画、ふんだんに盛り込まれたアートワークによる「ハートフルサイン」、親しみやすさを演出しながらシンプルな情報提供を追求したサインの表現、出来たてのパンの香りがするB1Fのベーカリー等、これらはすべて設計当初から計画された「わかりやすさ」への配慮だ。“癒し”のアートは、ランドマーク（目印）であり、受付の記号でもある（**写真1、2**）。



写真1
エントランスホールのランドマーク
（写真：黒川未来夫）



写真2
受付のシンボルサイン
（写真：黒川未来夫）

吹き抜けのエントランスホールの大きなモビールは、遠くからでもホールの存在がわかる。フロアごとに統一された人型モチーフがサインの傍らでシンボルとして設けられ、子どもでもそこが受付であることを覚えられる。この病院は診察の順番が近づくとポケベルで待合に呼び出されるシステムのため、院内どこにいてもよい。そのため、このような大きなシンボルを用い、大まかな自分の位置を知ることや遠くからでも目的地がわかることで、長い移動がスムーズに行われるよう促している。

■色彩のわかりやすさ

サイン計画では、色彩がエリアを意味する手法がよく使われている。しかし、初めて訪れる患者さんがサインを見ただけでその色彩計画のシステムに注意することは少ないのではないだろうか。あれこれ考えた計画を、初めて見る人に瞬時にわかってもらうのは難しい。WFの観点では、色彩の違いのみでエリアの違いをハッキリと意識してもらうために、説明しなくても感じられるシンプルな計画で、設定したテーマカラーの印象に残る使い方をする。

7階建ての『山鹿クリニック』（福島県会津若松市）は全館外来で、上下の行き来が多い。そのためフロアの認識が重要と考え、フロアごとにテーマカラーが展開されている

が、隣接するエリア（＝上下階）とは、識別や記憶がしやすいように、近い色は選定しない計画としている。腰壁・床・サインを同系色でまとめ、そのフロアに到着した時に、「○○色のフロア」ということが容易に理解できる。また、EV前にはフロアごとに違う形の家具を、レイアウトを変えて置き、縦動線の拠点の違いを強調している（**写真3**）。テーマカラーが内装に十分に反映されているため、サインは、存在感を抑えた調和を重視している。



写真3
フロアで印象の異なるEVホール
上：3階
下：5階



■あかりのかたちで導く

24時間365日体制の綜合・救急診療科外来を持つ『東京女子医科大学八千代医療センター』（千葉県八千代市）は、地域に親しまれる病院づくりのために、建築内環境に加え、外部空間にも配慮している病院で、「気配を感じる院内環境」をテーマに、デザイン展開がなされている。入るとまず目に飛び込むのは、夜間に美しくライトアップされる楽しい形のアートだ。昼夜を問わないスムーズな誘導のためのランドマークの役割とともに、もてなしの気持ちを表現している（**写真4**）。

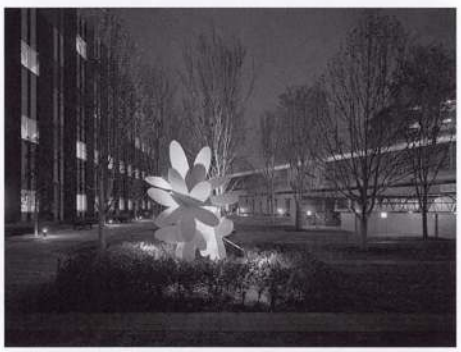


写真4　ライトアップで浮かびあがるアート
（写真：太田拓実）



写真5　アートの施された明るいエスカレーター周り

建築内部は、中央のエスカレーター上部のトップライトが明るい自然光のエリアをつくり出し、所在がさりげなくわかり、空間を把握しやすい（**写真5**）。サイン計画の特徴は、照明と組み合わせていることにある。各待合の入り口は三角形に突き出したサインに照明を組み込み、トイレの入り口は四角形に突き出した照明と合わせたサインとし、それぞれ記号化している（**写真6**）。照明だけでも、待合かトイレかがすぐにわかる。



写真6　照明付きの、待合入り口とトイレのサイン

■メンテナンス

竣工後に、個別のサインの見直しが必要となることは残念ながらある。張り紙がされたり、サインが追加されたりと、対処のしかたは病院によって様々だ。これは、簡単にできるということだけではなく、今あるサイン計画の中でアレンジしにくいと思われているのではないかと考えている。

『御茶ノ水・井上眼科クリニック』（東京都千代田区）では、ユニバーサルデザインに立脚した病院環境の実現を目指し、様々な工夫を行っている（**写真7**）。その中で、継続して院内のサイン環境の向上に努めている具体的事例を紹介したい。

クリニックは、高層ビルの中の3フロアを利用しているため、内部にはビル全体を行き来するEVとクリニック内のみを行き来するEVとがある。この2種類の区別に患者さんが戸惑う場面が多く見られたために、実地検証を行った上で改善している。院内用EVの扉の前の床カーペットを遠くからでもわかるパターンとし、さらに視認性を向上させるために立体的な形の照明をEVの扉脇に設けた。どちらも、インテリア・サインのカラー計画で「共用部」のカラーとして設定していたグリーン系に統一し、サイン計画のコンセプトも環境も乱さず、視認性を向上させている（**写真8**）。アンケート調査によると、母数は少ないものの、これまで区別が「わかる」としていた利用者が約45％だったものが、90％近くに向上している。スタッフの労力もかなり軽減されていると思われる。



写真7　照明と床パターンを利用した誘導

サイン計画はコンセプトや表現のルール・システムづくりがわかりやすさのカギになってはくるが、計画自体の「余裕」のようなものが必要ではないかと思う。病院は増改築や用途の変更が多く、サイン計画も合わせて柔軟に対応できなければならない。余裕の幅を持たせる手法が、アートワーク・内装・照明・家具計画などとの連携だと思う。WFの観点からサイン計画がなされていると、コンセプトを維持しながら、環境の質を落とさずに見直しを行いやすいと考える。



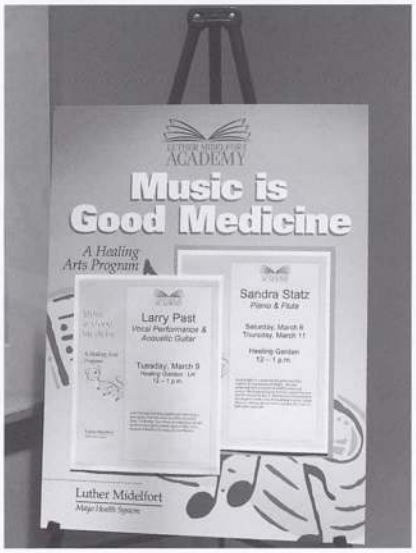
写真8　EV扉周り

＊

WFもユニバーサルデザインも、人間の五感に働きかけるデザインだ。これらを相互に利用し、患者さんにとっても、スタッフにとっても、“快適なわかりやすさ”、“自然な行動”につながる、安心できる療養環境づくりにサイン計画がより寄与できればと思う。

※「ウェイファインディング」の理念は、米国マサチューセッツ工科大学のケビン・リンチ教授の著書「都市のイメージ」（1960年）の中で発表された。

（くろだ　ひろこ）



各論5

病院建築の評価

～医業経営コンサルタントの視点～

㈱槇コンサルタントオフィス
代表取締役

槇　孝悦

1951年生まれ。日本大学理工学部卒業。
㈱槇コンサルタントオフィス代表取締役、㈳日本医業経営コンサルタント協会認定医業経営コンサルタント。
日本病院管理学会、日本ファシリティマネジメント協会ヘルスケアＦＭ研究部会、医療経営の総合的質研究会、日本グループ診療研究会、日本医療福祉建築協会、医療経済学会等に所属。
公立病院、民間病院における経営コンサルティングを中心に、医療関連サービスの企画・開発、ヘルスケア市場全般にかかわる調査・研究活動等、幅広いフィールドでコンサルティングを展開。

病院は産業分類上、「医療業」を実施する施設であり、わが国の社会保障制度における位置づけは、国民皆保険を支える「保険医療機関」である。医療提供体制は、自由開業医制とフリーアクセスを基本に市場原理で構築される道筋がつくられているが、国民皆保険により医師や病院などの医療資源が国民の身近に配置されていることが求められる。そのため、特に病院は、地方自治体が定める保健医療計画のコントロールを受けることになる。

このような仕組みに加え、「医療は非営利」という概念により、病院は、どちらかと言えば公的なイメージが強い施設として、国民に認識されてきた。しかし、医療提供体制の量的な充足による競争激化、国民生活の向上による価値観の多様化などにより、近年は、国民にも、医療従事者にも、医療機関は実態としてサービス業であるという認識が浸透してきている。サービス業として認知され始めた病院に対して、医療・看護の提供だけではなく、様々な要求が日常的に寄せられるようになってきた。この状況が、病院の運営をより複雑化し、ソフト面だけではなく、ハード面にも影響を及ぼす要因になっている。

よく「ホスピタリティ」という言葉を聞くが、当初は、建築空間的要素として「アメニティ」と同義語のように語られてきた。しかし、最近は「気配り」というような概念でも語られるようになってきており、「ホスピタリティ」の担い手となる医療従事者は、肉体労働、頭脳労働に加え、感情労働という面も要求されるようになった。その結果として、医療の現場は単に業務が忙しいだけではなく、非常にストレスフルな職場環境になってきている状況がうかがえる。

病院がストレスフルな職場環境になると、雇用の不安定化とともに、医療安全を脅かすリスクが増大することになる。病院の施設数は減少しているとは言え、これだけ医療需要が増加し、医療従事者が増えてきた中で、患者、家族、地域住民、そして医療従事者のそれぞれの視点で医療サービスのあり方を再検証する時期にあると考えられる。

医療従事者にとって、誇りを持って働ける職場、崇高な使命感と連帯に支えられた職場というものはもはや幻想とも言える。「ホスピタリティのあるケア空間」というこの特集において、医業経営コンサルタントとして、病院建築の評価の視点を提示するというテーマを踏まえながら、定説がない中で今まで感じてきたことを述べてみたい。

■患者は病院に何を期待しているか

これまで数多く報告されている患者満足度調査等によれば、患者が病院を選択する理由のトップはアクセスの良さである。特に、患者の多くが高齢者であり、いくらよい治療が受けられるといっても、自宅から遠い病院に通うことはできない。また、独居、高齢者世帯となると入院の準備も大変であり、家族の見舞いのことも考慮しなければならない。

患者負担が３割となり、家計の負担感は増しており、今日の経済情勢の影響により、医療費の負担能力について不安を持つ患者も増加している。傷病で苦しい上に、金銭の心配をするとなれば、治るものも治らない。

こうした状況下、入退院機能を有する病院において医療相談業務が重要であることは論を待たないが、これには応分のコスト負担をしていないし、また、選択療養という自己負担の仕組みはあるものの、診療報酬上では手当てされていない。せいぜい８㎡／床以上の空間を提供した場合の療養加算などである。つまり、制度的には医療サービスに「ホスピタリティ」という概念は存在していないのである。

一方、医療は平等に提供するという国民皆保険のもと、混合診療あるいはメディカルツーリズム等の議論が再燃してきており、医療サービスにおける競争原理が更に働く可能性が出てきた。国際競争力のある病院をという意見等もあるが、これらの議論とは一線を画したい。

多くの患者は、決して病院に快適さを求めているのではない。また、あれこれ事前に比較検討を行って病院を選択しているのではない。患者の要求はシンプルであり、今も昔も基本的な部分で変化はない。できるだけ、自宅から近い施設で、安く、早く苦痛を取り除いて欲しい、安心して退院できる状況にしてほしい、と求めているのが現実である。

■「安心感」と「安堵感」のある空間

前述した患者の要求を言葉で表現すると「安心感」と「安堵感」であり、一言でいうと、「信頼できる」病院を選びたいということに尽きるであろう。信頼の矛先は、ハード面では規模（大きい病院）、機能（最新の機器）に向く傾向にあるが、最も大きな要素は医師、看護師、受付職員などの医療従事者の対応であろう。

しかし、医療従事者は既に疲れきっている。燃え尽きかけている。ならば、患者に選択される病院をめざすためにも、医療従事者の疲れと燃え尽きを未然に防ぐ「労働環境」としての空間づくりに注力すべきではなかっただろうか。これについては、診療報酬というシバリの中で投資効果を十分説明できないため、誰もが決断できないでいる状況があり、建て替え計画の中でコンセプトとしては唱えられても、最終的には予算と面積配分の仕分けにより、医療従事者のための空間は総じて後回しにされる。今後の病院建築においては、病院空間にはつらつとした医療スタッフがいてこそ、患者が「安心感」「安堵感」を感じるということを、経営者も設計者も、もう少し真剣に考えるべきであろう。

■医療サービスは複雑である

医療サービスを提供する病院の機能は多岐にわたり、空間構成要素は更に複雑である。病院建築は機能を効率的に組み合わせてつくられるべきであるが、「ホスピタリティ」という概念導入の前に、その組み合わせに不整合が生じている状況がうかがえる。



ひところ、「病院らしくない病院」という言葉も語られた。しかし、これは論理矛盾である。病院はあくまでも病院らしくつくりこまなければならない。医療労働は肉体労働であり、高度な頭脳労働であり、更に感情労働の要素も求められるようになってきた。これに医療サービスと生活サービスを掛け合わせたらどうなるか、気の遠くなるようなサービスメニューが必要となる。

この部分の骨格を固めないで、「ホスピタリティ」などという言葉を出したとたん、アイデア合戦が始まり、トピックス的な成功事例が語られ、結果として全体機能の中で違和感のある効果の無い投資が行われる事例も多い。医療サービスは複雑だからこそ、あれもこれもではなく、基本部分を徹底的に議論して、重点化することを決めて構築すべきである。

■よい病院とは

医業経営コンサルタントとして、「よい病院とはどのような病院を言うのか」と尋ねられたら、躊躇なく「使い込んだ病院である」と答える。新しい古いではない。使いこなせていない病院を見た時が最も落胆する。病院を使い込むには、マネジメントが必要であり、「ホスピタリティ・マネジメント」という言葉、ハードとのかかわりの中では「ファシリティー・マネジメント」という言葉もある。いずれも、病院には取り入れやすい概念である。

「あの病院でぜひ受診してみたい」などとは誰も思わない。できれば利用することを避けたい施設である。したがって、病院の評価を行う際は、そこで働く人こそ最大の評価者として捉えるべきである。

■よい病院建築とは

経営の立場から言うと、よい病院建築とは「変化に対応できる建築」「LCC（Life Cycle Cost）のよい建築」である。しかし、それはつくり替えやすいということだけではなく、主張を持った病院建築であってもよい、変化に対応しなくてよい部分もあるはずである。

病院の運営はICT（Information and Communication Technology）システムの導入でどんどん変わる。診療報酬改定のたびに施設基準も変わる。制度の誘導ではなく、今ここにいる患者、働いている従業員のニーズをしっかりと見つめ、普遍的な要素をきちんと織り込んでつくりこむことが重要である。医療サービスはコミュニケーションが基本であり、情報システム以外でのコミュニケーションの場をきちんと確保することも必要である。職員食堂をなくしただけで、部門間の連携が悪化した病院もあると聞いている。

整理整頓が大事と誰もが思っているが、ハードの制約の前に諦めている病院も見受けられる。機能の詰め込みは日本人の得意とするところであるが、「ホスピタリティ」となると限られた敷地、床面積、財政上の制約に頭を抱えざるを得ない。最低限具備すべき「ホスピタリティ」の仕組みとは何かを議論することが求められる。

■経営的視点の前に

医業経営が厳しい状況の中で建て替え計画を検討する際、医業経営コンサルタントが投資抑制の示唆をすると、たいした根拠も無く受け入れられる。しかし、初期投資は膨らむが、長期的には経営的に貢献できると思われる機能もあり、苦慮するところである。つまり、この投資抑制で切り捨てた中に真の「ホスピタリティ」実現要素が含まれていたのかもしれないと悩むのである。こうした時、その病院の組織文化を図り知ろうとできる限りの努力をし、職員が働きやすく、働き続けたいと思う職場環境の確保を起点として、投資検証を行うように心がけている。

見た目によいシステムは、次に訪れたとき風化していることが多い。病院の情報化はますます進み、医療機器も進歩していく中で、時間軸で空間利用を考えていく必要がある。残念ながら、その視点を持てるのは、われわれコンサルタントではなく、設計者であると考えている。

（まき　たかよし）

各論6

ケア空間のバリアフリー

㈲アトリエ ユニ代表取締役
NPO法人 高齢社会の住まいをつくる会
理事長

吉田紗栄子

1943年生まれ。1966年日本女子大学家政学部住居学科卒。1980年日本大学理工学部博士課程前期修了。
一級建築士事務所　有限会社アトリエ ユニ代表、NPO法人 高齢社会の住まいをつくる会理事長、日本女子大学非常勤講師。
大学卒業以来　一貫してバリアフリー住宅の新築、リフォーム設計に従事。
住宅相談、セミナー講師、著述、商品開発などバリアフリーを広めるための活動をしている。

■バリアフリーのとらえ方

1964年の東京オリンピックのあとに開かれた第2回パラリンピック（第1回は1960年のローマ大会）に、日本赤十字語学奉仕団の一員としてイタリアチームと起居を共にしたことが、私のその後の人生を決定することになるとは予想もしていなかった。パラリンピックで出会ったイタリアの選手たちは皆陽気で、普通に家庭を持ち、仕事を持った上でスポーツを楽しむごく普通の人々だった。当時住居学科の3年生だった私は、卒業論文に“車いす使用者の住宅”を取り上げた。パラリンピックで知り合った日本選手団の人々がどんなところに住んでいて、どのように暮らしているのか訪ねて歩いたり、すでに出版されていたアメリカのバリアフリー住宅に関する本を参考に論文を書き上げた。

このパラリンピックをきっかけに、車いすを使用しているAさんの住宅を設計することになった。バリアフリーという言葉さえ聞いたことのない時代、もちろん設計マニュアルも何もない。しかし私の頭のなかには“Aさんが障害者である”という観念はまったくなかったので、与えられた設計条件の一つに、車いすを使用しているという項目が加えられたことに過ぎなかった。私が大切にしたことは、Aさんと家族にとって住まいはどうあるべきかということ。この考え方は、はじめて出会ったパラリンピックの選手たちとの交流のなかで自然に培われたものであり、50年近くたった今も変わらない。それ以来、障害のある方々の生活環境、主として住宅の設計を通して住まいを見つめてきた。

後にバリアフリーとして認知されるようになり、私の仕事の説明がたやすくなったが、それ以前はなかなか理解してもらえなかった。それでも障害のある方たちが口コミで私に設計を頼んでくださった。個別性の高い障害の状況とクライアントの望む暮らしの場を、試行錯誤を続けながらもつくり続け、今に至っている。

バリアフリーの考え方は、すでに1960年代前半には欧米で生まれていたが、法制化されたのは42年前の1968年、アメリカで制定された“建築障壁除去法”が最初である。その翌年、今では馴染みのある国際シンボルマーク（車いすマーク）が制定された。日本では、1983年運輸省から出された“公共交通ターミナルにおける身体障害者施設ガイドライン”が法制化の始まりと言える。建築物に関しては11年後、1994年の“高齢者、身体障害者等が円滑に利用できる特定建築物の促進に関する法律”（ハートビル法）を待たねばならなかった。アメリカで最初に法制化されて4半世紀がたった頃である。住宅に関しては1995年に建設省が出した“長寿社会対応住宅設計指針”がある。これを受けて1996年には住宅金融公庫のバリアフリー住宅の融資基準が定められ、この基準を守ると、低金利で住宅資金を借りることができるようになった。その基準のなかには、現在バリアフリー住宅の三種の神器のようにいわれている“段差の解消”“手すりの設置”“廊下や出入り口の有効幅員の確保”が謳われている。この基準の影響力は大きく、バリアフリーというとどうしてもこの3つに絞られ、これさえ守ればバリアフリー住宅がつくれると勘違いしている人々が大勢いる。“バリアフリー？私には関係ありません”というのはまさにこのイメージを持っているからだと思われる。

私が設計を始めた頃はバリアフリーサッシなどというものがなかったので、店舗用サッシを使ったり、キッチンも車いすで使う場合は特注しなければならないといった時代だった。今、世の中にはたくさんの“バリアフリー商品”やユニバーサルデザインを謳った商品が出回っている。それ自体は、選択の幅が広がるという意味で歓迎すべきことではあるが、そのような商品を使うことでバリアフリー住宅ができると錯覚しているケースも多く見受けられる。ユニバーサルデザインをテーマにしたマンションのモデルルームを見にいくと、玄関の段差も手すりもユニットバスの仕様も、確かにユニバーサルデザインが適用されている。しかし間取りを見ると、寝室からトイレへは狭い廊下を直角に曲がらないといけないとか、将来トイレを広くする必要が出てきたときにパイプシャフトと動かせない壁に阻まれて、改修は厳しい状態であるといったようなことが起こっている。

また長年住宅相談にも携わってきたが、持

参されるプランを見ると、先に述べたマンションの例のようなケースが多いことに驚かされる。この部分は確かにバリアフリーだが、ここはどうなのかと疑問がわいてくる。なぜそうなるのか。私の想像に過ぎないのかもしれないが、一つは先に述べた公庫基準を守っているからそれで十分と考えているのではないか、もう一つはクライアントの生活の仕方の聞き取りが十分ではないのではないか、ということである。一緒に住む人々の暮らしに配慮していないケースが多く見受けられるのも、聞き取り方が偏っているからではないかと思われる。当事者だけに焦点を当てて設計を進めると、逆に当事者のためにならないという事態も起こってくる。家族にとっても暮らしやすい住まいの必要性がここにある。

障害の状況は個別性が高い。からだを家に合わせることが難しいケースが多いため、一つひとつの動作を可能にしていくためには、家がからだに近づかなくてはならない。そのことを突き詰めていくと教科書通りでは収まらない。多面的なアプローチで、家にいるかぎり障害をできるだけ軽減できる状況をつくらなくてはならない。また、変化するからだや、そのほかの状況に対して対応できる柔軟性も必要になってくる。

バリアフリーは、単に手すりをどうつけるかとか、どの浴槽がよいかといった問題の前に、クライアントの暮らしの器としてどうあるべきかとか、光や風をどう取り入れるのか、あるいはまた、安全を確保するためにはどうしたらよいのか、というようなことも含めたバリアフリーでありたいとずっと思い続けてきた。しかし、そのことを多くの人に知ってもらうことができないまま今日に至っていた。そんなとき、オーレ アンダソン氏の“Rooms for Care”というステキな本に出合った。

■“Rooms for Care”との出合い

私は12年前、名古屋で開かれた国際インテリアデザイナー会議で同じ分科会のパネラーをつとめたことから、アンダソン氏と交流を深めることになった。アンダソン氏はスウェーデン第2の都市ヨテボリ在住のインテリアアーキテクトで、長年にわたりさまざまなインテリアデザインを手がけ、同時に家具、照明器具、テキスタイル、ガラスなど幅広いプロダクトデザインにも手腕を発揮している。ヨテボリ大学、オスロ大学などで教鞭をとり、多数の著書を出版している。そのなかには“視覚障害児のための環境”も含まれており、アンダソン氏が福祉の分野にも造詣が深いことをうかがわせる。

5年ほど前にバリアフリーコンサルタントの小島直子さんと氏を訪ねた折、この本を手渡された。赤と黒で書かれた絵本のような可愛い本を見た瞬間、「これだ！」というインスピレーションが走った。一般の人々にバリアフリーを知ってもらうには、こういう絵本のような楽しいツールが必要なのだ。アンダソン氏は日本語に訳してもらえないかと言った。願ったりかなったりだった。

アンダソン氏はこの本を書くに至った経緯をこう説明している。アンダソン氏がインテリアアーキテクトとしてある病院の計画に携わっていたときのこと、医師や看護士とのミーテイングで一人の医師が質問した。“どの色が一番よいのでしょうか。建築家がこの病院の計画案を説明するとき、いつも決定事項だけしか説明してくれません。どうしてこの色を選んだのか、なぜこの材料を選んだのか、という理由を教えてはくれません。ときには言葉自体がわからないのです。建築家は「これでいいのです」としか言いません。これでは決して十分な説明とは言えません”。このことがきっかけで、アンダソン氏は建築関係者以外の人々にも建築がどのようにつくられていくのかということを理解してもらうためにわかりやすい本が必要と考え、スウェーデンの一自治体の支援を受けて“Rooms for Care”を出版した。10年も前のことである。この本は病院や福祉施設などに無料で配布された。その後、英文に訳された。（図1、2）

■出版とイベントの実現

4年前に翻訳を始めてから、いくつもの出版社に企画を持ち込み出版の可能性をさぐったが、よい本だが採算がとれないということで実現できなかった。2年ほど前に、当時所属していた（社）日本インテリアデザイナー協会（以下JID）の理事である小野由記子さんに話をもちかけたところ出版社を紹介してくれたが、やはり答えは同じだった。その理由は本の内容にあった。

この本は、建築を考える上で必要なさまざまな視点を取り上げている（目次参照）。出版社側からは一つひとつの視点に対してもう少し掘り下げた内容をつけ加え、ノウハウ本としても読み応えのあるものにしてはどうかという提案も受けた。しかし著者はその意見には賛成できない、この本はあくまで建築以外の分野にいる人々に考え方を伝えるために書いたもので、ノウハウ本ではないと言われた。結局、JIDの一つの分科会である「からだとこころのケアデザイン委員会」が中心となって出版することになった。2008年に50周年をむかえたJIDが、今後目指す方向の一つとして、超高齢社会にデザインの視点で貢献するという考え方に立ち、組織を挙げてケアデザインを取り上げることになった。ケア



図1　Rooms for Careの表紙―日本語版のためにデザインされたもので、スペースを意味している―



図2　目次とイラストの一部（JIDケアデザイン展報告書より）

デザインとは、いつでも、どこでも、どんなときでも人に寄り添い、豊かな暮らしを支えるためのデザインである。その出発点として昨年11月に、アンダソン氏を迎えてのシンポジウムや杖のデザインコンテストを含む企画展を行った。NHKの「おはよう日本」をはじめ各種メデイアに取り上げられ、大きな反響を生んだ。バリアフリーがどちらかというとデザインとは結びつきにくい言葉であるのに対して、ケアデザインは一般の方々も身近に感じられたようである。なにかにつけ影響を持つ団塊の世代は、おしゃれでデザインなどへの興味もある。これから年を重ねていくこの世代の人々が抵抗なく受け入れてくれることばとして、ケアデザインは今後広がっていくのではないかと思う。

“Rooms for Care”に話を戻す。この本の翻訳でどうしても訳せない言葉があった。それは著者の根底に流れる基本的な考え方を示す大切なフレーズだ。“Design is meant to serve people-all kinds”直訳すれば“デザインはあらゆる人々に奉仕することにある”となろうか。しかしこのフレーズを見開きに書いても、どうも訴える力に欠けてしまう。そのことをずっと悩み続けていた。そんなとき谷川俊太郎氏の講演を聞く機会があった。思いあぐねていたので、向こう見ずな行動に出た。谷川氏に助けを求めたのである。谷川氏は依頼の主旨を送るようにと快くファックス番号を教えてくださった。奇跡のような出来事であった。何回かのやり取りの末、素晴らしい言葉をつむぎ出してくださった。

わたしたちは
まずひとりのあなたの
身になることからデザインを始めます

かけがえのない
ただ一人のあなたのからだとこころが
おだやかにのびのびと
くつろげる場をかんがえます

ひとりのあなたの中に
みんながいるからです

このことばが本の巻頭をかざっている。このことばは、羽となって著者の考えを人々に伝えてくれている。この本は建築分野以外の方々のために書かれたものにもかかわらず、建築分野の方々から高い評価を受けている。私自身がそうであったように、日ごろ考えていてもなかなか伝えられない大切な視点がやさしく書かれていて、同じ畑の人やクライアントに読んで欲しいと思われてのことではないかと推察している。理由はともあれ、この本がもう一度個別対応のバリアフリーを考え直す一助になればこんな嬉しいことはない。

スウェーデンには、洗練されたデザインの福祉機器が多く見受けられる。工業デザイナーが、特殊浴槽とか手すりなどを手がけていると聞く。アンダソン氏もゴミ収集のためのコンテナやバス停をデザインしている。日本では機能性だけが重視されていることを思うと、うらやましささえ感じる。ケアデザインという考え方が広まり、日本でも、医療福祉分野にデザインマインドが当たり前のこととして受け入れられる日が、一日も早く訪れることを願ってやまない。

■バリアフリー住宅設計に見る“Rooms for Care”の視点

この本は病院を例にとって書かれているが、すべての建築に必要な視点である。住宅を設計する際にも当てはまる。日ごろ考えていることを、この本の目次にそって書くことにする。

●連携

“Rooms for Care”では、設計から建物の完成までにいろいろな職種の人がかかわり連携を取りながら進めていくものであると書かれている。住宅の設計ではクライアントと設計者が中心となるが、クライアントが高齢であったり障害があったりする場合は、医療、福祉の専門家との連携が重要になってくる。高齢者の場合、何らかの疾病のために障害が残り、自宅のバリアフリー化が必要になるケースが多く見受けられる。退院に先駆け改修をすませなければならないこともある。そんなとき病院の医療関係者に現状や今後の見通しを聞くプロセスが欠かせない。私たち建築関係者は医学についての知識は乏しい。わからないことは率直に聞くことで、設計に生かせることは多い。住宅の改修については理学療法士や作業療法士が係るケースが一般的だ。からだの動きや生活上の注意点など、具体的な話が聞ける。建築だけではなかなか解決できない問題も、このような専門家と共同作業をすることで糸口を見つけることもできる。例えば、現状のからだの状態に加え経年変化を考慮した計画や、どうしても取れない段差を超えるための訓練をしてもらうとか、便器への乗り移り動作を自宅に合わせて移動できるように工夫してもらう、といったことである。ただし医療関係者は、現場を見ていないことが多いので、設計者も自分の意見をしっかりと持つことが必要である。



写真1　道路から玄関までのスロープ―環境デザイナーとのコラボレーションでスロープを庭と融合させる―（デザイン／正木覚）

福祉関係の専門家には、主として受けられるサービスについてサポートしてもらう。改修費用の助成申請であったり、住宅での入浴が難しい場合、入浴サービスを受ける方法などである。いずれの場合も設計の早い段階で相談にいくとよい。

私の場合は比較的規模の大きい改築や新築で、照明デザイナーやエクステリアの専門家に協力してもらうことも多い。障害のある方の場合、建物でなく、外回りのデザインがとても大切であり、外回りも同時に完成しなければ生活ができない。設計も内と外を同時に進めることになるので、設計の早い段階から相談する。（写真1）

●色彩とバリアフリー

加齢による身体の変化のうち、視覚は比較的早い時期から自覚することが多い。老眼は40代から始まる人もいる。水晶体が黄変する白内障の症状も、程度の差こそあれ誰にでも起こる現象と言われている。このような視覚の変化により大切な目からの情報を見逃したり、見間違えたりする可能性が出てくる。そ

こで住まいの側でそれを補い、安全性を高める工夫が求められる。

水晶体の黄変により色の見え方が変化し、青、緑、紫などは灰色がかって見え、それぞれの色の識別がつけにくくなる。例えば床と壁、建具、テーブル等の家具の色を選ぶときは対比のはっきりと出る色の組み合わせが必要になる。階段の段板がはっきり見えることも重要だ(**写真2**)。最近は床壁、天井、便器、手洗い器などすべてを白で統一しているデザインが多く見受けられるが、高齢者には見えにくく、反射によりまぶしさが増すため目の疲れが増す。赤は比較的よく見えるため高齢者用の製品には赤が多く使われている。(**写真3**)

視覚障害者のなかには、全盲の方ばかりでなく弱視、視野狭窄、色覚異常などさまざまな症状がある。この方たちにとっても色の問題は大きく、見え方に影響を及ぼす。個々の症状に合わせた色選びが望まれる。



段鼻に目立つ黒いゴムを埋め込み、ステップを見やすくしている

写真2　段板の色を変える



はっきり見えるように赤をアクセントカラーとして用いた

写真3　視覚に障害のある70代のクライアントのための浴室

●光とバリアフリー

高齢の方の住宅を新築したり、リフォームしたりする際に必ずといっていいほど要望として出されるのが“明るくして欲しい”ということ。加齢とともに水晶体が黄変し、より多くの明るさが必要になってくるのはよく知られている。一説によれば若い人の3倍の光の量が必要であるという。しかし同時にまぶしさも避けなければならないとなると、むやみに明るくすればよいという問題ではなくなる。特に白内障の手術をしてよく見えるようになると、このまぶしさを余計に感じるようである。また視覚障害がある場合は、その症状に応じた明るさや光の当て方などさらに解決しなければならない問題がある。(**写真4**)



写真4　加齢対応住宅の居間―吹き抜け上部から降り注ぐ光で居間全体を明るくする光のコントロールは、カーテンとブラインドを使用―

光の設計は、ただ照明計画をしっかりとするだけではない。できる限り太陽光を取り入れたり、調節したりするためには、設計の初期の段階からプランを練っていく必要がある。高齢になると家で過ごす時間が多くなる。昼間から照明をつけなければならないと電気代にもひびいてくる。土地の光をよく読み、適切な光を取り入れるように設計するのはなかなかの難問である。特にリフォームの場合は制約が大きいと言える。外壁をいじらず、窓からの光の量を増やす工夫が求められる。窓の開閉のしやすさも重要で、窓の高さを高くするとクレセントの位置が高くなり、操作しにくくなる。さらには太陽光の調節方法への提案も求められる。カーテンやブラインドなどまで設計段階で考える必要がある。

照明計画では、ベースライトと部分照明を組み合わせる方法がよいと思われる(**写真5**)。その場合注意しなければならないのが、球替えのしやすさである。お宅にうかがうとよく球が切れたままになっていて、暗いと言われることがある。踏み台やイスにのっての球替えはバランスを崩しやすい。怪我につながる可能性はできる限り排除したい。寿命の長い光源を選択することも大切である。



写真5　車いす対応住宅の居間―間接照明と部分照明の組み合わせを楽しむ―

●音とバリアフリー

聴覚は加齢とともに聞き取りにくくなっていくが、特に1000ヘルツ以上の高音域において顕著と言われている。個人差も大きく、また少しずつ聞き取りにくくなっていくので自覚していないことも多い。テレビの音を大きくして家族に迷惑がられたり、会話がスムーズに運べなかったりする。小さな音が聞こえにくくなっていくが、大きな音に対する不快感は変わらない。また高齢者に対する騒音調査では、エアコンのモーター音やトイレの給排水音などの低周波音に悩まされる傾向があるという。このようなことから、高齢者に対する音環境への配慮もまた大切な要素である。聞き取りやすい静かな環境をどうつくり出すか、大きな音を出しても迷惑にならないようにするにはどんな工夫がいるのか、同時に気配を感じることも大切で、相反する問題解決に取り組まなくてはならない。それは道路や隣家との関係に始まり、家全体の間取り、工法や材料選びにまで及ぶ。

●冷暖房・換気とバリアフリー

加齢による変化は、体温調節や温度の感じ方にもあらわれる。代謝が悪くなり体温調節がうまくいかないので、室温の管理が重要になってくる。身体障害のある方のなかにも、同じような問題を抱えているケースが多く見られる。このような場合、冷暖房方法の選び方、取り付け位置等設計をはじめから考えておくことが大切である。例えば寝室の冷暖房はベッドに寝たときに直接風がからだに当た

らないよう位置決めをしなくてはならない。

暖房の場合の熱源も安全を第一に考えて選ばなくてはならないが、ランニングコストもまた年金生活者にとっては重要な要素となり、選択の幅はあまり大きくはない。

高齢者の場合、においに対しても対策が必要である。加齢臭や排泄物のにおいを消すため、寝室には空調換気扇をつけるとよい。

●家具選びとバリアフリー

バリアフリー住宅を実現する手順として、身近なところから考えていくことも大切なことである。福祉用具をはじめとする、さまざまな道具類を使うことで生活しやすくなりはしないか、部屋を取り替えることで問題の解決ができないか、ということも考えてみる。家具もまた重要な要素である。

設計者は家具選びにどのくらいかかわっているのだろうか。住宅の場合、手持ちの家具を使うことも多く、予算がきびしいなかでは家具を新しくする余裕がないのが実情である。とはいえ可能なかぎり、高齢者や障害のある方たちに使いやすい家具を選び、あるいはデザインすることは重要なことである。

条件として挙げられるのはまずは安全であること。バランスを崩しやすい高齢者はちょっとしたきっかけで転倒する危険がある。家具を手すりがわりに使うことも多いのでしっかりしたものを選ぶ（**写真6**）。感覚が鈍くなっているので、ぶつかっても怪我をしないような形を選ぶ。また視覚が衰えることにより、家具をはっきり認識できるよう周りの色と対比させる。例えば床材の色と家具の色に明度差、彩度差をつける。身長が低くなり、からだの柔軟性がなくなり、手の巧緻性も鈍ってくるので、必要なものを楽にとることができるような収納家具を選ぶことも大切である。ものをとるために無理な姿勢をとるのは危険である。



写真6　立ち上がるときに支えとなる肘掛のあるソファー。クッションも固め―（デザイン／清水忠男）

次に使いやすいこと。高い位置、あるいは腰をかがめなければ使えない位置は避ける。幅の広い開き戸は動作の鈍くなった高齢者には使い難いので、引き戸など立ち位置を動かずに開閉できるものにする。つまみや取っ手、鍵などは大きめのものを選ぶ。椅子は4本の脚がしっかりと安定していると同時に動かすときに重くないものがよい。立ち上がりに助けとなる肘掛がついているものが使いやすい。ソファは座の部分がしずみこむようなものは避ける。

■終わりに

谷川俊太郎さんのことば、“わたしたちはまずひとりのあなたの　身になることからデザインを始めます”こそ“私たち＝設計者”が肝に銘じておかなければならない思想と言っていいのではないかと思う。マニュアル通りに設計すれば、バリアフリーが実現できていると考えているうちは本当の意味でのバリアフリー環境は広がっていかない。クライアントの立場に立って、クライアントが言い切れない事柄を設計に反映し、提案していくことが求められているのではないか。海外の事例を見学させてもらって感じるのは、障害があったり、高齢であったりしても、その人らしく生きていく環境が整っているということ。

私たち設計者がどれほど相手の想いを形にしていけるのか、難しい問題ではあるにせよ、これからも挑戦し続けていきたいと思っている。

参考文献

（1）“Rooms for Care”
オーレ　アンダソン著　吉田紗栄子　小島直子共訳　（社）日本インテリアデザイナー協会発行
（2）バリアフリー住まいをつくる物語
高齢社会の住まいをつくる会編　三輪書店
（3）50代リフォーム素敵に自分流
吉田紗栄子　寺林成子著　経済調査会
（4）自分らしく住むためのバリアフリー
住宅総合研究財団編　岩波書店

（よしだ　さえこ）

473

法令コーナー

建築確認手続き等の運用改善

国土交通省住宅局建築指導課

建築確認審査の迅速化、申請図書の簡素化、厳罰化の観点から制度の見直しの検討を行うため、平成21年10月以降、実務者や関係団体から幅広く意見聴取を行い、建築確認手続き等の運用改善の方針を平成22年１月22日に公表した。関係する建築基準法施行規則及び告示の改正については、平成22年３月29日に公布したところであり、同６月１日から施行する。

確認審査の迅速化関係

（１）確認申請図書の補正の対象の拡大等

「確認審査等に関する指針」（平成19年国土交通省告示第835号）（以下「指針告示」）において、確認申請図書の補正の対象を軽微な不備（誤記、記載漏れ等）としているが、不備（申請者等が記載しようとした事項が合理的に推測されるもの）とする。また、補正にあたっては、適合するかどうかを決定できない旨の通知書の交付及び指定確認検査機関から特定行政庁への確認審査報告書の報告を不要とする。

（２）確認審査と構造計算適合性判定審査の並行審査

指針告示において、建築主事等は構造に係る確認審査後に構造計算適合性判定を求めることとしていたが、当該確認審査を終える前に、構造計算適合性判定を求めることができることとする。

（３）確認審査等の報告に係るチェックリスト告示の簡素化

指定確認検査機関が確認済証等を交付した後に、特定行政庁へ提出するチェックリストを大幅に簡素化する。

（４）「軽微な変更」の対象の見直し

計画変更に係る確認を要しない「軽微な変更」の対象は、安全上の危険の度等が高くならない一定の変更の場合とされているが、これを、変更後の計画が建築基準関係規定に適合することが明らかな一定の変更の場合とする。また、「軽微な変更」の適用事例を提示し、運用の徹底を図る。

（５）大臣認定変更手続きの迅速化

超高層建築物等の構造計算や避難安全検証法等に係る構造方法等の認定の変更手続きについて、迅速化を図る。

（６）審査期間短縮及び審査バラツキの是正

構造計算適合性判定の対象物件については、現在の平均審査期間（約70日※）の半減を目指し、審査期間短縮に係る目標を設定するとともに、取組方針及び公表方法を「建築行政マネジメント計画」（仮称）の策定指針として発出する。

また、各機関に苦情窓口の設置と、それを通じた審査のバラツキ把握、及び審査員への指導等の取り組みを要請する。

申請図書の簡素化関係

（１）構造計算概要書の廃止

確認申請図書のうち、構造計算概要書を廃止する。なお、構造計算概要書に記載している「構造上の特徴」「構造計算の方針」等については、構造計算書の一部として、引き続き記載することが必要である。

（２）建築設備に係る確認申請図書の簡素化

（３）建築材料・防火設備等に係る大臣認定書の省略

建築材料（防火材料、シックハウス建材）、防耐火構造、防火設備、区画貫通の管及び遮音構造について、構造方法等の認定データベースに登録することにより、審査側が大臣認定書を閲覧できる環境を整備し、確認申請における大臣認定書の写しを、原則として提出不要とする。

※サンプル調査による平成21年７月から12月までの確認済証交付までに要した実日数の平均

厳罰化関係

（１）違反設計等への処分の徹底

「建築行政マネジメント計画」（仮称）の策定指針に、中間・完了検査の徹底、違反建築物対策の推進を盛り込み、違反設計等への処分を徹底する。

（２）広範なサンプル調査を実施

違反建築物対策を推進するため、広範なサンプル調査を実施する。

その他関係

（１）小規模な木造戸建て住宅等（４号建築物）に係る確認・検査の特例について、当分の間継続する。

（２）既存不適格建築物の増改築に係る構造耐力規定の緩和措置（平成21年国土交通省告示第891号等）について、周知徹底を図る。

（３）住宅性能評価及び長期優良住宅の認定についても、申請図書の簡素化を図る。

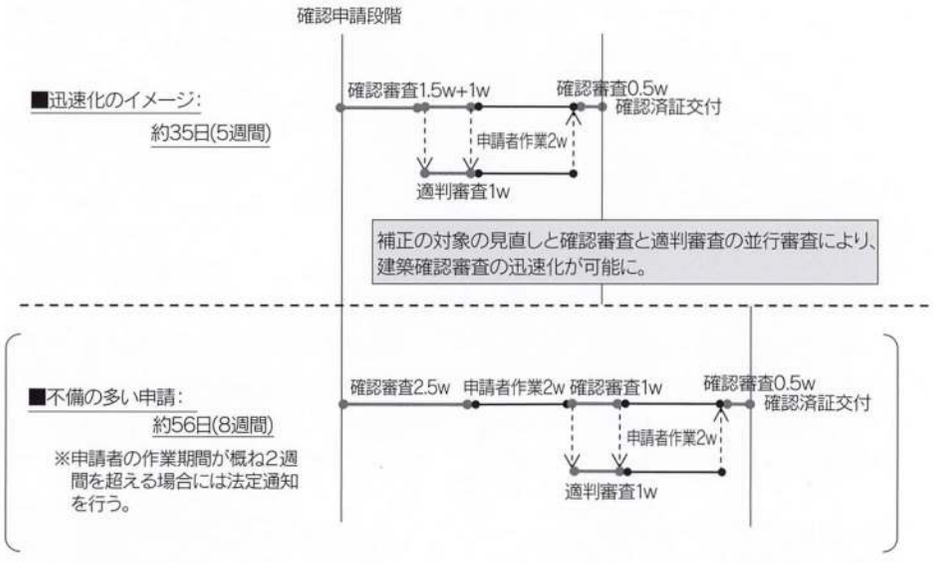
今後の予定

これらの円滑施行のため、平成22年４月末から５月末にかけて、都道府県別に、今回の運用改善に係る講習会を開催する。

詳しくは以下のURLをご覧下さい。

http://www.mlit.go.jp/report/press/house05_hh_000160.html

建築確認審査の迅速化のイメージ



竹中工務店技術研究所「新耐火実験棟」

西村俊彦
㈱竹中工務店技術研究所主任研究員、博士（工学）

竹中工務店技術研究所は、1993年に現在の千葉県印西市に移転し、当時から、多目的耐火炉（載荷能力10MN）、壁炉、ファニチャーカロリーメータ、コーンカロリーメータ等の防耐火に関連する実験装置が整備されて、これらの実験装置を活用した実験成果をプロジェクトに展開するなど多くの実績を上げてきた。しかしながら、実験装置の設置から16年が経過し、実験内容が多様化する中で、既存の多目的耐火炉では、実験条件が限定されることがあった。そのような背景の中、竹中工務店創立110周年の記念事業の１つとして、2009年８月に「新耐火実験棟」（**写真１**）を同敷地内に新設した。

「新耐火実験棟」新設の目的

2000年の建築基準法防火規定の性能規定化以降、耐火実験による部材の耐火性能の確認が重要となり、実験の種類や方法が多様化している。中でも、CFT柱やRC柱など、従来よりもはるかに強度の高い構造材料を用いた部材開発が急速に進んでおり、既存の多目的耐火炉では十分な荷重を載荷できなかった。そこで、載荷能力30MN、加熱時間８時間という日本最大級の性能を持つ多目的耐火炉を有する「新耐火実験棟」を新設した。

「新耐火実験棟」は、延床面積1,304㎡、最高高さ19.98mの規模である。実験棟には実験に必要なスペースのほかに、実験を観察するためのプレゼンテーションルームと環境配慮技術が付設されている。プレゼンテーションルームでは、①耐火炉内に設置した耐熱ハイビジョンカメラの映像②加熱時間③加熱温度④鉛直荷重・変位⑤水平荷重・変位をリアルタイムで表示し、観察者が実験の様子を理解しやすいよう配慮した。また、環境配慮技術として太陽光発電、風力発電、緑化外壁、環境配慮材料、ドライミスト、廃熱利用等を導入した。いずれも「環境の竹中」を具現化するために設置した技術である。これらの技術は、施設の使用を通して環境負荷等の測定を行い環境技術の開発に活用していく予定である。


写真１　新耐火実験棟


写真２　載荷装置

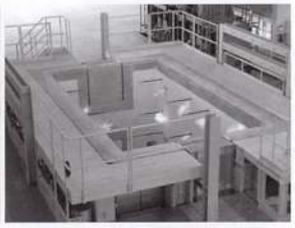

写真３　耐火炉

表１　多目的耐火炉の仕様

載荷能力	鉛直方向	（下向き）最大30MN （上向き）最大3MN
	水平方向	最大3MN
耐火炉の大きさ		$W3300 \times L6000 \times H4500$mm
加熱曲線		ISO834、RABTほか
加熱時間		最大8時間
試験体の種類		柱、梁、床
試験体の寸法	柱	最大断面寸法1000mm 最大高さ9000mm
	梁	最大幅800mm 長さ7500mm（支点間距離）
	床	最大幅6000mm 長さ4800mm（支点間距離）
付帯装置		耐熱ハイビジョンカメラ 冷却式球面座

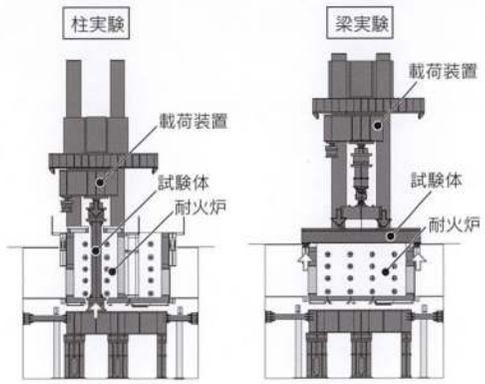


図１　載荷加熱実験の概念図

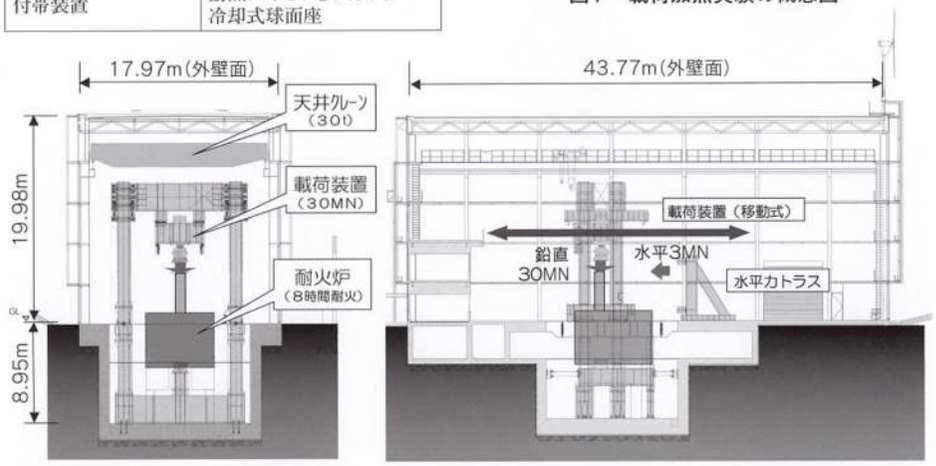


図２　「新耐火実験棟」概要図

多目的耐火炉の概要

多目的耐火炉　試験体に所定の荷重を載荷するための“載荷装置”と、試験体に所定の加熱温度を与えるための“耐火炉”で構成される。柱、梁、床等の主要構造部を耐火炉に設置して、載荷しながら加熱することができる（**図１**）。**表１**に多目的耐火炉の仕様を示す。

載荷装置　載荷装置（**図２・写真２**）は、４本の柱と２本の梁、断面直径800mmのジャッキで構成され、30MNの載荷能力（鉛直方向）を有している。30MNの荷重は鉄骨造で40階建て、RC造で50階建て程度の建築物の１階柱に作用する軸力に相当する。更に、水平方向にも３MNのジャッキを有しており、例えば火災により熱膨張した梁が水平方向に柱を押し出した状態を想定した実験を行うことも可能である。試験体の設置を効率的に行うことを目的として、載荷装置自体が水平方向及び鉛直方向に自走可能な構造とした。

耐火炉　耐火炉の内寸法は全長6.0m、幅3.3m、高さ4.5mで（**写真３**）、炉壁に計40個のバーナを設置している。最高で約1,400℃まで加熱可能であり、ISO834標準加熱曲線（最大８時間）、RABT、Hydrocarbon、RWSといった各種加熱曲線に対応している。炉の高さは4.5mで、標準的な階高である4.0mの柱を加熱することができる。また環境に配慮し、試験体の大きさに応じて炉内を適切な大きさに分割可能とすることで、加熱に必要な燃料を最小限におさえる計画とした。

本格稼働開始

新耐火実験棟施設は、最終調整を終えて2010年より本格稼働を開始した。今後、本載荷加熱装置を最大限に活用し、建築物の安全・安心の向上に対応すべく、防耐火技術の発展に寄与する研究開発に邁進する所存である。

（にしむら　としひこ）

14

再読　関西近代建築
――モダンエイジの建築遺産――

旧橿原神宮駅（橿原神宮前駅）

桐浴　邦夫

所在地／奈良県橿原市久米町618
計画／大軌改良課
設計／大林組設計部（村野藤吾）
施工／大林組
竣工／昭和14年7月（1939年）
構造／木造
規模／2階
種別／駅舎

■橿原神宮の整備と拡張

橿原神宮駅（橿原神宮前駅）は昭和14年（1939）、橿原神宮への玄関口の駅舎として、村野藤吾の設計により建築された。もっとも『建築と社会』当該号には設計は大林組設計部、計画が大軌改良課、とある。そのあたりについてはあとで示すとして、まずは橿原神宮を含むこの地の近代について少し触れておきたい。

橿原神宮は明治23年（1890）、『古事記』『日本書紀』に記された神武天皇の宮址があったとされる伝説上の地に建設された。神宮の建物は京都御所より下賜されたものである。本殿は入母屋造檜皮葺で、安政2年（1855）に京都御所に建造された温明殿（賢所）の移築であり、最初の拝殿は御所の神嘉殿の移築である（昭和6年、神楽殿として再移築）。

やがて境内が拡大整備され、昭和15年（1940）の紀元2600年を控え、神宮外苑となる橿原公苑の整備が行われていった。建国会館（のちの橿原会館）は昭和5年（1930）に昭和御大典の京都御所賜饌場の下賜を受けたもので、このとき再び移築されたものである。大和国史館（のちの奈良県立橿原考古学研究所付属博物館）は、中央部が急勾配の直線的な屋根とその脇に緩やかな屋根を組み合わせたデザインで、橿原神宮駅と同様の形態である。また、その形態は八紘寮にも使用されていた。そして橿原文庫が天理教団より寄贈され、のちに奈良県立橿原図書館万葉文庫となった。

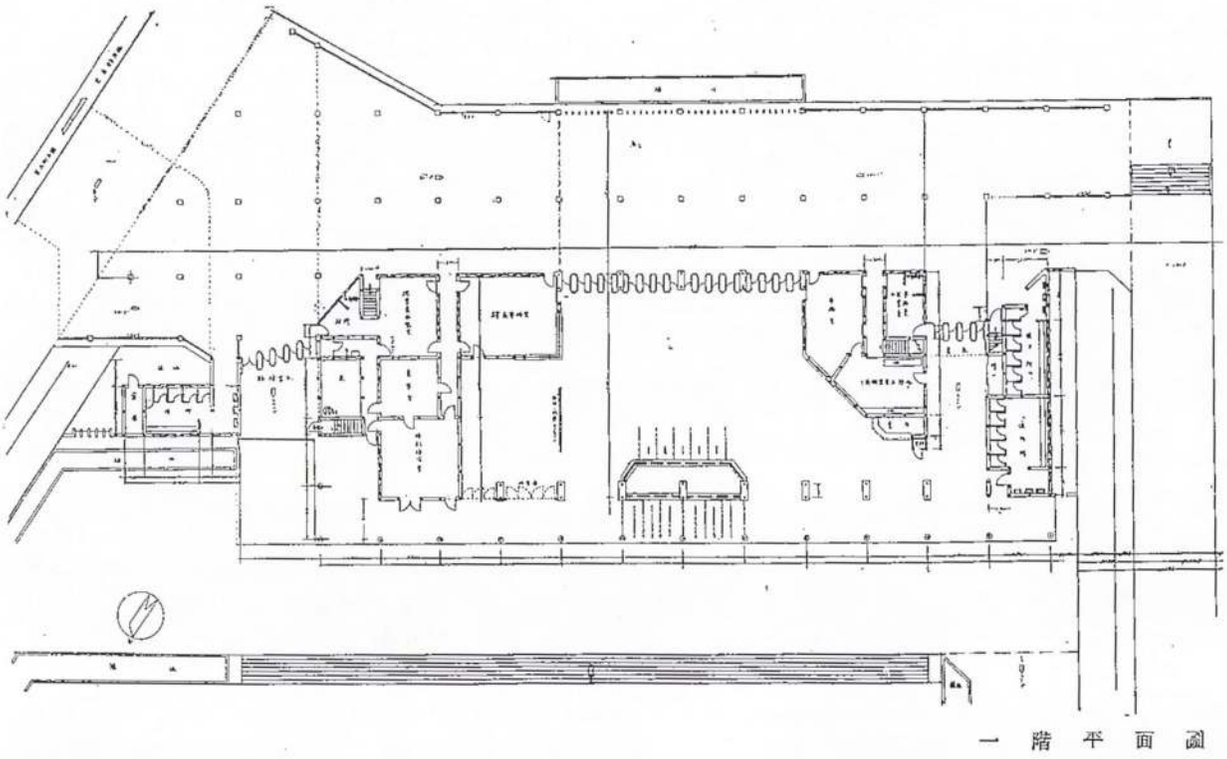
■鉄道の変遷と橿原神宮駅の開業

鉄道の歴史からみた橿原神宮駅（現在の橿原神宮前駅）の誕生は少々複雑である。おそらく昭和に入って、橿原神宮の重要性、注目度の高まりとともに、鉄道利用者の増加があったことが影響したものだろう。

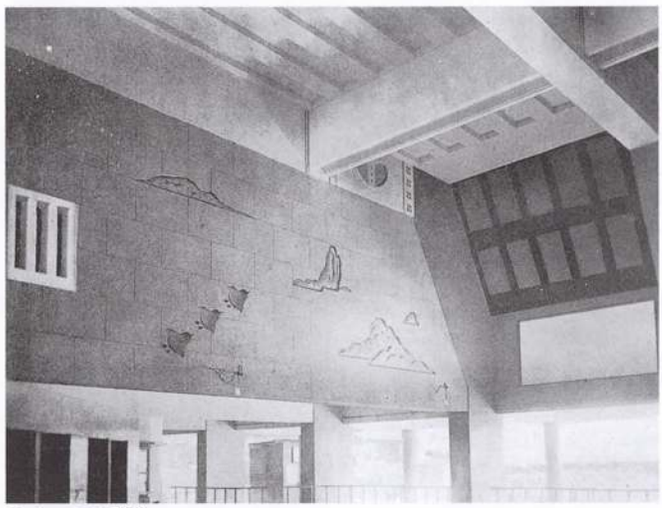
橿原神宮駅の場所に最初に鉄道を敷設したのは吉野鉄道（のちの近鉄吉野線）であった。しかし現在の位置に駅はなく、少し北に大阪電気軌道（大軌、のちの近鉄橿原線）とのターミナルとして橿原神宮前駅（のちに廃止）が設けられていた。やがて昭和4年（1929）、大阪鉄道（大鉄、のちの近鉄南大阪線）がこの地まで延伸し、吉野鉄道とのターミナルとして久米寺駅を開業させた。これが現在の橿原神宮前駅の前身である。ちなみに大阪鉄道には、その西側に橿原神宮駅（のちに廃止）があった。吉野鉄道は昭和5年（1930）大軌に併合され、大軌の電車が乗り入れることになった。昭和14年（1939）には、橿原神宮外苑の拡張のため、大軌は少し東に新線を敷設し、旧橿原神宮前駅を廃止した。このとき、大鉄も旧橿原神宮駅を廃止し、共同駅である久米寺駅を橿原神宮駅と改称した。ここで造られたのが現在の駅舎である。その後昭和16年（1941）、大軌は参宮急行と合併し関西急行鉄道となり、さらに昭和18年（1943）、大鉄は関西急行鉄道に合併され、その翌年には近畿日本鉄道に改組された。なお、駅名が現在の橿原神宮前駅になったのは、昭和45年（1970）のことである。



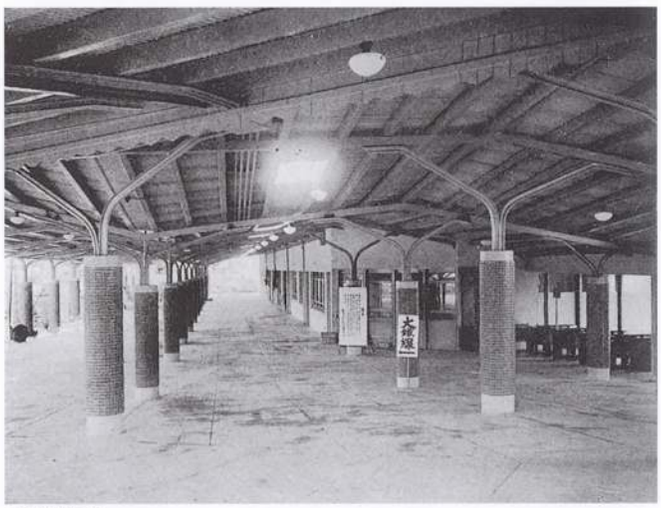
①橿原神宮前駅（現在）
直線的で急勾配の大和棟風の大屋根が特徴的である。神社建築との見方もできる。
正面の列柱は陶管を縦積みにしたものである。



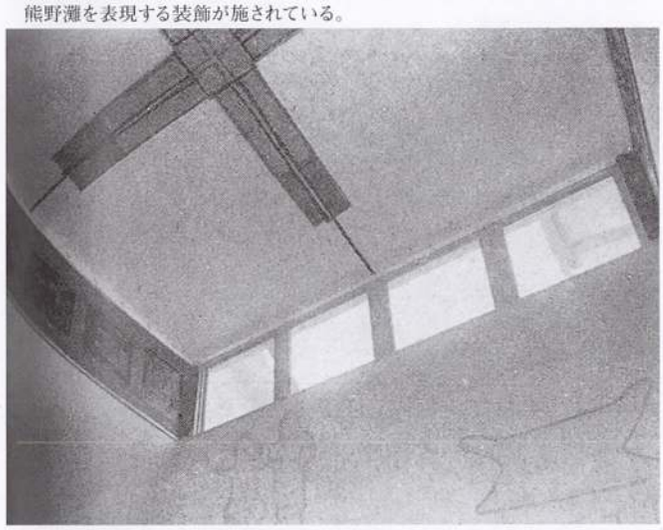
②1階平面図



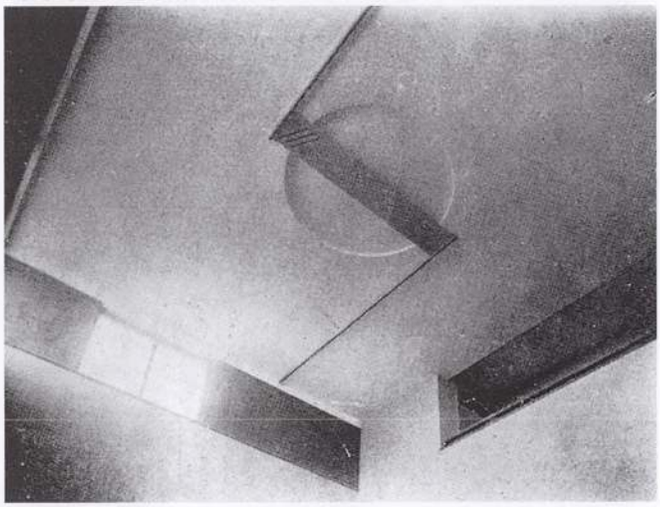
③ホール西側壁
熊野灘を表現する装飾が施されている。



④渡り廊下
大軌（のちの橿原線）と大鉄（のちの南大阪線）をつなぐ

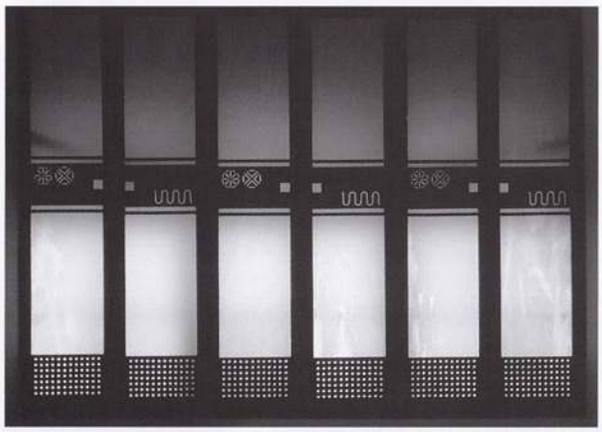


⑤貴賓室の天井
幾何学的な文様と具体性のある装飾が混在する。

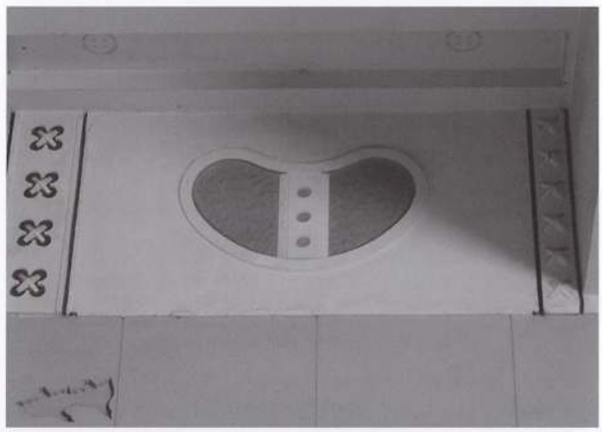


⑥特別待合室天井
幾何学文様がみられる。

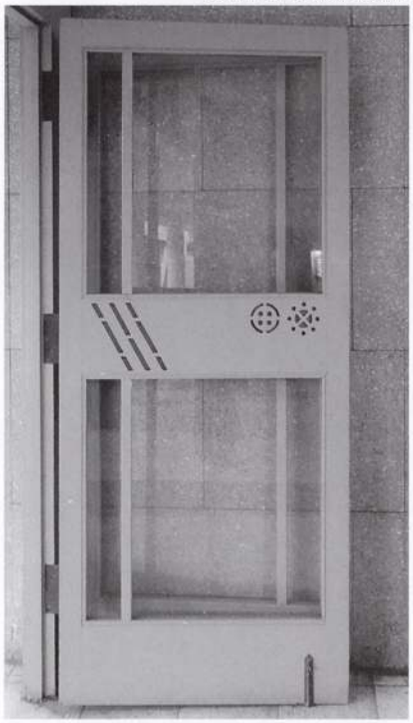
「建築と社会」第22輯10号（昭和14年10月号）より



⑦コンコース天窓（現在）
幾何学的な文様が描かれている。



⑧コンコース梁に描かれた猪の目文様（現在）
木造の梁に漆喰を塗り、鉄骨造風に仕上げている。



⑨出入り口扉（現在）
扉の中央帯に幾何学的なデザインが施されている。

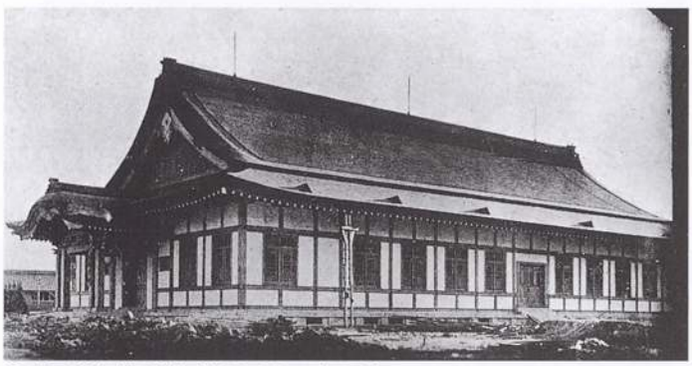


⑩コンコース（現在）
壁面など一部のちに改修されている。

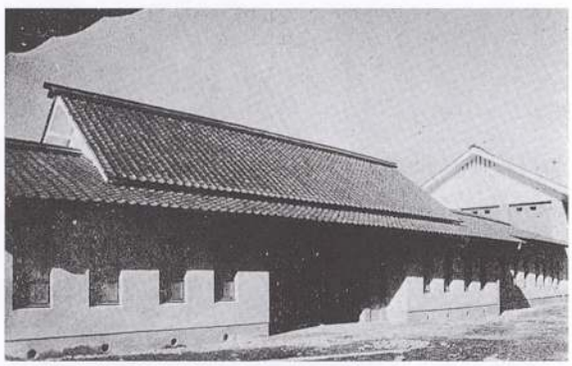
橿原神宮外苑



⑪大和国史館（『建築と社会』昭和15年２月）
左右対称で、大和棟を元にしたデザインである。



⑫建国会館（『建築と社会』昭和15年２月）
昭和御大典の賜饌場の下賜を受けたもの。



⑬八紘寮（『建築と社会』昭和15年２月）
こちらも、大和棟風デザインの屋根がかかる。

■村野藤吾と近鉄グループ

村野藤吾と近鉄グループとは、深いかかわりがある。昭和４年（1929）のあやめ池温泉が最初であろう。村野が渡辺節事務所から独立してまもなくの頃である。その後昭和11年（1936）には、近鉄の前身会社である大阪電気軌道本社を設計している。都ホテルの設計も同年からはじまるが、昭和14年(1939)都ホテル宴会場の設計顧問に片岡安の名が挙がる。片岡は関西建築協会（のちの日本建築協会）の創設メンバーの一人で、初代理事長を務めている。昭和８年（1933）より大阪商工会議所の副会頭（昭和15年から会頭）を務めており、関西財界に大きな影響力を持っていた。村野と近鉄（当時は大軌）との間には、この片岡がかかわっていたのではないかとも推察される。橿原神宮駅はコンペによるものだというが、指名があってのことであろう。その後、昭和25年（1950）近畿映画アポロ劇場、昭和26年（1951）の志摩観光ホテル、昭和37年（1962）の近鉄上本町ターミナルビルへとつながっていく。

■設計者村野藤吾

橿原神宮駅は、村野藤吾の個性が発揮された建築というより、むしろ時代が大きく反映したものという方が良いだろう。実際『建築と社会』の掲載号には、計画が大軌改良課、設計大林組設計部とあり、村野の名はない。また昭和47年（1972）に発行された『現代日本建築家全集第２巻村野藤吾』（三一書房）の「作品年譜」など、初期の頃の作品集には、この作品が掲載されていない。村野は昭和59年（1984）に永眠するが、『現代日本建築家全集』においては、自身が座談会に出席しているくらいであるから、強い思い入れがあったならば、リストから漏れることはないと思われる。

橿原神宮駅が村野の作品として公表されるのは、平成６年（1994）の『村野藤吾の造形意匠』（京都書院）からであろう。和風建築社の吉田龍彦らが、村野事務所に眠っていた当時の資料を探し当てたという。この建物はコンペで勝った村野のデザインであるが、本来村野の意図したことが十分に受け入れられなかったことと想像される。

■大和棟あるいは神社建築からの示唆

橿原神宮駅の外観は大和棟（高塀造、たかへづくり）の民家とも、神社建築に範を求めたものともいわれている。中央に銅板葺の急勾配の大きな屋根があり、両翼には低く緩やかな瓦葺の屋根が接合し、庇がそれを取り巻いている。大屋根は当初天然スレートであった（茅葺との説もあり）といわれているが、のちに瓦葺に改められ、さらに銅板葺になったという。大和棟の民家は、奈良県や大阪府河内地方を中心に三重県西部や京都府南部に分布する民家の形式で、中央部を勾配の強い草葺き切妻屋根とし、その脇を落棟にして下屋部分とともに勾配の緩い瓦葺屋根にしている。ただ大棟の妻壁は高塀と呼び、瓦を葺き、屋根面より高く立ち上げるのが常であるが、ここではそれは採用されていない。また神社建築に範を求めたものとしてみた場合、直線的で矩勾配に近い屋根の姿は、千木や堅魚木こそないものの、切妻造平入りの神明造に近いものと考えられる。

内部は一部変わった部分もあるが、概ね元の姿を伝えているようである。木造であるが鉄骨造風に仕上げている。それは物資が不足していた時代の制約といえよう。一方『建築と社会』の記事では、その仕上げ材料について「日本建築の本来の精神である材料そのものの素地の美しさを発揚することにつとめ」と、仕上げ、すなわち漆喰の「素材」を重視した内容となっている。つまり、モダニズムと日本建築の精神を表現しようとしたところが興味深い。壁面の装飾は神武天皇の東征の故事にちなんだものといわれ、熊野灘や大和三山をモチーフにしたもの。貴賓室や特別待合室には銅鐸や埴輪を図案化したものが使用されている。これら装飾は、抽象的で幾何学的なものと、より具体性を持ったものとが混在し、不思議な印象を与えている。

■日本趣味、日本的なもの、モダニズム

この作品は、当時の建築界の流れにある日本趣味から日本的なものへの展開の一つとして捉えられる。日本趣味とは主として、日本の伝統的な意匠、たとえば寺院にみられる勾配屋根、組物や蟇股など、過去の日本建築の細部を導入して新しい建築を造ろうとするものである。例を挙げるなら昭和12年（1937）の東京帝室博物館（渡辺仁・宮内省内匠寮）、昭和13年の愛知県庁舎（愛知県警察部建築課）などである。この流れは明治時代から大正昭和戦前に続いていく。しかし一方、特に昭和になって、それに対する批判も多くみられるようになってきた。たとえば中国建築とのかかわりにおいて、日本趣味という概念が曖昧であることなど。

とりわけ合理主義を奉ずる建築家にとっては、元来木造建築として完成していた日本建築の細部意匠を鉄筋コンクリートや鉄骨にそのまま応用するのは、いかにも合理性を欠いたものであるとの批判が行われた。しかし彼らにとっても日本の伝統をいかに受け継ぎ、新しい時代に応用させるかということは大きな課題であった。そこで提案されたのは、具体的な形ではなく、その精神である。簡素であること、単純であること、無装飾であること、そして自然との調和などが重視される。これに該当する建築として、神社、民家、茶室などが引き合いに出されている。もちろんモダニズムという理想からいって、具体的な前時代の形を参照するのは筋違いということになろう。しかし日本趣味から日本的なものへの転換は、寺院建築への注目から神社・民家・茶室への転換という側面も生み出したのである。さらに、日本建築は元々合理的であった、という展開をもたらし、モダニズムの時代に一つの流れを造るまでに至った。

■戦前の民家と神社

大和棟の民家は、大正時代からしばしば建築の雑誌などに掲載されていたが、それを応用した建物としては、吉田五十八が昭和11年（1936）に静岡県熱海に造った杵屋別邸がよく知られている。その後、昭和15年（1940）の竹中工務店による山田五十鈴邸など、数多くの、とりわけ住宅作品に採用されているデザインである。いずれも全体のヴォリュームや精神からくるもので、細部意匠へのこだわりはない。昭和14年（1939）にはニューヨーク万国博覧会が開催され、そこの日本館には、屋根に照りを持った寺院風の建築とともに、民家とも神社ともみえる直線的で急勾配の屋根を持ったパビリオンが建設されていた。

昭和14年（1939）という年は、簡素で無装飾な日本的なものが、ある程度定着しつつあった時期とみることができる。紀元2600年の奉祝行事を迎え、橿原神宮駅のデザインはまさにその時代の寵児といえよう。もっともここに適度な装飾は施されている。しかしもしかして、村野はもっと豊饒な意匠を求めていたのかもしれない。あるいは、構造に忠実であることを求めたのかもしれない。ただ、時代は戦争の深みへと向かっていき、それを許容する余裕はほとんどなくなってきたのではないだろうか。

資料
・『建築と社会』昭和14年10月号、昭和15年２月号
・『村野藤吾の造形意匠』１、５、平成６、７年
・川畑博美「建国2600年記念事業・橿原神宮駅」『村野藤吾建築設計図展カタログ』６、平成16年
・川島智生「橿原神宮駅舎」『村野藤吾建築案内』平成21年
・『橿原市史本編』上巻、下巻、昭和62年

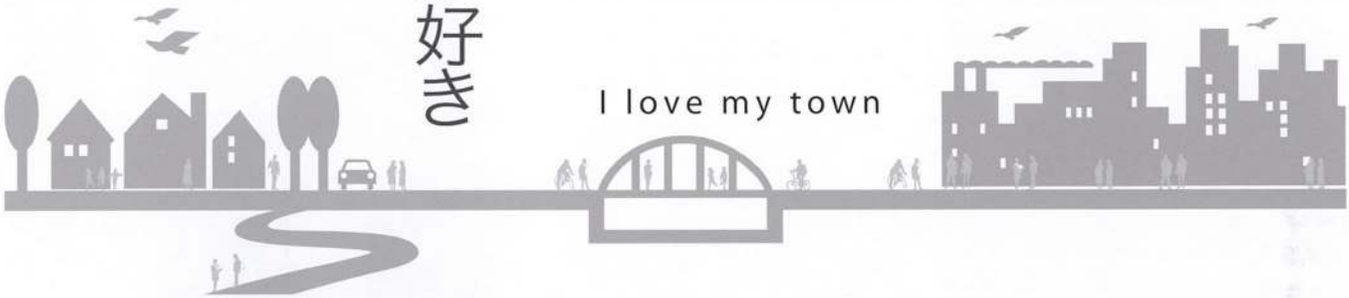
（きりさこ　くにお／京都建築専門学校教員）

このまちが好き

まちづくり活動に
取り組む人々。

11

NPO 高齢者外出介助の会
永井佳子（ながい よしこ）

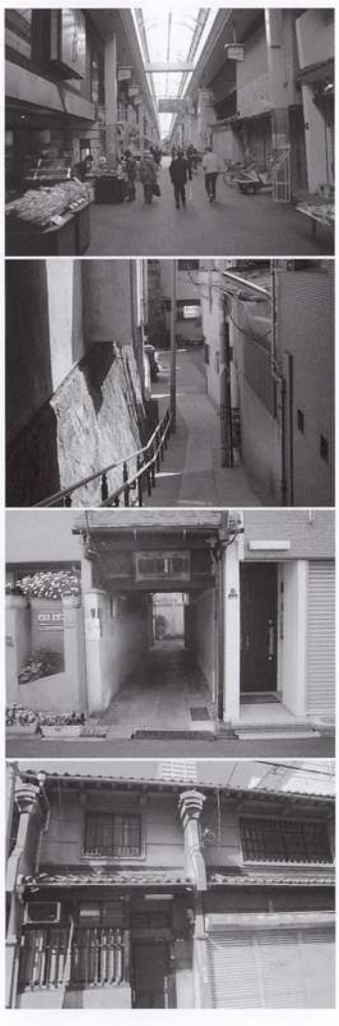


わがまち自慢―空堀―

空堀一帯は私の育った町です。戦時中、大阪の中心地の大部分は激しい空襲に遭いましたが、空堀は奇跡的に戦災を免れ古い町並みを残しています。空堀（大坂城の外堀があったことからの命名）には文字通りあちらこちらにお堀の石垣が残っています。また、石畳やレンガの階段がひっそり路地の奥にあり、路地の入口には冠木門（かぶきもん）などもあります。立派な造りのうだつの上がった古民家も見られます。

ちょっと裏道に入ると、手工業時代の名残の小さな町工場が残址を留め、香水製造の古看板が残っていたりします。谷町筋界隈には、金属線やネジ屋、機械屋、焼印の製造、箱作りの工場などが今も操業しておられます。他にも、日本で数軒しか残っていない、帽子の型を作っている職人さんや夏の着物の背伏せ（上質の和服の薄物に用いる、背縫い代を包んで始末する絹の薄布）を最近まで作って卸していたというお年寄りもいるなど、“絶滅寸前”の職種も見られます。

商店街をさっさと歩くだけだと、谷町筋から松屋町筋までわずか数分で終わってしまいます。それではあまりにも残念。もし、この地域をよく知る案内人がいればもっと楽しんでもらえるだろうと思い、「空堀ガイドボランティア養成講座」を始めました。



先日、商店街を歩いていると、数人の人たちが探し物をしていました。商店の前なのに、当の店主が通行人を制止し、若い女性が落としたコンタクトレンズを探すのに協力しています。それを聞きつけた人が探し物に加わり、人数が徐々に増えていきました。しかし、とうとう見つからず、その女性は丁寧にお礼を述べて去っていかれました。大阪という大都会の真ん中で、空堀にはまだ下町らしい人情が生きていると感じられる光景でした。

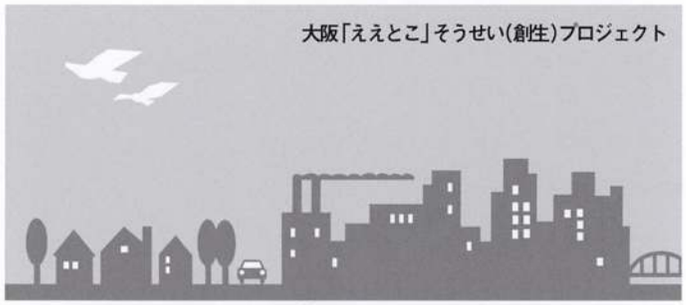
しかし、町も人も歳を取り、古い街並みが取り崩され、井戸や石畳が消えてピカピカの現代的な高層マンションが建っていきます。子供のときには当たり前の風景でしかありませんでしたが、改めてこの町を眺めて見ると、そのまま残って欲しい、守っていきたい…と切実に思う風景・風情があちこちに残っています。

ヨーロッパなどには何百年来そのままの形で保存されている街並みがよくありますが、空堀にも築百年近い町屋などが残っています。

一度、この街を訪ねてみてください。空が広くて懐かしく、ほっとする“ゆるい空間”が広がっているはずです。「本当にエエ街やな」と感じていただけるはずです。

余談ですが、先日商店街の路地を入ったお好み焼きや「ことみ」で、市原隼人さん主演のボクシング映画『ボックス！』のロケが行われていました。ひょっとしたら商店街の店先でもありましたから知っている方が映っているかもしれません。とても楽しみです。

後述となりましたが、私が代表する「高齢者外出介助の会」は1994年より活動を開始し、空堀商店街に拠点を置いて10年が経ちます。みなさんのホッとできる場所になればと、数年前よりサロンを開いています。毎月１回お食事会も始めました。お年寄りが住み慣れた自分のまちで安心してずっと暮らせるようにこれからも環境づくりをしていきたいと思っています。



2010 第2回 OSAKA

続 大阪「かくれたええとこ」再発見コンクール

社団法人日本建築協会は、2017年に創立100周年を迎えます。その記念事業のひとつとして「大阪ええとこそうせいプロジェクト」を企画しました。このプロジェクトは、普段見過ごされそうなまちの資源を発掘し"こうしたらもっとよくなる""もっといきいきする"等のアイデアを2017年まで様々なテーマで募集することにより、まちづくりや町おこし、賑わい作りに役立てていくことを目的とします。

今回の大阪「かくれたええとこ」再発見コンクールはその**第2弾**です。

審査講評

審査委員長 **橋爪紳也**

（大阪府立大学教授・大阪府立大学観光産業戦略研究所長・建築史家）

ふだんは見過ごされがちなわが街の資源、すなわち「かくれたええとこ」を再評価することから、まちづくりが始まります。
「もっと知ってほしい」「もっとよくしたい」と思う大阪市内の場所や風景を募集した結果、202点もの作品が寄せられました。応募いただいたすべての方に感謝いたします。

昨年に引き続き、審査を担当させていただきました。写真とともに「題名」や「選んだ理由」などから、着眼点の面白さや、今後まちづくりを展開するうえでの可能性を考慮して、総合的かつ公正に審査を致しました。先の理由により、入選作と同じ場所を選定されていても、選に漏れた場合があったことを付記しておきます。
結果、最優秀とするほどに抜きん出た作品はないと判断しました。その代わりに、想定よりも多く、9点を入選作品とすることにいたしました。

今回は、町家や街並など、近世・近代・現代、そして今日にいたる時間や生業の蓄積を、身近な風景に見いだす作品が多く寄せられました。また昨年実施された「水都大阪2009」の影響もあったのでしょうか、応募作品にも入選作品にも、中之島や道頓堀など、大阪の都心にあるリバーフロントに着目した作品が目についた点が印象的です。なかでも、かつての河川敷や川の痕跡に着目した作品が面白いと感じました。

今回の入選作品にも、新たな土地利用が期待される公的な未利用地や、歴史を活かした再整備が待たれる地域など、大阪の将来に資する潜在力を持った場所があります。主催者である社団法人日本建築協会には、今後、再発見された「かくれたええとこ」が持つ魅力を活かすべく、提案を重ねてゆかれることを期待します。

■応募総数　202点
■審 査 日　2010年3月12日（金）
■表 彰 式　2010年3月24日（水）

入選作品は㈳日本建築協会HP（http://www.aaj.or.jp）に掲載。
また大阪住まい情報センター4階住情プラザにて4月26日（月）～5月31日（月）まで展示。

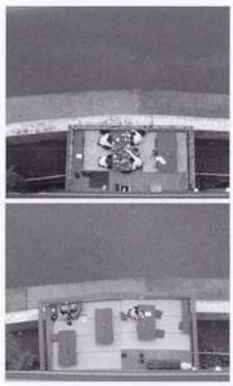
入選



水都大阪の誇り
和田（わだ） 康由（やすよし）

所　在　地：大阪市福島区野田2丁目～大阪市西区川口2丁目
［選んだ理由］安治川沿いの川口には、居留地跡に住友倉庫が昭和4年に、その対岸に大阪中央市場が昭和6年に、木津川に架けられた昭和橋が昭和7年に造られ今も現存する。かつて川口は近代大阪、水都大阪の陸海運の拠点であった。

入選



北浜テラス 「実現」から「継続」へ
福田（ふくだ） 知弘（ともひろ）

所　在　地：大阪市中央区北浜1-1-12　北浜テラス
［選んだ理由］建物所有者・テナント・行政・NPOの挑戦的な連携により、「実現」した北浜テラス。2008年10月に1ヵ月限定で開かれた床は「仮設」仕様（写真上）。そして、2009年には「常設」が認められ床も、「常設」仕様に（写真下）。水都大阪の連携・継続・形象のシンボルとして期待したい。写真はY'sビア5F　KITA LI CITEより。

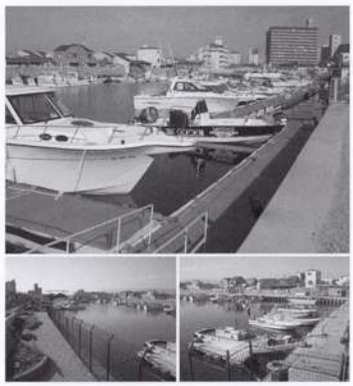
入選



残った町名「菅原町」
大田（おおた） 好子（よしこ）

所　在　地：大阪市北区菅原町　菅原町界隈
［選んだ理由］菅原道真公の名前を貰ったと伝え聞くこの町は、高速道路と近代ビルに席巻されながらも、隆盛を極めた頃の乾物問屋の建物と仕入れ格納蔵が点在して「船場」気風を感じる昔と、近代が旨く融合した懐かしい空間です。町名の思い入れが石畳を残し、歩いてみるとその時代をも体感させてくれます。

入選



川跡のマリーナ漁港
二本松（にほんまつ）　武典（たけのり）

所　在　地：大阪市此花区伝法5丁目　伝法川跡
［選んだ理由］淀川から少し入ったところに、漁船とプレジャーボートが並んでいます。
周辺の旧集落の中から突然現れる景色に足が止まります。
かつての水運拠点だった頃の雰囲気が、形を変えて現在まで受け継がれているように感じます。

入選



半開きの水門
円満字（えんまんじ）　洋介（ようすけ）

所　在　地：大阪市西区南堀江1-6
［選んだ理由］埋められたはずの西横堀になぜか水門だけが残っているのが不思議です。
しかも半開きなのが謎めいている。ひょっとしてまだ動くのでしょうか。

入選



上町台地、宝泉寺と六軒長屋間の路地
山本（やまもと）　龍造（りゅうぞう）

所　在　地：大阪市中央区龍造寺町7-17～19番地　六軒長屋と宝泉寺の間
［選んだ理由］中央区にありながら、都心の喧騒も聞こえてこない宝泉寺と六軒長屋の間にある路地。映画『夫婦善哉』のいちシーンに登場する光景が、今も残る。戦禍に巻き込まれず、地上げにもあわずに一世紀近くほぼ変わらない風情を残しているものと思われる貴重な空間。

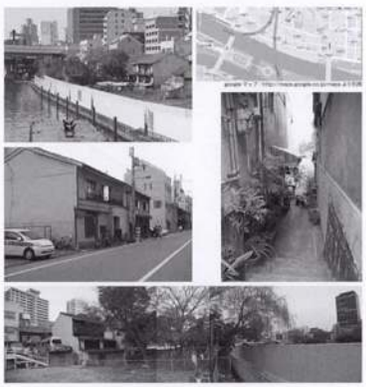
入選



平成の門
中原（なかはら）　文雄（ふみお）

所　在　地：大阪市中央区安堂寺町2丁目　文目堂（あやめどう）
［選んだ理由］時代を反映しながら深化するファサード。用途変化をアピールしながら昭和初期の住宅が「どっこい生きている」

入選



多重的河原風景
川口（かわぐち）　将武（まさたけ）

所　在　地：大阪市北区菅原町　うなぎいし田　他
［選んだ理由］町家が点々と建ちならぶ町並みに、突然表れた小階段。かつての護岸らしき石積みの奥には、うなぎ屋さんのちょうちん。なぜ通りに入口が面していないのであろうか？　更にその奥の明るい場所は、屋根の高さにせまるまで大きく育った樹々のある現代のコンクリート護岸によって囲まれたお庭のような空間。橋上から眺める都市風景としては、現代的河川景観、川辺の緑の風景、さらに町家のある生活景と全く、異なる顔をもつ様々な風景が重なって見える。

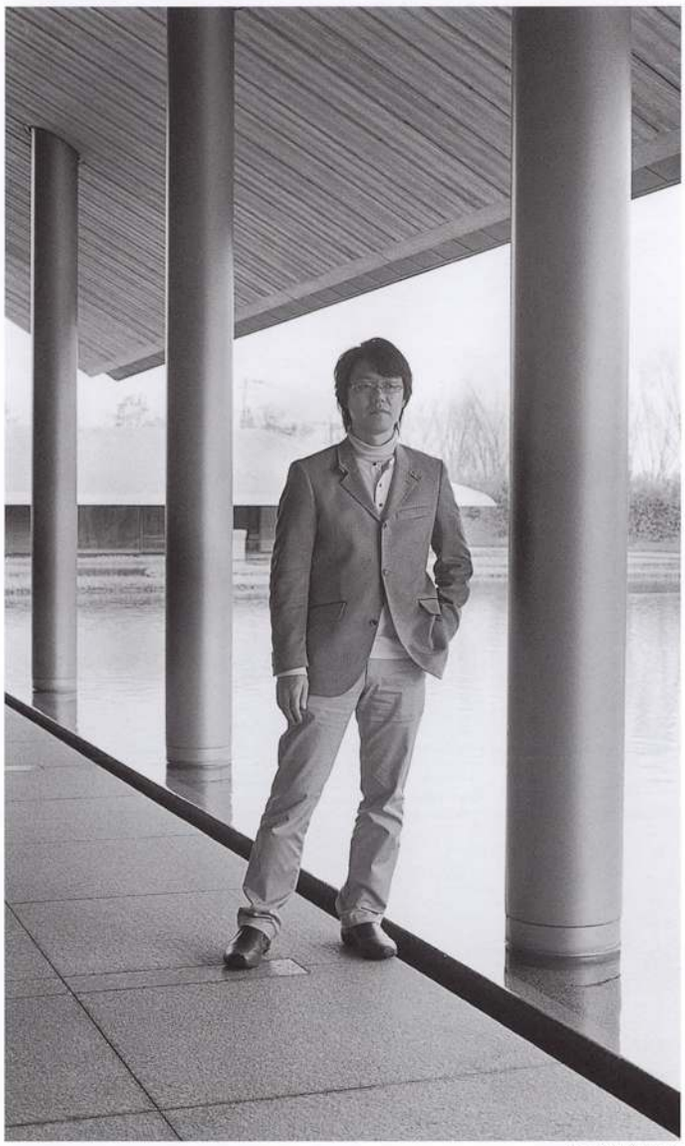
入選



阿倍野ベルト地帯 細なが～い「線路と高架下と空き地」
加藤（かとう）　祐策（ゆうさく）

所　在　地：大阪市阿倍野区美章園、文の里　JR阪和線高架界隈
［選んだ理由］阿倍野区と東住吉区との境、美章園駅近くにあるJR阪和線沿いの細長い空き地です。高速道路計画のために更地となったものの、その計画自体は頓挫してしまった運命を背負ってます。高架の下には店舗や住居や倉庫が挿入されており、土木と建築との面白いコラボの様相を呈してますが、それだけではなく、目の前のダダッ広い空き地との関係が、他にはない不思議な風景を生み出しています。ごちゃごちゃした下町に突如あらわれるこのベルト地帯は、政治の失策がもたらした空き地ですが、そのポテンシャルは高く、未来の下町生活にいろんな提案ができそうです。

吉野 弘恵　—YOSHINO HIROYASU—



佐川美術館にて

学歴
1988年　大阪芸術大学卒業

経歴
1990年　TLヤマギワ研究所照明計画室
1997年　ヤマギワ計画デザインセンターチーフデザイナー
2002年　アカリ・アンド・デザイン設立

主なプロジェクト
1998年　佐川美術館（照明学会優秀施設賞）
2002年　中之島三井ビルディング（照明学会優秀施設賞）
2004年　世界救世教平安郷（照明学会優秀施設賞）
2005年　奈良県立図書情報館（照明学会優秀施設賞）
2007年　佐川美術館 樂吉左衛門館
（照明学会優秀施設賞、北米照明学会国際照明賞Award of Merit）
2008年　神戸薬科大学　薬学臨床教育センター11号館（照明学会優秀施設賞）

聞き手　影林督諭（安井建築設計事務所）
写真撮影 河合止揚

「照明＝天井に付く」既成概念を変えたい

見渡す限り、ほとんど天井に照明器具はない。案内していただいたいくつかの建築作品において、みごとに人工照明は付いていない。天井、床、壁、すべてに効果的な最低限の光を間接的に照らしているのみである。2002年にアカリ・アンド・デザインを設立し、数多くの印象的な建築的照明をデザインする吉野弘恵氏に話を聞いた。

大阪芸術大学・環境デザイン学科では都市計画、特に造園計画をメインに学んだ。卒業後、IT系の会社に就職するもプロダクトのデザインを学びたい熱意は冷めず、デザイナーになりたくて次にTLヤマギワ研究所に就職。家具デザインがしたかったが照明デザインなら可能であると配属したのがTL（テクニカルライティング）部門であった。華やかなLD（ライティングデザイン）部門を横目に図面上にダウンライトの○印を描く日が続いた。1年ぐらいを経て、ダウンライト計画の良さが分かり面白さに目覚めるも横浜に転勤、移動となる。そこでダウンライトのデザイナーを求められ、3年間、テクニカル商品器具の開発に携わることとなる。スポットライトやダウンライトの反射板のディテールやデザインを研究し、徹底的に光の考え方を基礎から学んだ。初めはいやだったと語るが、その経験が後の進む道を切り開いていく。大阪に戻ってきたら、LD部門が無くなっていたが、その経験と知識を買われ、設計事務所を担当するデザインセンターのチーフデザイナーとなる。

「入社した時から建築家との付き合いが多かった。それはとてもラッキーなこと」と語る。大きな影響を受けた建築家、坂本昭氏との出会いで照明に対する考え方を一新させられる。「図面を見た時に、空間があまりにも彫刻的で照明ラインを引けなかった。照明を配置するところが全くない。それは自分にとって鮮烈だった」と語る。それからは「照明って建物に逆らったらダメ」だと感じ、建築空間にある象徴的な空間の質・流れを捉え、「逆らわずに置くこと」に徹底した手法を見出す。「潔い照明計画」を追及し、光源は見せずに「一番短く、最小な照明ライン」にこだわる。その結果、初めての依頼者はその潔さに「こういう切り口もあるんだね。でも本当にこれだけで足りるの？」と不安がるそうだ。「照明は暗くてもよい」と坂本さんに言われた。「その暗さが良いのだ」と。確かに現代は明るすぎる。ここ100年の間に急速に発展した照明のせいで夜中まで真っ白い光を浴び、人間のリズムは明らかに崩れ、感覚機能に無理がきていると。低照度で色温度の低い「休息の光」を取り戻す必要があるという。

吉野氏の最新の技法がふんだんに取り入れられた作品、佐川美術館樂吉左衛門館は訪れる者すべてにとてつもない「暗さ」を与える。人工的な光の気配が可能な限り消されている。茶室、展示空間、アプローチ空間すべてに徹底して空間を象徴する光を創り出している。暗いからこそ見えてくるものがあると語る。ここは現代の明るさに対する考え方をもう一度原点回帰させる場所であるかもしれないと。

「照明計画は目に見えない。光は物に当たって初めて見えるもの。机上の検討だけではやはりわからない世界。」だからどれだけ良い「光の質」を提案しても、それを受け入れる側の目もそれなりに肥えていないとわかってもらえないと言う。「これからは啓蒙的に裾野を広げていきたい」と夢を語るその眼差しには、新たな質を持つ光の可能性を確実に捉えているのを感じた。

光の質を追究したLED照明の最先端

High Quality LED Lighting X-series



yamagiwa

ヤマギワ株式会 http://www.yamagiwa.co.jp

東京営業部　〒101-0021　東京都千代田区外神田1-5-10　TEL.03-3253-5143 FAX.03-3253-5205

近畿営業部　〒542-0081　大阪市中央区南船場2-9-8 シマノ・住友ビル3階　TEL.06-6258-6721 FAX.06-6258-6725

owell

FINE RELATIONS FOR NEXT

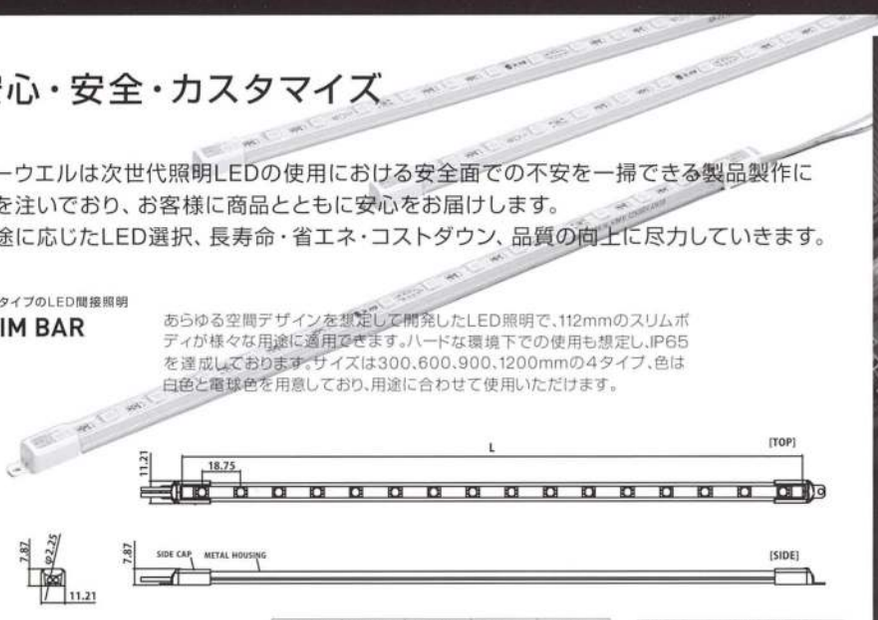
安心・安全・カスタマイズ

オーウエルは次世代照明LEDの使用における安全面での不安を一掃できる製品製作に力を注いでおり、お客様に商品とともに安心をお届けします。
用途に応じたLED選択、長寿命・省エネ・コストダウン、品質の向上に尽力していきます。

BARタイプのLED間接照明

SLIM BAR

あらゆる空間デザインを想定して開発したLED照明で、112mmのスリムボディが様々な用途に適用できます。ハードな環境下での使用も想定し、IP65を達成しております。サイズは300、600、900、1200mmの4タイプ、色は白色と電球色を用意しており、用途に合わせて使用いただけます。



長さ (L)	300mm	600mm	900mm	1200mm
消費電力	2.9W	5.8W	8.6W	11.5W

色温度	2800K/ 5500K
IPレベル	IP65



JR 尼崎駅北ビル
設計施工：㈱竹中工務店
照明計画：アカリ・アンド・デザイン
SLIM BAR 1200WW

お問い合わせは

大阪本社　LED 販売 2ｸﾞﾙｰﾌﾟ
大阪市西淀川区御幣島 5-13-9
TEL:06-6473-1034
http://www.led-owell.jp

東京店　LED 販売 1ｸﾞﾙｰﾌﾟ
東京都品川区北品川 3-6-7
TEL:03-6812-8605

日本建築学会近畿支部
環境保全部会

7

公開研究会REPORT

電線類地中化 できる理由 できない理由 ―電柱大国からの脱皮



●講師からのメッセージ

①毎日300本ずつ増加している電柱や電線は、単に景観上の問題だけでなく、災害時の安全性やメンテナンスの容易さ、インフラとしての信頼性などの視点からも問題がある。

②電線類の地中化はほとんど進んでおらず、その原因は多岐にわたる。行政や市民、企業の認識、景観まちづくりの仕組み、制度、税制、技術など総合的な変革が求められる。

③地中化への投資は、地域経済への好影響と同時に、観光立国や創造都市づくりに対応しつつ、文化、経済の両面で地域力、国力をつける方向に向かうことにつながる。

■日本建築学会近畿支部環境保全部会

主査：三好庸隆（武庫川女子大学教授）

幹事：伊丹康二（大阪大学大学院助教）

上山　卓（株式会社コープラン）

北尾靖雅（京都女子大学准教授）

高岡伸一（大阪市立大学都市研究プラザ特任講師）

八木康夫（関西学院大学教授）

日本建築学会近畿支部環境保全部会では、平成20年度から、「なぜ日本の住環境は美しくならないのか」という問題意識のもと、重要と考えられるテーマを取り上げ、そのテーマについて先端的な取り組み、研究をされている講師をお迎えし、公開研究会を行っています。

●第8回公開研究会

第8回となる公開研究会は、「電線類地中化できる理由 できない理由―電柱大国からの脱皮」について、立命館大学教授の高田昇氏を講師に迎えて開催しました。（開催日：2009年11月25日、会場：大阪市立大学　文化交流センター・大セミナー室）

なお、本公開研究会は、（社）日本建築協会の後援を得ています。

高田先生は景観まちづくりをライフワークとし、なかでも電線類地中化なくして景観問題の解決はないとの考えから、電線類地中化を推進するNPO法人を立ち上げるなど実践的に取り組んでいます。電線類地中化の推進のためのこれまでの成果や克服しなければならない課題などについて、ご講演をいただきました。

●講演

この3ヵ月間に、3自治体から同じ相談があった。すべてに共通するストーリーがある。行政は電線類地中化に対して情報や知識を持ち合わせていない。コンサルタントに依頼するが、コンサルタントも十分な知識を持ち合わせていない。そこで専門家に相談するが、同様の壁に当たる。そこで電力会社に相談に行くと、「難しいからやめておきなさい」と言われる。

一部の行政は果敢に地域の中に入っていくが、電柱が家の前にある住民は賛成しても、地域全体の住民合意の問題が立ちはだかる。電線類地中化を進めたとしても変圧器は地上に置かなければならず、その位置について課題が残る。また、工事は1年以上かかることがあり、商店などでは営業補償の問題も出てくる。このようにして、既成市街地でも電線の地中化が進まない。

では、新しい住宅地を開発する場合はどうか。ハウスメーカーの住宅地開発では、景観上の付加価値として電線を地中化することがある。しかし、地中化した電線を電力会社は引き取らず、自治体か自治会などの地域のいずれかになり、最終的には自治体の管理になることが多い。自治体はその負担を考え、腰が引けてしまう。

このように、既成市街地においても新しい住宅地開発でも、同じストーリーで電線類地中化は進まないというのが現状である。

1．諸外国と日本の比較

ロンドンでは、1800年代から電線の地中化が進み、以後、新しく電柱を設置することはない。当時、防犯対策で街灯をつける際、電力会社とガス会社の争いがあり、ガス管も電線も地中化するという流れができた。ニューヨークでは、それより半世紀ほど遅れる。エジソンの発明を機に電線が急増したが、感電死者が増加、都市問題になり、電線の地中化が進んだ。日本では、江戸時代の後期から明治時代にかけて工業化が進み、電線が急増した。また、被覆線の技術が進み、安全性が高まった。第2次世界大戦後の復興で求められたのは、より安定した電力を早く安く供給することであったため、電線類の地中化は進まなかった。

日本では、電力などのインフラはいまだに中央集権である。国の方針に基づき電力会社が事業展開をする。この点も海外とは異なる点である。地方分権がインフラ供給にもおよばない限り、地中化は進まないと考えている。デベロッパーにも責任があるし、電柱や電線に対して無関心だった住民の感性や認識も問題である。

2．日本の現状

2-1　日本における制度の変化

1928年、芦屋市の六麓荘で日本初の電線類地中化による開発が行われた。土地分譲要綱に電線地中化の意義が述べられており、住民組織が管理する仕組みである。それから約60年が経過した1986年、国が整備に乗り出した。4車線以上の幹線道路沿いの電線地中化に対して1/2を補助する制度であるが、22年間で6200kmが事業化、道路総延長の0.5%にすぎない。2004年以降、景観法やまちづくり三法などで認定され、補助される制度もできた。

2-2　日本における先進事例

電線類を地中下するときには、コンセプトが

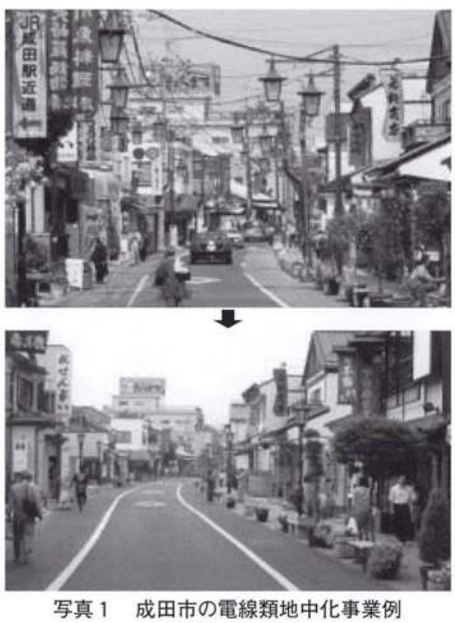


写真1　成田市の電線類地中化事業例
成田市のHP，2010.3.15accessより

明確でなければならない。成田市では、国際都市として恥ずかしいのではないかという議論から地中化が進んだ（**写真1**）。

また、ほとんどの住民にとって電柱や電線は風景のひとつになっており、それらがなくなる姿がイメージできない。そこで、岐阜市や湯布院町では電線類地中化の景観シミュレーションを行っている。湯布院町では、観光地としての成功をおさめた結果、観光客が急増し、観光客の質もサービスの質も低下した。そこで今は観光客をいかに減らすかを検討している。観光客の数を減らし単価を増やすひとつの方法として、景観づくりに力を入れようとしており、電線類地中化も進んでいる。

2－3　「電柱大国・日本」の現状

他の先進国がほぼ電線類の地中化を行っているなか、日本ではほとんど進んでいない。日本の総電柱数は3300万本（電力会社と電話会社の電柱数）である。さらに、電柱は1日あたり300本増えており、増加の一途をたどっている。また、国の無電柱化政策は幹線道路のみであり、伝建地区でさえ未着手のところも多い。これは、行政の縦割りが問題だと考えている。電力会社は「狭い道では地中化できない」というが、奈良市の今井町では3m程度の道幅でも地中化されている。

3．電線類地中化の推進

3－1　電線類地中化の意義

電線類地中化の意義を**表1**に示す。例えば、通行幅員の確保、信号等の視認性向上などが期待できる。電柱が道路にはみ出すことにより、実質1200mm減であることも少なくない。災害時には、電柱の倒壊が緊急車両の通行を妨げたり、住宅を破壊したりすることを防止できる。阪神・淡路大震災のときには、地上の電線の方が復旧まで2倍以上の時間を要した。電気に依存した生活を考えれば、地中化すべきであるという指摘もある。資産価値という視点でいえば、電線類地中化が資産価値に影響するかどうかを調べたところ、平均0.7％の資産向上が見られた。

表1　電線類地中化の意義

（1）安全で快適な交通空間の確保
（2）都市景観の向上
（3）都市災害の防止
（4）電線の耐久性、保安性の向上
（5）情報通信ネットワークの安全、信頼性の向上
（6）伝統文化、生活環境の継承
（7）地域としての資産価値の向上
（8）公共投資の内需拡大への寄与、経済効果

3－2　電線類地中化推進の阻害要因

電線類地中化推進の阻害要因を**表2**に示す。最大の要因は、住民の意識だと考えている。電線などが生活景になってしまい、肯定する人もいる。鳥が休む場所がなくなるという意見さえある。あるインターネットによる調査では、8割の人が、電柱がある風景も悪くないと回答している。また、地中化のコストに対する誤解も大きい。湯布院町の住民は、電力会社に1kmあたり7億円かかると言われ、地中化をあきらめたという。多様な技術が考えられるはずである。コストに影響する要因として、掘削の深さと管の太さが挙げられる。狭い道路の場合、幹線道路の場合と比べ、1/2、1/3のコストになる。また、電力会社の社員も、電柱の方が維持管理がしやすく、災害時に復旧が早いという誤解を持っている。すでに確立した技術を前提にすれば技術修得のコストなどもありえるが、長期的に考えれば地中化した方が安くなる。

表2　電線類地中化推進の阻害要因

（1）電線等に対する住民の意識の低さ
（2）コストや安全性などに対する誤解
（3）技術の偏重や技術者不足
（4）工事やメンテナンスのコスト高（工夫不足）
（5）国の政策として規制や誘導への依存
（6）景観行政に電線類地中化の視点の欠如

自治体の景観行政の視点に、電線類地中化の視点がないことも問題である。その中で、奈良市だけは電線類地中化をマニュフェストに書いている。

3－3　電線類地中化の進め方

電線類地中化だけを目的にすることには意味がない。景観まちづくりの中に位置づけられる必要がある。また、コストの低減やスピードの向上に技術力を費やす必要があるのではないか。そのためにも、関係する組織が協議する場が必要であると考える。今後の行動計画について**表3**に示す。

表3　電線類地中化の行動計画案

（1）顕彰制度などによる意識づくり
（2）コストや技術の情報発信
（3）各種制度や税制による補助制度
（4）管理自治体への支援制度
（5）低コストなどに向けた技術開発、人材育成
（6）新規事業者への義務付け

● 質疑応答

Q1．景観審議会などの議論でも、緑を増やすなどの議論が大半を占めており、電線類地中化の議論はない。

――議論されないのは「わからない」からである。そこで、各地で勉強会をしようと呼びかけている。2,3時間学習するだけで意識が変わると思う。行政の計画に電線類地中化を書くか否かは、その後に判断したらいい。

Q2．住民の組織や活動がしっかりしているところはやりやすいかもしれないが、町に対する意識や愛着の低下が激しいところでは、どうしたらいいか。



――地中化について言えば、二つの流れがある。ひとつは、成田市のように自治体主導で町の顔をつくろうとする動き。ひとつは、住民主体の動き。地域に目を向けようとする動きはどこにでもあるのではないか。きっかけや情報がないことが問題ではないか。大阪府のように、住民からの応募に対して審査するような仕組みもいいと考えている。

Q3．電柱がなくなったら電灯がなくなってしまうのではないか。

――電柱と電灯は分離していることのほうが多い。

Q4．景観上の問題も大きいが、地震時の安全性やバリアフリーなど福祉の視点と交ぜたほうがいいのではないか。

――大事な視点であると考えられる。ぜひそのように考えていきたい。

Q5．大阪府では道路事業で地中化を進めようとしたが、無電柱化は過剰と思われがちであった。電力会社が努力したほうがいいのではないか。伝建地区などでは、住民は住宅の維持管理で手いっぱいであり、電線類を地中化して維持管理するのは大変ではないか。

――自治体と住民が意思を持って、精いっぱい取り組み、その残り部分を電力会社にお願いするというスタンスでないといけないと考えている。電力会社は株式会社であるため、株主への説明責任がある。そこに投資していく十分な理由がないといけない。よって、その他の道としては、法律ということになるかもしれない。

Q6．今、住んでいる地域での集会で、地域を美しくしようという話がようやく出始めている。地域を説得するためには定量的なデータがほしい。

――資産価値向上のデータは補助的なデータであると考え、過剰に期待しないほうがいい。

（文責：伊丹康二／大阪大学大学院助教）

お知らせ information

▶平成22年度「建築設備診断技術者」資格取得講習案内 —ビルディングドクター〈建築設備〉—

開催日　2010年7月7日(水)～7月9日(金)
時　間　1日目10：00～18：00、2日目9：00～18：00、3日目9：00～17：00
場　所　大阪府私学教育文化会館5階講堂
大阪市都島区網島町6-20
定　員　150名
申込み　2010年4月1日～5月21日（金）
受講料　50,400円（消費税、テキスト含む）
問合せ　社団法人建築・設備維持保全推進協会（土・日・祝除く9：30～17：30）
〒100-0004　東京都千代田区大手町1-6-1大手町ビル764
TEL.03-5252-3873
E-nail：belca@belca.or.jp

▶平城遷都1300年記念 大遣唐使展

遣唐使が派遣された630年以降、894年に停止されるまで山上憶良、阿倍仲麻呂、吉備真備、最澄、空海ら数千人の人々が海を渡り、大陸から知識、情報、文物をもたらした。この間に展開された日中交流の様相と、大陸文化を吸収し成長を遂げた日本の軌跡をたどる展覧会。会場では、国宝・重要文化財がズラリと展示される。



国宝
聖観音菩薩立像
奈良・薬師寺蔵
飛鳥～奈良時代
（7～8世紀）

会　期　6月20日(日)まで
9：30～17：00
（4/30から金曜日は19時まで）
月曜日休館（ただし5/3は開館）
会　場　奈良国立博物館
奈良市登大路町50
料　金　一般1,400円、大高生1,000円、中小生500円
構　成　・波濤を越えた日中交流
・国際都市長安と唐代宮廷文化
・ドキュメント遣唐使—7世紀
・ドキュメント遣唐使—8世紀
・正倉院の時代　・外交の舞台
・ドキュメント遣唐使—9世紀
展　示　観音菩薩立像、聖観音菩薩立像、菩薩半跏像、空海が持ち帰った金銅錫杖頭と金銅密教法具、吉備大臣入唐絵巻、伝教大師将来目録など

招待券は日本建築協会(TEL.06-6946-6981)へ。

▶「レゾナンス　共鳴」 —人と響き合うアート



ジャネット・ガーディフ
《40声のモテット》
2001年
Photo:Markus Tretter

本格的現代アート展第2弾。レゾナンス「共鳴」をテーマに、「生と死」「喜び」「悲しみ」「愛」「憎しみ」「笑い」などを様々な手法で浮かび上がらせる多彩な作品約120点を展示する。

会　期　2010年4月3日～6月20日(日)
10：30～19：30
月曜日休館（但し、5/3は開館）
会　場　サントリーミュージアム[天保山]
大阪市港区海岸通1-5-10
料　金　1,000円、大高生・60歳以上700円
中小生は無料
展　示　絵画・写真・映像・立体・インスタレーションなど

招待券は日本建築協会(TEL.06-6946-6981)へ。

▶大阪歴史博物館特別展「昭和のおもちゃとマンガの世界—北原照久 大コレクション展—」

ブリキ玩具コレクターとして世界的に有名な北原氏は、ブリキ玩具のみならず、セルロイド製玩具やマンガ雑誌とその付録、マッチラベル、引札、ポスター、広告看板など庶民生活・子ども文化関係資料を40年かけて収集してきた。
今回の展示では、北原コレクションの中から昭和時代に製造・消費された代表的な資料約1000点を展示する。

会　期　2010年4月18日(日)～6月21日(月)
9：30～17：00(金曜日は20時まで)
火曜日休館（5/4は開館、5/6が休館）
会　場　大阪歴史博物館　6階　特別展示室
大阪市中央区大手前4-1-32
料　金　600円、大高生400円
中学生以下、大阪市内在住の65歳以上は無料[要証明]



スモーキングロボット
ヨネザワ製　1950年代
ブリキロボットの傑作の一つ。バッテリーで動き、スイッチを入れるとまず前進、数歩歩いたあとに止まって、目と頭が光り、口から煙を出すという複雑な動きをする。

展　示　鉄腕アトムとウラン（ノムラ製1060年代）、鉄人28号（ノムラ製1950年代）、ダイハツミゼット（光球商会製　1950年代）ほか

招待券は日本建築協会（TEL.06-6946-6981）へ。

▶館蔵品展―様々な版画―

木版画に代表される凸版画は、でっぱった面にインクをつけて刷るもの。

エッチングの凹版画は、溝にインクを入れてそれを押し出して刷るもの、

リトグラフは、平面に色を付けて飯を作って刷るもの。

本展では、本館所蔵のこれらを中心に1970年代以降の作品を紹介する。

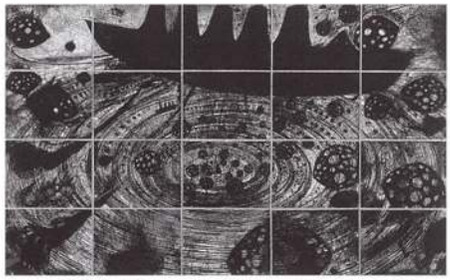
主な作品：山口啓介「Calder Hall Ship ― ENOLA GAY」1994年（エッチング・紙）、黒崎彰「乾いた夢」1976年（木版・紙）、中辻悦子「連鎖Ⅰ」1984年（リトグラフ・紙）、藤本由紀夫「DISK（18点組）」1994年（レコード、インク・紙）

会　期　2010年5月29日（土）～6月20日（日）
10：00～17：00（水曜日休館）

会　場　西宮市立大谷記念美術館
兵庫県西宮市中浜町4-38

料　金　一般200円、大高中小生100円

問合せ　西宮市大谷美術館
TEL.0798-33-0164



山口啓介「Calder Hall Ship-ENOLA GAY」
1994年

招待券は日本建築協会（TEL.06-6946-6981）へ。

▶松井紫朗展 Hundreds of Gardens

松井紫朗は、四半世紀に渡るアーティスト活動の中で、一貫して空間の探求を行ってきた。その作品は、“内側と外側”や“こちら側とあちら側”といった両極を連続させてたり、折り重ねたり、反転させたりすることで、日常的な感覚を裏切り、新鮮な空間概念を提示するものである。

今回は、出品作品の個々を庭に見立て、その間を歩きながら様々に設定された空間的な仕掛けを発見していただく。

本展では、大学院生時代に作られた初期の作品、1990年代に制作された彫刻作品をはじめ、多様な形式を採用する近作までを展示する。

会　期　2010年5月18日（火）～6月12日（日）
11：00～17：00　日、月曜日休館

会　場　アートコートギャラリー
大阪市北区天満橋1-8-5OAPアートコート1F

料　金　無料

問合せ　アートコートギャラリー
TEL.06-6354-5444



KETTLE STACK 銅
撮影：石原友明

▶正木美術館 2010年春季展 天遊

天遊とは、天に舞い遊ぶような悠然たる境地のことをいう。利休の師・古渓宗陳が、「利休休図」のなかにある『天遊睡後一清風』とある。（天に遊び、目覚めたあとの、あの爽やかな風のような心境）。今回の展覧会は、三つのテーマ「国宝 平安三蹟」「千利休」「人間国宝 江里佐代子」を柱に、作品たちが奏でる『天遊』の境地を展示する。



千利休図
重要文化財

会　期　2010年5月30日（日）まで
10：00～16：30（水曜日休館）
但し5/5日は会館

会　場　正木美術館
大阪府泉北郡忠岡町忠岡中2-9-26
南海本線難波駅より泉大津駅。各停に乗り換え忠岡駅下車

料　金　一般700円、大高生500円、中小生300円

問合せ　正木美術館　TEL.0725-21-6000

▶マリオ曼荼羅展

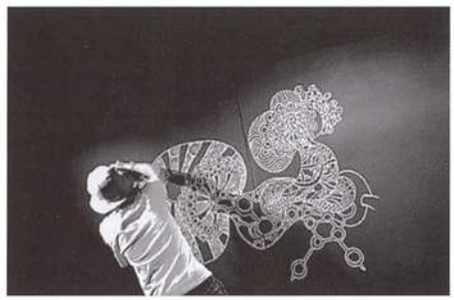
田内万里夫（1973年―）は、自らの身体から出てくる形を“曼荼羅”として制作し続けている作家である。幼少期より数ヵ国で過ごし、宗教芸術、思想哲学、トライバルアート、サイケデリックアートに触れ、2001年より現在の曼荼羅のイメージを得て描き始めた。細胞のように増殖する有機的なマリオ曼荼羅のミクロの表現にマクロの刺激を感じ取っていただけることだろう。

会　期　2010年5月23日（日）～6月23日（水）

時　間　11：00～13：00
14：00～19：00
月曜日休館

会　場　ギャラリーヤマキファインアート
TEL.078-391-1666
神戸市中央区元町通3-9-5-2F
JR・阪神元町駅より徒歩1分

料　金　無料



▶エネ蔵2010～エネルギーソリューション&蓄熱フェアー～

会　期　2010年5月26日（水）～5月28日（金）

会　場　インテックス大阪2号館
大阪市住之江区南港北1-5-102

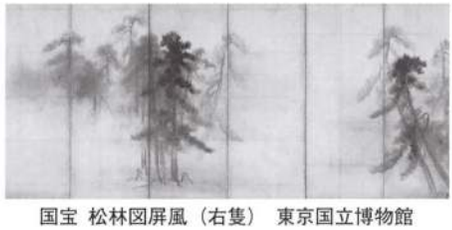
問合せ　関西電力㈱
お客さま本部営業計画グループ
TEL.06-7501-0210

■訂正

4月号information欄（p41）に、没後400年特別展覧会「長谷川等伯」を紹介しましたが、出品作品の一例として挙げた屏風絵の説明が間違っていました。

「国宝 松林図屏風（右隻）東京国立博物館」に訂正いたします。

なお、この展覧会は5月9日に終わっています。



国宝 松林図屏風（右隻） 東京国立博物館

日本建築協会 月間の動き 平成22年3月分

総　会

第2回通常総会

3月24日（水）16：00～16：40
出席者　中井会長ほか743名
（1,551口　委任状含む）
場　所　OMM 2階3号会議室
議　事（1）第1号議案
平成22年度事業計画（案）
（2）第2号議案
平成22年度収支予算（案）
（3）名誉正会員推薦

理事会

第2回通常理事会

3月24日（水）15：00～15：40
出席者　中井会長ほか43名（委任状含む）
場　所　OMM 2階3号会議室
議　事（1）第1号議案
平成22年度事業計画（案）
（2）第2号議案
平成22年度収支予算（案）
（3）名誉正会員推薦
（4）報告事項

編集委員会

第12回編集委員会

3月10日（水）18：00～19：30
出席者　設楽委員長ほか4名
議　事（1）4月号特集「食と建築・都市」の報告
（2）5月号特集「医療福祉施設におけるインテリア／仮称」の報告
（3）6月号特集「太陽光発電」の報告
（4）7月号特集「建築と石」の報告
（5）8月号特集「再生・受け継ぐ・繋がる」の報告
（6）各小委員会・分科会の報告
（7）今後の編集委員会のあり方

第12回法令分科会

3月25日（木）15：00～17：00
出席者　鷲尾幹事ほか5名
議　事（1）「法令コーナー」の企画
（2）2010年10月号特集の企画
（3）新年度の法令分科会体制
（4）委員の補充について
（5）情報交換

第4回建築系分科会

3月2日（火）19：00～21：00
出席者　下坂幹事ほか3名
議　事　2010年7月号特集企画案検討

第5回建築系分科会

3月16日（火）19：00～21：00
出席者　下坂幹事ほか2名
議　事　2010年7月号特集企画案検討

第8回施工材料分科会

3月9日（火）17：00～18：00
出席者　桜井幹事ほか3名
議　事　2010年11月号特集企画

第11回構造分科会

3月5日（金）18：00～19：20
出席者　岸本幹事ほか4名
議　事（1）新年度の構造分科会体制
（2）「構造の頁」の企画
（3）12月号構造特集

第10回設備分科会

3月8日（月）18：00～19：40
出席者　赤澤幹事ほか5名
議　事（1）見学会の企画
（2）「設備の頁」の企画
（3）2010年6月号設備特集
（4）新企画の提案

第12回作品作風小委員会

3月25日（木）19：00～20：00
出席者　居内副委員長ほか8名
議　事（1）作品の選定
（2）作品の掲載状況並びに掲載予定の報告
（3）「gallery」掲載報告・予定

第12回広告企画小委員会

3月10日（水）17：00～18：00
出席者　設楽委員長ほか3名
議　事（1）4月号「食と建築・都市」
（2）5月号「医療福祉施設におけるインテリア／仮称」
（3）6月号特集「太陽光発電」
（4）7月号特集「建築と石」
（5）広告掲載状況報告

第12回10年委員会

3月4日（木）18：30～19：30
出席者　設楽委員長ほか7名
議　事　学生のための現場見学会

第13回10年委員会

3月17日（水）18：30～19：30
出席者　設楽委員長ほか4名
議　事（1）大阪「ええとこ」創生プロジェクトの今後の進め方
（2）現場見学会の位置づけ

出版委員会

第11回出版委員会

3月18日（木）18：00～19：00
出席者　上原委員長ほか7名
議　事（1）プロのノウハウと特装本の経過報告
（2）進行中のテーマについて

事業委員会

第7回情報見学小委員会

3月11日（木）18：00～19：00
出席者　瀬戸川委員長ほか10名
議　事（1）本年度事業について見学会結果報告
（2）来年度事業案

工高生教育小委員会

第56回工高生デザインコンクール募集規定作成会

3月5日（金）18：00～20：30
出席者　神野副委員長ほか委員8名・菅審査委員長ほか審査員4名
議　事（1）第56回工高生デザインコンクール募集規定原案の検討
（2）今後の作業予定ほか

特別委員会

第5回「建築と社会」史料研究会

3月2日（火）18：00～20：00
出席者　山形委員長ほか6名
議　事（1）今後の連載企画内容検討
（2）「住まいまちづくり教育普及協議会」について

第8回　群　像

3月18日（木）18：30～20：30
出席者　本多編集委員長ほか7名
議　事　群像登場者の選出

見学会

西本願寺　拝観
3月10日（水）14：00～16：00
案　内　山本正定氏　西本願寺
引間俊彰氏　京都府文化財保護課
参加者　41名
出席者　瀬戸川委員長ほか2名

大阪建築確認検査協会の会議

3月25日（木）16：00～18：00
場　所　㈱大阪建築防災センター会議室
松村孝治副会長が出席。建築確認検査機関側から、確認申請の際の書類については審査のスピードアップを図るため、区分ごとに目次をつけていただきたいとの要望があった。

■お詫びと訂正

「建築と社会」4月号で下記の間違いがありました。関係者各位にはご迷惑をおかけいたしましたことをお詫び申し上げます。
作品作風頁「堺市立サッカーナショナルトレーニングセンター」施工名
誤　大林・西武・花谷・大容建設工事共同企業体
正　大林道路・西武造園・花谷建設・大容建設工事共同企業体

空調・衛生・クリーンルーム設備
（設計・施工）

朝日工業社

本社・本店　東京都港区浜松町1-25-7　電話03(3432)5711
大阪支社　大阪市淀川区加島1-58-59　電話06(6302)2270
支　　店　北海道/東北/北関東/横浜/名古屋/中国/九州

電気・空調・衛生・防災・産業廃水設備
設　計　施　工

ダイダン株式会社

本店・大阪本社　〒550-0002 大阪市西区江戸堀1丁目9番25号　電話(06)6441-8231
東京本社　〒102-0071 東京都千代田区富士見２丁目15番10号　電話(03)3261-8231
支　社　名古屋・福岡
支　店　札幌・仙台・新潟・大宮・千葉・横浜・金沢・京都・神戸・天理・岡山・広島・高松・熊本
営業所　帯広・函館・青森・秋田・盛岡・前橋・長野・静岡・豊田・津・富山・福井・徳山・松山・高知・北九州・鹿児島・那覇
出張所　旭川・福島・川崎・松江・徳島・下関・長崎・大分・宮崎
海外支店　シンガポール・ホンコン
技術研究所　〒354-0044 埼玉県入間郡三芳町大字北永井390番地　電話(0492)58-1511

www.naniwa.com
We have hope

■印刷事業　ポスター、カタログ、パンフレット、書籍、年鑑、社史、雑誌、文字、画像データ処理
■メディア事業　SPプランニング・コンサルティング、ITソリューション、web及びメディアコンテンツ企画制作

株式会社NPCコーポレーション

本　社　〒530-0043 大阪市北区天満1-9-19
tel:(06)6351-7271(代) fax:(06)6352-7479
第二ビル　〒530-0043 大阪市北区天満1-11-8
tel:(06)6351-0128(代) fax:(06)6351-0208
東京支社　〒105-0004 東京都港区浜松町1-2-1 一光浜松町ビル7F
tel:(03)3433-5211(代) fax:(03)5776-7733
(旧社名ナニワ印刷㈱、日本データネット㈱)

地球環境を守り、100年建築に貢献する
NACL のアルミ表面処理
株式会社日本電気化学工業所
http://nacl.jp　E-mail:sc@nacl.co.jp
本部営業部　〒560-0036 大阪府豊中市蛍池西町2丁目7番26号 NACLﾋﾞﾙ2階
TEL (06)6843-1235(代) FAX (06)6853-1632
東京事務所　〒111-0051 東京都台東区蔵前2丁目7-2 東京NACLﾋﾞﾙ
TEL (03)3862-0978(代) FAX (03)3862-7098

デンカCSAファミリー製品

●デンカCSA（膨張性混和材）　コンクリートのひびわれ防止に
●デンカタスコン（グラウト用無収縮材）　鉄骨ベース、逆打部の充填モルタルに
●デンカキューテックス（止水・補修用急硬セメント）　コンクリート躯体の漏水補修に
●デンカES（土質安定用急硬材）　地盤補強用薬注入
●デンカΣ1000（製品用超高度混和材）　コンクリートパイルの早期出荷とハイモメント製造用に

電気化学工業株式会社
近畿地区販売店

浜宗産業株式会社
TEL 本社・京都・京丹後（0772）72－2220
舞　鶴（0773）76－0133

金森藤平商事株式会社
TEL 大阪（06）6332－6861
TEL 東京（03）3272－8501

小浦産業株式会社
TEL 大阪（06）6443－6181

人が集うところに、コトブキのイスがあります。



多目的ホール RCS（電動式移動観覧席 ※壁面収納タイプ）

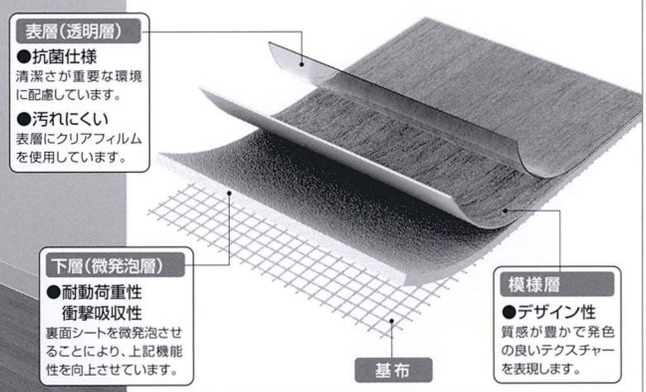
株式会社コトブキ K・O・T・O・B・U・K・I

カスタマーセンター TEL：0120-51-0213 FAX：0120-51-0216 E-mail：sales@kotobuki.co.jp http://www.kotobuki.co.jp

なにより人にやさしく、清潔で安全であること。



ホスピリュームは医療や福祉関係の施設を主な用途として開発したビニル床シートです。
シート表面のクリア層が抗菌性と汚れにくさを、下層の微発泡層が耐動荷重性と衝撃吸収性を向上させています。
また、木目を基調とした柔らかなテクスチャーは温もりと落ち着きを兼ね備えた明るい空間を演出します。
患者さんはもちろんのこと、スタッフの働きやすさも配慮しています。



「微発泡構造による耐動荷重性向上」の特許取得済み

医療・福祉施設向け抗菌ビニル床シート

ホスピリューム

規格 幅×長さ/1820×9m 厚み/2mm 梱包/9m/巻

価格 4,000円/m² 7,280円/m（材料価格・税抜き価格）

TOLI 東リ株式会社

●大阪第一営業所 TEL.06-6943-1671 ●西日本営業開発 TEL.06-6943-1645 【URL】http://www.toli.co.jp